慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究: 2011~2013年度科学研究費補助金研究成果報告書
Sub Title	
Author	安藤, 広道(Andō, Hiromichi)
Publisher	慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
Publication year	2014
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度-2013年度科学研究費補助金基盤研究(B) 「東京湾西岸地域における旧帝国海軍軍事遺跡の基礎的研究」の調査・研究成果の一部を報告するもの課題番号: 23320172 2013年度慶應義塾日吉キャンパス調整予算事業「日吉台地を中心とする台地遺跡群(先史~近現代)の調査とGIS分析」の成果も一部含む
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO10007001-00000004-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究

2011 ~ 2013 年度科学研究費補助金 研究成果報告書

2014年3月

安藤広道(慶應義塾大学文学部)編

◎本書の概要

本書は、2011 年度~2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「東京湾西岸地域における旧帝国海軍軍事遺跡の基礎的研究」課題番号 23320172、研究代表者:安藤広道(慶應義塾大学文学部)、研究分担者:松原彰子(同経済学部)、都倉武之(同福澤研究センター)、櫻井準也(尚美学園大学総合政策学部)、千葉毅(神奈川県立歴史博物館)、林宏美(公益財団法人大倉精神文化研究所)の調査・研究成果の一部を報告するものである。また、2013 年度慶應義塾日吉キャンパス調整予算事業「日吉台地を中心とする台地遺跡群(先史~近現代)の調査とGIS分析」研究代表者:高山博(慶應義塾大学文学部)の成果も一部含んでいる。

目 次

J. 44 J. 335

日吉キャンハス一帯の戦争遺跡研究の序		
本報告の構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		6
日吉キャンパス内の地下壕群の調査	安藤広道	
		7
		38
		50
		61
6. 小規模地下壕の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		64
艦政本部地下壕の調査	櫻井準也	
はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		65
		65
		68
		75
4. まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		76
矢上台周辺における小規模地下壕の調査	F 1 F 1	
		78
2. 小規模地下壕の性格 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		86
日吉台地下壕に関する音声・映像資料について		
		87
		87
3. 総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		88
戦争末期の海軍による大倉精神文化研究所の利用について	林 宏美	
はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	•••••	93
	•••••	
		102
アジア太平洋戦争前後の日吉一帯に関する手記と聞き取り		
表 2 聞き取り、または講演等の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		118

◎お世話になった方々及び機関(五十音順・敬称略)

本研究の実施に際しては、多くの方々、機関にお世話になりました。ご芳名を記し謝意を表します。(敬称略・五十音順)。

足立 寬 新井揆博 石神裕之 石橋星志 石森 光 市川岳朗 今井康博 上本進二 江田常雄 大姶良美里 大西 章 加賀斉天 掛札英邦 亀岡敦子 菊地隆男 喜田美登里 小島 博 小林正隆 佐伯史子 佐久間健吾 澤浦亮平 繁森 隆 島崎達也 十菱駿武 鈴木正博 須田英一 髙橋鵬成 高山 博 竹内俊吾 田藤光彦 谷口聡史 谷口 肇 丹治雄一 寺田貞治 冨田啓貴 長尾琢磨 名渕久芳 長谷山彰 林 美佐 肥田 康 平井誠二 廣瀬有紀雄 藤本早絵 細井 守 松浦 悟 野内秀明 山下信一郎 山田 譲 山村恭子

海上保安庁海洋情報部海の相談室 鹿島建設株式会社 神奈川県教育委員会 関東第四紀研究会 慶應義塾大学考古学研究会 慶應義塾大学日吉キャンパス事務センター運営サービス 第一航業株式会社 館山市立博物館 日本国土開発株式会社 日吉台地下壕保存の会 文化庁 防衛研究所戦史研究センター史料室 (株) 堀内カラーアーカイブサポートセンター 横浜市教育委員会 横浜市緑政局北部公園緑地事務所

日吉キャンパス一帯の戦争遺跡研究の序

- 近現代史研究と戦争遺跡研究をめぐる備忘録-

安藤広道

問題の所在

本プロジェクトの目的は、日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の現況、及びそれらをめぐる調査・研究の現状を把握したうえで、今後の調査・研究、及び活用のための基盤作りを行うことにある。本稿では、ひとまず、筆者がこうしたプロジェクトが必要と考える至った理由をまとめておくことにするが、以下に記すことは、現時点での筆者の個人的な意見であり、本プロジェクトに参加してくださった各氏の共通見解ではないことを断っておく。

アジア太平洋戦争終結から70年近い年月を経た現在、戦争体験者の減少が叫ばれるなかで、アジア太平洋戦争史の研究資料として、また何よりアジア太平洋戦争の歴史を社会と結びつける媒体として、戦争期の物的証拠、特に戦争遺跡への関心が高まっている。戦争体験者の語りや体験者との対話が、聞く者に戦争やその時期の世相を現実のものとして感じさせる圧倒的な力をもつことは、おそらくそうした場を経験した多くの方が実感していることだろう。そしてそれが、我々一人一人が戦争を深く考えるきっかけの一つとして、大きな意味をもってきたことも疑いないところである。それ故に、近い将来そうした貴重な経験の場を完全に失ってしまうことに対する危機感が高まっているのであり、その損失を補完し得る可能性をもつものとして、遺跡や遺物をはじめとする物的証拠への期待が高まってきているというわけである。

最近の新聞やテレビなどの報道をみても、戦争を現実のものとして認識するための媒体がいずれ「人から物へ」と移行していくとの認識が、これまでアジア太平洋戦争の遺跡や遺物の保存・活用を訴えてきた市民団体や研究者の枠を超えて、着実にその裾野を拡げてきていることがうかがわれる。また、行政サイドでも、こうした動向に呼応して、アジア太平洋戦争に関わる物的証拠を、自治体レベルで文化財として指定・登録する動きが着実に根付いてきている。もちろん、それを長く熱望してきた側からすれば、その動きはじれったいほどゆっくりとしたものに感じられるだろうが、すでに外堀としての世論が埋められつつあるのは誰の目にも明らかであり、もはやこの流れが逆行するとは考えにくい。楽観的過ぎるとの誹りを受けるかも知れないが、私は、アジア太平洋戦争関係の遺跡や遺物を、自治体や国

の文化財保護の枠組みのなかで保存・活用すべきという認識が拡大していくことは間違いないと思っているし、場合によってはその動きが一気に加速することも十分あると予測している。

そうしたなか、人々の戦争関係の物的証拠への関心の高まりに応え、合わせて今後の文化財指定・登録の動きに迅速かつ柔軟に対応するためにも、それらの調査・研究の蓄積が、これまで以上に重要な意味をもってくるはずである。もちろん、これまでも、戦争関係の遺跡や遺物の調査・研究自体は、各地で主に民間の団体、個人の力によって実施されてきたし、そうした地道な努力の結果、すでに多くの成果が蓄積され公開されるに至っている。また、研究成果を社会に示していく試みも、全国各地で展開されてきており、そのノウハウの蓄積も着実に進んでいると言っていい。そもそも、現在、戦争関係の遺跡や遺物に注目が集まり、文化財としての保護の枠組みが拡大しつつあるのは、そうした調査・研究を含めた、歴史実践の蓄積があってのことにほかならないのである。

しかしながら、このことは、戦争関係の物的証拠に関わ る歴史実践を、これまで通りに進めていけばいいというこ とを意味するわけではない。例えば、社会の関心が高まっ ていながら、依然国や自治体が戦争関係の遺跡や遺物を指 定・登録することに二の足を踏んでいる理由として、それ らの価値をめぐるコンセンサスが十分得られていない、と の意見も根強く聞こえてくる。また、これまでの戦争関係 の遺跡・遺物の調査・研究が民間主導で行われてきたこと もあって、そのデータが個々人の管理下に置かれることが 多く、そうした場合、折角労力をかけてまとめたデータが 十分活用されないだけでなく、最悪の場合、散逸・消滅し てしまうという問題も生じやすくなっている。アジア太平 洋戦争史というと遺跡の破壊や戦争体験者の減少という問 題に関心が集中しがちであるが、実は、これまでの活動の なかで得られた情報も、早急に保護が必要な危機的な状況 にあることを認識しなければならないのである。

もっとも、自治体側の意見に関して言えば、それを額面 通りに受け取る必要はなく、その裏に、自治体の前例主義 的な保守性、そしてそれ以上に自治体の固定的な組織・財 政の構造が、文化財保護の枠組みの拡大に即応できないと いう現実的な問題が絡んでいること見逃してはならない。 そもそも博物館学的あるいは文化遺産学的に言えば、自治体等による文化財保護は、現時点で高い価値をもつと評価されるものを対象にするだけでは不十分で、将来価値を持つ可能性のあるもの含め、長期的な視点のもとで、どれだけ柔軟な保護政策を実施できるかという点にその成否がかかっている(実際問題として、保護の対象になっているものについても、その価値に対してどこまで社会のなかでのコンセンサスが得られているのかは多くの場合不明瞭である)。その意味で、先述のコンセンサス云々といった理由をそれほど強調しても意味はなく、戦争関係の物的証拠に関していえば、現在の関心の高まりからみて、これらを保護対象とする(あるいは保護対象として検討する)理由はすでに十分あると言っていいだろう。

とはいえ、現実的な問題解決への取り組みとしては、こうした自治体の保守性に対して正論をぶつけ、物的証拠や情報の危機を声高に主張するだけでは不十分である。もちろん、正論は、現在の諸問題を考察し解決していくための指針であり、それを踏まえない小手先の対応は、結局更なる問題を生み出すことになる。とすれば、今、我々が真摯に、また急いで取り組むべきは、正論を念頭に置きながら、これまでの実践のなかで得られた情報を、多くの人たちが利用できるようなかたちでまとめ、それを継承していくための具体的な取り組みを進めること、そして、それらの情報を有効に活用しつつ、戦争関係の遺跡・遺物をめぐる歴史実践の意義を、これまで以上に明確に示していくということであろう。

私は、戦争遺跡をはじめとする物的証拠の保護をめぐり、「人から物へ」という抽象的なお題目で人々の注意を喚起する時期はすでに終わったと考えている。今後は、これまでの成果に基づいて歴史実践のための基盤の整備を進め、その上に具体的な実績を積み重ねていくことで、「人から物へ」というステレオタイプ化したイメージを乗り越えていかなければならないのである。

近現代史の特質をめぐって

私は、ここ数年戦争遺跡に関係するなかで、事あるたびに、近現代史のもつ、近世以前の研究と大きく異なる側面に気付かされてきた。また、そうしたなかで、物的証拠の保存や活用に関しても、近現代史が主導していくべき側面があり、むしろその点を積極的に評価していくことが必要なのではないかと考えるようになった。

先史時代の研究者であった私が、突然近現代史に関わる ことになって感じてきた近現代史の特質は、何といっても 歴史に関わる人々の裾野の広さであり、それ故の解釈の多 様さであった。裾野の広さに関しては、とりわけ市民レベ ルの活動が、調査・研究、そしてそれらの活用においても 主導的役割を果たしていることが新鮮であったし、ジャー ナリストや評論家といった、アカデミズムの外側に位置す る方々の手による優れた歴史叙述が数多く存在する点にも 興味を引かれた。さらに郷土史や軍事史といった特定の方 面の非常に詳しい情報をお持ちの方々にも様々な場所で出 会うことができたし、自身の体験の語りや手記も、私には それ自体が立派な歴史叙述として聞こえた。

こうした近現代史に関わる人々の裾野が広くなる背景には様々な要因が考えられるが、以下覚書的に現在の私見を述べておくと、大まかに言って以下の4点にまとめることができるのではないかと考えている。

ひとつは研究対象となり得る資料の多様さと数の多さで ある。一般的に歴史学においては、時代が下るほど資料の 種類と数が増える傾向にあるが、近現代史においては、そ れぞれが近世以前と比べて格段に増加する。例えば、文字 資料の種類と量の指数関数的増加はもちろんのこと、近世 以前にはなかった写真資料、音声資料、映像資料がきわめ て重要な研究対象となる。また、物的証拠をみても、少し 周囲に注意を向けるだけで、建物から個々の道具に至るま で、我々の日常の景観や活動の場に普通に存在しているこ とが分かるはずであるし、極め付けは、研究対象の時期を 生き抜いてきた人々、あるいはその時代のことを直接当事 者から聞いてきたり、まだ戦争の痕跡が暮らしの至るとこ ろに残っていた時代を生きた人々の存在である。このよう に、近現代史を研究するための資料は、我々を取り巻いて、 いたるところに存在しているのであり、それだけ人々が歴 史に触れる機会が多くなっていることになる。

さて、近現代史においては、近世以前の歴史学とは異なり、研究の対象となる資料やそれをめぐるコンテクストの理解、そしてそれに基づく解釈にも、我々の日常的な経験、特に言葉や概念をそのまま用いることができる場合が多い(福田 2005:58・59 頁)。この点も近現代史の裾野が広がる大きな要因であることは間違いない。これが二つめである。つまり近世史以前のように、研究者のなかで共有される、資料を分析し歴史を構築するための、テクニックや方法、専門用語や諸概念に必ずしも依存することなく、誰もが資料を対象化し歴史を語ることができるわけである。

加えて、我々が、日常的な活動のなかで、意識するしないに関わらず、過去から現在の様々な事象を時間の経過を踏まえて理解する、つまり歴史を構築するという経験を積み重ねているという点も重要である。もちろんその多くはごく限られた個人的な事象なのであろうが、より大きな社会(時には国際関係まで)に関わる事象も決して少ないわけではなく、その境界は実のところ曖昧である。細かな事

例を挙げればキリはないが、世界の全ての事象が、それを 取り巻く様々な事象との相互作用を通じ、時間的経過のな かで現在の姿になっていると考えれば、我々は、どんな事 象であっても、それを(深く)理解しようとする際に、そ れが現在の姿になるまでの歴史的解釈をその都度行わなけ ればならないし、現実にあまり疑問に思うことなくそうし ていることになる。そうした経験が、そこに接続させやす い近現代史の入口の扉を大きく拡げているわけである。

さらに、近現代史上の諸事象は、このように現在の諸事 象・諸問題の理解と結びつくことが多いが故に、歴史のも つ政治性が強く意識される場になりやすいという点にも注 目しておかなければならない。いかなる社会も、社会の成 員に共有される歴史、つまり正史(あるいは神話)を構築 しようとするベクトルを内に持っており、それは、それぞ れの社会的関係を生産・再生産するという、それぞれの社 会に固有の政治性と密接不離の関係にある(例えば家族の アルバムにも政治性がある)。正史においては、通常、そ の社会の起源に大きな関心が払われる傾向があるため、社 会によっては現在の社会成員の生涯時間から遠く離れた過 去に関心が集中する、あるいは集中するように仕向けられ ることも多い。一方で、その対極となる、現在の社会成員 の生涯時間内あるいはそこからあまり離れていない近い過 去になると、社会の成員あるいはごく近しい人物が、語ら れる歴史の主体となることも多く、また、その事象が現在 の様々な問題と絡んでいることを認識しやすいため、現在 の利害関係に対応して、その政治性、及びそれに対する批 判、政治性同士の対立といった関係が鮮明に表れるのであ る。例えば、先に述べた戦争遺跡の指定をめぐり国や自治 体が煮えきらない姿勢を取り続けているのも、まさにこの 点が関係するし、昨今の国際関係にはそうした現実の利害 関係に基づいた歴史をめぐる対立が非常にはっきりと表れ てきている。こうしたことは、国や自治体の対応をめぐる 是非も含め、問題となる諸事象に対する社会の成員の関心 を否が応でも高め、同時にそうした事象について理解しよ うとする、つまり歴史を理解しなければならないとする意 識も高めることになる。

以上のようなことが絡み合うことで、近現代史は、アカデミズムの枠を超えた多くの人々が参画して歴史を語る場になっていくわけである。もはやそこでは、近世以前の歴史において今も非常にはっきりとみられる、歴史を構築する研究者と、その受け手としての一般市民という区分が意味をなさなくなっている(福田 2005:77・78 頁)。私は先史時代研究であっても、語り手と受け手という一方通行的なある種の権力構造を止揚していかなければならないと思っているが、いずれにしても、ここには、歴史学の今後

を考えるうえで、きわめて重要な状況が現出しているよう に思えるのである。

もはや言うまでもないかも知れないが、こうした状況に おいては、国や自治体が正史の構築と教育制度によって多 様性を抑えようとする方向に動くとしても、歴史をめぐる 言説自体は必ず多様化していくことになる。そもそも如何 なる歴史も、ある限られた資料を対象にして、個々人の歴 史観、世界観、知識、経験に基づいて構築されるものであ る以上、本来的に多様性をもつものである。近現代史では、 先述のように資料がきわめて膨大かつ多様であり、個々の 研究者が扱い得る諸関係の範囲と資料の範囲が、近世以前 に比して極端に限定されるため、その傾向がより強く表れ ることになる(この点もアカデミズムの特権性を曖昧にす る方向に作用している)。また、歴史のもつ政治性、特に 国や自治体が正史とする歴史の政治性が意識されやすいこ とは、その是非をめぐる議論を活性化させることにつなが り、歴史の多様化に一層の拍車をかけることになる。ただ でさえも、近現代においては、諸事象が、世界規模に広がっ た複雑な社会関係のなかで、本来的に様々な視点・立場に よる認識の対立・矛盾を内包しつつ現象しているのであっ て、それ故に同時代の事象であっても、それに対する見方、 評価が分かれるのが常である。そうした事象を歴史のなか で評価する際に、立場、視点の違いによって、多様な意見 が現れてくることは避けられない事態なのである。

近現代史における物的証拠(特に遺跡・場所)の意義

ポストモダン的思潮のなかで強調されてきた、歴史の構 築性、相対性を否定しようとすることはもはや生産的では ない。その一方で、先述のとおり、我々は、歴史的解釈抜 きに諸事象を理解することができないし、社会は歴史の構 築を求めてくるわけであるから、どの道、我々は歴史と真 摯に向き合い続けなけなければならない運命にあることに なる。こうしたなかで、我々が注意すべきなのは、歴史が 政治性に引っ張られて、政治にとって都合のいいように構 築されていかないように気を付けること、そして、自身の 語る歴史が、他の視点・立場からの歴史あるいは他の社会 で語られる歴史から完全に独立はできないという点を認識 しておくことだと考えている。政治が歴史のあり方に及ぼ す影響は非常に大きく、なかでも近現代史は、政治に利用 されてしまう危険性と常に隣り合わせにあると言ってもい い。とりわけ、歴史が現在の利害関係に根拠を与えるとい う役割を担わされると、歴史はとたんに社会同士の対立の 急先鋒に立たされることになってしまうのである。

もちろん、歴史を構築する立場や視点の選択は自由であるべきである。ただ、自由は倫理を弁えた者だけに許さ

れる特権であることを忘れてはならず(今道2010:243 頁)、特に、民族、国家の対立のなかで、現在まで残る 深い傷跡をいたるところに残してきた近現代史において は、倫理と自由の関係に対する深い考察と配慮が必要で ある。モーリス=スズキは、「歴史への真摯さ(historical truthfulness)」という言葉を用いて歴史研究のあり方を論 じているが (モーリス=スズキ 2002:82-88 頁)、近年 の近現代史においては、オーラル・ヒストリーや映画の研 究において、史実性を超えたところで歴史へのアプローチ の正しさを議論する研究が目につくようにすらなっている (保苅 2004、岡本 2013:155-206 頁)。史実性の超克云々 は私自身まだ十分に整理できていないためこれ以上触れな いが、いずれにしても、ナショナリズムの台頭とともに、 修正主義を含め歴史の政治的な利用が目立つようになって きている昨今の世界情勢のなかで、日本国民にとって真に 誇りとなる歴史とは、こうした流れに乗じてナショナリズ ムを刺激する美辞を並べたものではなく、倫理あるいは真 摯さにこだわり悩みぬいたうえで語られるものなのではな いかと思っている。

蛇足であろうが、立場や視点の異なる歴史同士の間には、 当然激しい対立も起こり得るし、自身が正しいプロセスに よって構築したと考えているものであれば、調和的な妥協 などすべきではない。しかし、そうしたなかで我々が留意 しておかなければならないのは、自身の歴史がよって立つ 立場・視点を常に問いただすという内省的な姿勢を忘れな いことである。歴史の解釈をめぐって様々な意見が対立す ること自体は歓迎すべきである。意見の相違は、諸事象の 別な側面(観察事実、史実の多様性)に目を開かせ、解釈 の幅を拡げる方向に作用するだけでなく、自身のよって立 つ理論の狭隘さやそこに含まれる誤解や偏見に気付くきっ かけになる。つまり、それは、歴史を取り巻く世界が健全 な状態を保っていることの証拠と言ってもいいのであっ て、こうした対立の分析とその止揚という弁証法的な過程 こそが、構築的で相対的な歴史の世界において、我々を諸 事象の深い(厚い)理解へと導く道筋であることを忘れて はならない。ただ、そこに現在の国家間の利害関係や政治 などが深く絡んでくると、とたんにこの弁証法的なプロセ スが断ち切られ、歴史が狭隘な枠組みのなかに固定されて しまう。そして、いつしか歴史が政治的な対立関係の元凶 であるかのように語られるようになってしまうのである。

さて、前置きが少し長くなったが、私は、近現代史の研究においては、こうした意見の対立の分析とその止揚という弁証法的なプロセスの有効性を認識することが重要だと思っており、そのひとつの有効な手段として、物的証拠、特に遺跡を通じた歴史実践を位置付けることができるので

はないかと考えている。

物的証拠をめぐる歴史実践の特質として、資料のある場所への人の移動を伴うことが多いという点が挙げられる。特に、不動産である遺跡(場所)の場合は、そうした点が一層明瞭になる。先述のとおり、近現代史は、アカデミズムの枠を超えて、様々な人々が多様な歴史を構築する点に特徴があるが、その分、歴史を構築する主体同士の関係は希薄になりがちである。そうしたなか、そこにしかない物理的な存在である遺跡は、人々の運動が収束・結節する交差点になり得る場なのであり、それによって、歴史を構築する主体同士の接触頻度が高まる、つまり主体間の対話の機会が増加することが期待できるわけである。

物的証拠が物理的・客観的な存在であっても、物的証拠にアプローチする主体の知識・経験によって、その見え方(観察事実≒史実)は多様なものとなる。様々な立場・視点から歴史を構築する個々の主体が、そうした物的証拠に触れ、それぞれの視点による観察事実とその歴史的解釈や評価を語る機会が増えていけば、同じ空間に居合わせなくとも、同じ対象を目にしつつ、それをめぐる多様な見方が交錯する状況に接することで(これも対話のあり方のひとつ)、立場・視点の違いに基づく事実の多様性に気づくことになるし、自身の相対的な位置も理解しやすくなるはずである。もちろん、立場や視点の異なる主体同士が、物的証拠を眼前にして対話する機会が設けられれば、その効果はより高くなるだろう。

証言や手記に基づく、オーラル・ヒストリー的な歴史実 践においても、物的証拠をめぐる弁証法的なプロセスが重 要な意味をもつ。記憶もそれを文字化した手記も、それぞ れ、語られ記されているその瞬間までの主体の様々な経験 によって形成されるものであり、言葉や文字として再構成 される際の論理化(客体化)を通してはじめて具体的な形 を得る、あくまでも現在的な解釈である。そうした主体の 経験に、物的証拠が介在することによって、主体の語りに 様々な変化が生じる、例えば眠っていた記憶が呼び覚まさ れることもあるだろうし、客観的な物質世界に規定された なかで記憶を語ることによって混乱あるいは曖昧になった 記憶の整理が進むことなどが期待できる。また、聞く側に とっては、具体的な物的証拠を前にして、語り手との対話 が可能になるだけでなく、物的証拠を軸に複数の主体の語 りを相互に結びつけ、それらを比較検討し得る可能性が広 がることになる。

ヨーロッパの歴史教育においては、EUにおける多様性を内包した統合が現実的な課題となるなかで、歴史を解釈するプロセスを疑似体験させることが重視されてきているという(土屋 2013:161-163 頁)。そうすることによって、

歴史の構築性、相対性と、解釈の多様性、そして異なる歴史同士の関係について、歴史が読み解かれるプロセスから理解を深めることができ、それがEUという、多重的・統合的なアイデンティティを支える歴史観の形成につながるというわけである。物的証拠は、その物理的な現実性故に、仮に解釈が多様であったとしても、その物的証拠に関わる事象が実際に起こったことを、触れる者に強く印象付ける効果がある。特に、景観を含め、人々の五感を刺激し、様々な記憶や感覚を想起させる多様な要素からなる、遺跡(場所)であればなおさらである。そうした場において、体験者を含めた歴史を構築する主体同士の弁証法的な関係の中に加わる、あるいはその一端に触れることは、複数の感覚器官による実感が伴う分、一層、歴史そのものを理解する実践的体験として有効な手段になると言っていいだろう。

つまり、物的証拠、特に遺跡は、それらに関する歴史を 構築する側が、ただその歴史を受け手に語る場として利用 するだけでは不十分なのである。そうではなくて、そこを 訪れた個々人が、より能動的あるいは双方向的、弁証法的 な歴史実践を通じて、歴史を理解し、歴史との向き合い方 を学ぶ場として機能させていくことを、より積極的に考え ていかなければならない。実のところ、こうした物的証拠 の意義自体は、どの時代のものであっても変わらないと 思っているが、近現代史の場合は、歴史に関わる人々の裾 野の広さ故に、歴史を構築し発信する側とそれを受ける側 という構造を打破しやすいという点において、近世以前以 上に、物的証拠を保存し活用することの意義を、より実践 的に社会に示していけるのではないかと考えている。

歴史研究者の役割をめぐって

極端なことを言うと、私は、以上のような近現代史の特質からみて、近現代史の構築、語り自体は、もはやアカデミズムの枠内にいる歴史研究者の手から離れていっても構わないのではないかと思っている。もちろん、歴史研究者は、歴史の構築の一端を担い、その先頭に立ってイニシアチブを取ることはできるし、むしろそれこそが依然歴史研究者の最も重要な責務であるとの意見があっても、それに対し異論を唱えるつもりはない。しかし、仮にそうであったとしても、様々な人々が関わる近現代史研究においては、そうした歴史の構築以外にも、歴史研究者はいくつもの重要な役割を担わざるを得なくなっているのであり、今の私には、そちらのほうがより重要な意味をもっているように思えるということである。

その役割を端的に言えば、歴史実践の場の整備ということになるのであるが、これは大きく二つの方向に分けて考えておく必要がある。一つは、歴史実践の場の理論的な整

備である。先述のとおり、歴史の構築性や相対性を否定することができない以上、歴史実践の場も、歴史の多様性を前提としなければならない。そうしたなかで、歴史研究者がなすべきは、個々人がどのように歴史を語っていくべきなのか、どのように歴史と向き合うべきなのか、つまり、異なる歴史との対話の意味や、社会にとっての歴史の意義、それが故に生じる歴史と政治との関係、歴史の多様性を根底で支える倫理または真摯さなどを、丁寧に説明していくことだと考えている。

もう一つは、歴史実践の場の資料的な整備である。まず、これは当たり前のことであるが、物的証拠を活用した歴史 実践を行うためには、物的証拠を適切に保護し、有効に活 用し得るように公開していかなければならない。その場合、 その物的証拠をめぐる様々な情報の保護・公開といった側 面にまで視野を広げる必要があることは言うまでもない。 特に近現代史の場合は、資料の種類と数が格段に多くなっ ており、近世以前では考慮する必要のなかった映像・音声 資料の情報まで、その適切な保管方法、公開方法を考えて いかなければならない点に注意が必要となる。

先述のように、近現代史の場合、保守的な立場を取りがちな国や自治体が、物的証拠、なかでも戦争遺跡の保護や整備を積極的に進めるようになるには、今しばらく時間がかかってしまう可能性がある。少なくとも現状ではその体制が全くもって不十分であることは否定し難い。そうしたなかで研究者は、まず何よりも自分自身が、歴史学的あるいは博物館学・文化遺産学的立場から、物的証拠及びそれに関わる資料・情報の保護・活用の必要性を、社会に示していく重要な役割を担っていることを自覚すべきである。

それだけでなく、実際の保護や活用にあたっても、すぐに国や自治体には任せられないわけであるから、しばらくの間はそれができる唯一の機関である大学が独自の判断で実施し、その意義を世に問うことが、考え得るなかで最も有効かつ現実的な手段であることにもっと目を向ける必要がある。事実、日吉台の地下壕群も登戸研究所も、大学の中に存在していなかったら、現在のように歴史実践の場として活用されることはなかったはずである。

研究者あるいは大学の役割はまだまだある。最初のところで述べたように、近現代史には様々な人々が関わっていることもあって、調査・研究の成果が基本的に個々人に属しており、必ずしも広く活用できる状態になっていないことが多い。そうした成果のなかには、すでに散逸・消滅してしまったものや、今後散逸・消滅してしまう危険性のあるものも少なくないのである。こうした状況は、様々な人々が歴史実践に関わる近現代史においてはある意味致し方のないことであり、であるからこそ、研究者や大学が、そう

した成果の散逸・消滅の危険性についての注意をうながし、 場合によっては、自らそれらを収集・保管し、広く公開し ていくことを考えなければならないのである。

ほかにも、物的証拠や文書資料の調査方法、証言者に対するインタビューの方法、そしてそれらの記録の残し方など、折角の調査成果を将来にわたり利用可能な状態にするための適切な方法論を講じることも、研究者が担うべき重要な役割であることを忘れてはならない。実際のところ、インタビューのなかには、インタビュアーがイニシアチブをとってしまい、半ば誘導的に行われているような事例も少なくないのである。

他にも研究者あるいは大学に課せられる役割はまだまだあろうが、いずれにしても、近現代史の研究者は、様々な人々が行う歴史実践とその中で語られる歴史が意味あるものになるよう、その舞台の整備を進める、つまり縁の下の力持ちになることを最優先に考えていかなければならないように思える。そうした地道な活動に身を投じる研究者が増えていき、歴史実践のための基盤整備が進んでいけば、近現代史は、多くの人々の歴史実践が絡み合うなかで、ある種の自浄効果も発揮しながら動いていく自律的な運動体、つまりパブリック・ヒストリーとして展開していくのではないかと考えている。

本報告の構成

少々長くなったが、私が本プロジェクトで日吉キャンパス一帯の調査・研究の基盤整備を目指したのは、以上のような理由からである。本報告は、そのための第一歩ということになるが、構成とねらいを以下に説明しておく。

まず、私が、日吉キャンパス内の地下壕群についての報告を行う。具体的には、現存する遺構群の観察、測量の結果と、今回収集した過去の記録を総合することで、今後の地下壕群を利用した歴史実践の基盤となるような基礎的情報の提示を目指した。

次に櫻井準也氏と千葉毅氏に、お二人が関わった、キャンパス外の艦政本部地下壕と矢上台の小規模地下壕群の調 査報告をしていただいた。これらの地下壕は、現在は観察 できないものであり、お二人の報告は、それぞれの地下壕 に対して過去に行われた記録保存調査の正式報告となる。

都倉武之氏には、過去のインタビューの音声や映像の記録がどれだけ残っているか、調査の現状を報告していただくとともに、新たに進めたインタビューの記録の一端も示してもらった。先述のとおり、過去の調査成果をいかに将来に引き継いでいくかは、近現代史の歴史実践における重要な課題であり、今後の調査の進め方も含めて、示唆に富む内容になっている。

林宏美氏には、日吉キャンパスと同様、アジア太平洋戦争期に海軍に使用された大倉精神文化研究所に関わる調査・研究の成果の一端をご報告いただいた。林氏は、これまでも大倉精神文化研究所に残された気象部関連の資料の分析と、勤務経験者へのインタビューを通じて、大倉山における気象部の活動の研究を精力的に進められてきたが、その手法は日吉キャンパスの海軍の諸活動の、文献史学的、オーラル・ヒストリー的研究を進めていくうえで非常に参考になる。大倉精神文化研究所では、海軍気象部が残していった資料が適切に保管・公開されており、そうしたことの重要性にも改めて気づかされる内容になっている。

最後に私が、日吉の戦争遺跡に関係する方々の手記や聞き取りのリストを作成してみた。これは、今後の歴史実践のためのリファレンスという意味と、今後これらの元データの収集を進めていくための基礎作業という意味がある。

以上の報告は、今回のプロジェクトで実施した調査研究成果の一部に過ぎないし、日吉キャンパス一帯の戦争遺跡をめぐる歴史実践の基盤整備のためには、さらなる調査研究の積み重ねが必要であることは言うまでもない。その意味で、これはまだまだ最初の一歩を踏み出した程度のものであり、これからは、より大きな枠組みでこうした取り組みを進めていかなければならないと考えている。

なお、最後に述べることではないかも知れないが、私には近現代史という枠組みがまだよくわからない。この点については、近いうちに自身の考えをまとめるつもりであるが、ここでは大いに違和感をもちつつも、便宜的に明治維新以後の歴史を日本の近現代史としておいた。

引用・参考文献

安達一紀 2000『人が歴史とかかわる力-歴史教育を再考する-』教育史料出版会

今道友信 2010『今道友信わが哲学を語る一今、私達は何を なすべきかー』佐藤孝雄、池田雅之編 かまくら春秋社

岡本充弘 2013『開かれた歴史へ-脱構築のかなたにあるもの-』御茶ノ水書房

土屋武志 2013『アジア共通歴史学習の可能性-解釈型歴史

学習の史的研究ー』梓出版社

福田敏一 2005『方法としての考古学-近代における認識-』 雄山閣

保苅 実 2004『ラディカル・オーラル・ヒストリーーオーストラリア先住民アボリジニの歴史実践ー』御茶ノ水書房モーリス=スズキ・テッサ 2002『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本ー』平凡社

日吉キャンパス内の地下壕群の調査

安藤広道

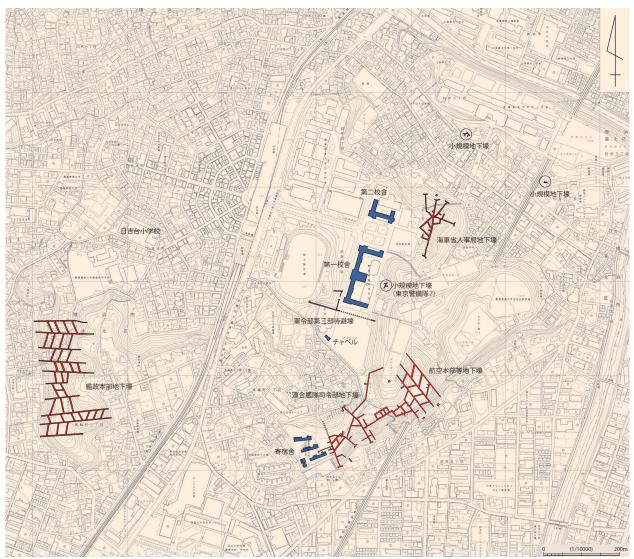
1. 調査の概要

慶應義塾大学日吉キャンパスには、我々が連合艦隊司令部地下壕、航空本部等地下壕、海軍省人事局等地下壕、軍令部第三部待避壕と呼ぶ、4ヶ所の大規模地下壕が存在する。また、これらと関係すると思われる雨水・排水用施設の遺構や、素掘りの小規模地下壕も複数確認されている。ここでは、本プロジェクトで実施した、それぞれに関わる過去の工事等の際の記録類の調査と、測量を中心とした現況調査の成果を報告する。

過去の記録・書類の調査においては、慶應義塾内に、こ

れまで知られていなかった記録・書類がまだまだ存在することが明らかになった。今回の調査では、必ずしも充分な時間をかけられたわけではないが、それでも接収終了後の地下壕の処置をめぐる文書や、不時発見の小規模地下壕の埋め戻しに関する文書をはじめとする、重要な書類が複数発見された。なかでも1975年の大規模地下壕の一部埋め戻しと地上構造物撤去の工事の際に、各地下壕の一部及び全体が測量されていたことが明らかになったのは大きな成果であった。

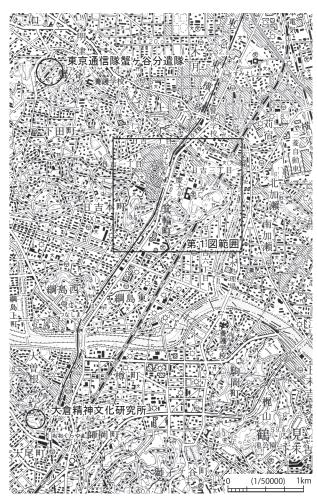
大規模地下壕群については、これまでも、米軍の指示 によって1949年に松田平田設計が測量した図をもとに、



第1図 日吉キャンパス一帯の戦争遺跡

1955年に慶應義塾が作図し直した図面の存在が知られており、これまでも随所で利用されてきた(以下、測量年を重視して、1949年測量図とする)。しかし、これらは、今回の調査で、明らかな測量の間違いや、図面上の地下壕の形状・規模とそこに記された法量が一致しない箇所が見られることが判明し、必ずしも正確とは言えないことがわかった。事実、1949年測量の海軍省人事局地下壕の図は、現在確認できる地下壕出入口の位置に重ね合わせることが、まず不可能なほどの誤差が認められる。

これに対し、今回確認した 1975 年測量の図をみると、例えば海軍省人事局地下壕の図は、現在の出入口の位置とほぼ一致することが明らかになった。また、部分的かつ粗い測量ではあるものの、連合艦隊司令部と航空本部等地下壕の図も、本プロジェクトや近年の発掘調査時に実施した測量成果と概ね一致することが確認できた。これらの図が発見されたことによって、現在出入口が全て破壊もしくは閉塞されている、航空本部等地下壕、海軍省人事局地下壕、軍令部第三部待避壕の3つの大規模地下壕についても、ある程度正確な平面図や分布図を作成することができるようになったわけである。



第2図 東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊と大倉精神文化研究所

一方、現時点で入坑可能な地下壕、及び地上で確認できる出入口や関連諸施設については、近づくことの難しい一部を除いて、今回、全て測量することにした。見学用に内部が整備されている連合艦隊司令部地下壕は、慶應義塾の管理範囲を中心にレーザースキャナーによる測量を行い、それ以外の、地上で確認できる地下壕出入口や関連諸施設は、トータルステーションを用いてその位置を記録することにした。

なお、これらの測量にあたっては、そもそも本プロジェクトの開始が東北地方太平洋沖地震の直後だったこともあって、既存の基準点を用いることは避け、新たに GPS スタティック測位によって日吉キャンパス、矢上キャンパス一帯に 5 ヶ所の基準点 (GPS-1~5)を設置して行うことにした。個々の遺構の測量は、これらの GPS 基準点からトータルステーションで適宜測量用の基準点を延伸したうえで行っている。GPS-1~5の観測方法等の詳細は、下記のとおりである。

○観測方法

電子基準点 3 点を与点とした GNSS 測量 使用した電子基準点 神奈川川崎、世田谷、横浜

観測方法	観測時間	データ取得間隔	摘要
スタティック法	120 分以上	30 秒以下	1 級基準点測量 (10km 以上)
A J T T J J K	60 分以上	30 秒以下	1 級基準点測量 (10km 未満)

○観測機器名

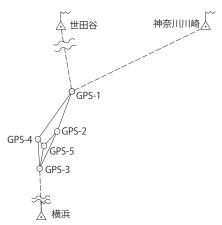
ニコントリンブル 57002台(1級 GNSS 測量機)ニコントリンブル 4600 L S3台(2級 GNSS 測量機)

○観測精度

1級基準点測量に準じる

○観測結果(新点位置の標準偏差)

最大 (水平位置) 0.9cm (許容範囲 10cm) 最大 (標高) 1.1cm (許容範囲 20cm)



第3図 GPS測量網

航空本部等地下壕については、現在、5 a を除く全ての出入口が塞がれているが、2009年の蝮谷内の発掘調査において、蝮谷に面した出入口とその前面施設の測量を行っている(慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011)。また、この時、この壕への入坑を1日だけ許可されたため、可能な範囲をセオドライドで測量した。これらのデータも、今回の全体図に加えることにした。

ただし、そのためには、東北地方太平洋沖地震による座標のズレを考慮する必要がある。そこでキャンパス内に残されている過去に行われた測量時のトラバースポイントを利用して、今回の GPS 基準点との座標値のズレを計算することにした。過去のトラバースポイントのうち、座標値が分かるものを任意に3点選び、それらを今回のGPS 基準点から測り直したところ、それぞれ北に7mm、21mm、14mm、東に243mm、247mm、264mmずれた数値が得られた。これらの数値のズレは、東京都港区麻布台にある日本経緯度原点が東方向に27.67cm動いていることからしても、地震によるものと考えていい。そこで、本報告では、2011年3月11日以前に測量したものについては、便宜的な措置として、それぞれの平均値の近似値、つまり東に25cm、北に1.5cmずらしたうえで今回の測量データと合わせることにした。

なお、標高についても一言触れておくと、今回、GPS 基準点から、キャンパス内外にある標高データの記録されたポイントを複数計測してみたところ、プラス方向で最大63cm、マイナス方向で最大43cmもの差が認められた。これはもはや東北地方太平洋沖地震による沈降(日本水準原点では-2.4cm)を考慮しなければならないようなレベルの誤差ではないため、以下、過去の標高データに触れる際には、可能な限り今回のGPS 基準点からの計測値との差を示すことで対処することにした。

こうした作業の結果、今回のプロジェクトにおいて、日 吉キャンパス内の大規模地下壕群とその関連施設、一部の 小規模地下壕の位置や規模を、ほぼ正確に地形図上に落と



写真1 GPS観測機器

すことができたと考えている。

なお、ここで報告する諸遺構には、キャンパス外の民有 地に位置するものがある。また、日吉キャンパスには一部 保福寺からの借用地があり、地下壕や諸遺構の一部はそこ に含まれている。しかし、いずれも慶應義塾所有地内の地 下壕群と一体のもの、あるいは有機的な関係にある遺構で あるため、ここで報告することにした。

2. 連合艦隊司令部地下壕の調査

(1) 全体図の作成

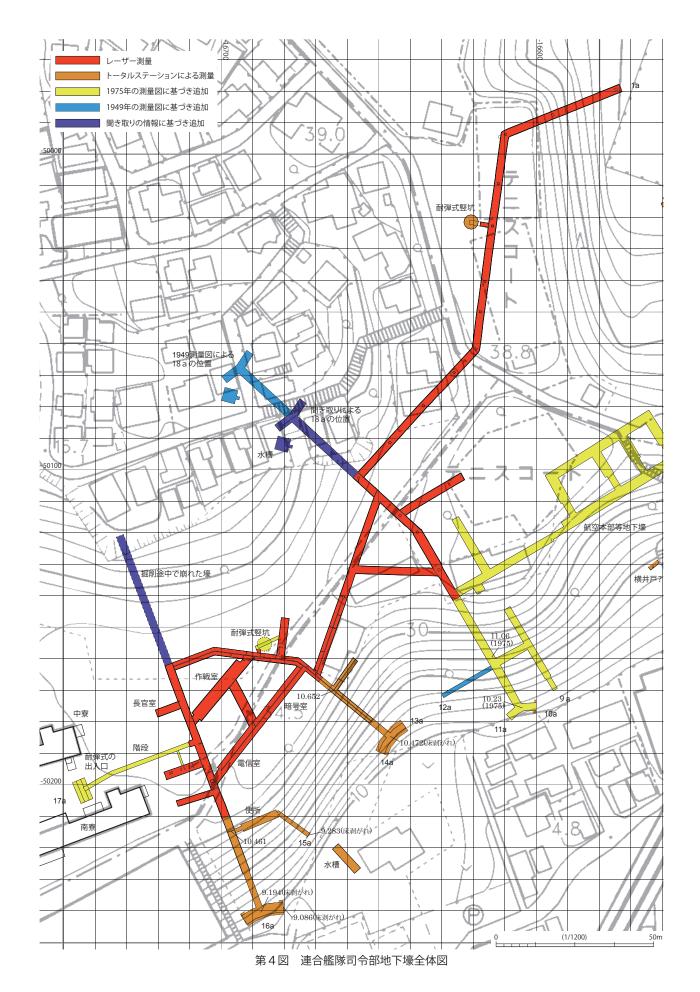
連合艦隊司令部地下壕は、日吉キャンパス南部の通称イタリア半島と呼ばれる細い尾根状の台地下に存在する。先述のとおり、この壕内の入坑可能な範囲については、可能な限り3次元レーザースキャナーによる測量を行った。一連の作業は第一航業株式会社に委託し、2012年2月~3月に壕内のスキャニングを実施し、以後2013年12月までデータの解析と作図を進めた。

第4図は、本プロジェクトの測量成果をベースにして、過去のデータ等を追加して作成した連合艦隊司令部地下壕の全体図である。具体的には、レーザー測量によって作成した平面図に、レーザー測量と同じ基準点からトータルステーションで特徴的な点を測量して作図した部分、1975年測量図及び1949年測量図からトレースした部分、聞き取り調査から推測した部分を追加した。追加部分のうち、1975年測量図に基づく部分については、先述のとおりある程度信頼できるものと考えているが、1949年測量図及び聞き取り調査による部分については、もとよりそれほど正確ではないものとして理解しておいていただきたい。

連合艦隊司令部地下壕の全体図の作成にあたり最も苦慮したのは18 a の位置であった。18 a 及びそこにつながる壕は、1949年測量図やそこに記された寸法を信頼すると、東の台地上から降りてくる階段の下を通り、階段を降りたところのT字路を北に向かった道上に開口していたことになる。一方で、都倉報告にある K 氏の証言によると(91



写真2 3次元レーザースキャナーによる測量



頁参照)、18 a とその隣の水槽は、ともに階段のある道の南に存在していたことになり、1949年測量図と位置が大きく異なってしまう。

問題は、1949年測量図とK氏の証言のどちらを重視するかであるが、K氏の証言は、18 a や水槽の位置を、生活道路であった階段のある道との関係で説明しており、かつ戦後しばらく水槽を使用していたといった具体的な経験を元に論じられている。一方で、1949年測量図では、この部分が点線で表現されており、果たして実際に測量したかも疑わしい。そこでここでは、K氏の証言に、より信憑性があると判断し、K氏の証言に基づく位置を実線に、1949年測量図の位置を点線で表現した。なお、どちらか一方を示す場合には、前者の位置を用いることにした。

なお、第4図では、断面図を示したレーザー測量部分以外の標高については数値を記しておいたが、先述のとおりこれらには注意が必要である。第4図を含めた今回報告する全体図には、GPS 基準点からの測定値を除いて、それぞれの測量年を数値の後に()を付して表示することにし、例えば第4図では、1975年測量図の標高を(1975)を付して示しておいた。ただ、今回のレーザー測量の範囲内において、1975年の測量ポイントの標高とそこに近いレーザー測量時のポイントの標高を比較したところ、口壕と仮ホ壕の交点付近では、1975年の数値が10.61 mだったのに対し今回は10.765 mとなり、X壕と仮 Y壕の交点付近では11.52 mに対し11.700 mと、今回の測量値のほうが、16~18cm高くなった。したがって、今回のレーザー測量の図や数値と1975年測量図を合わせる際には、その

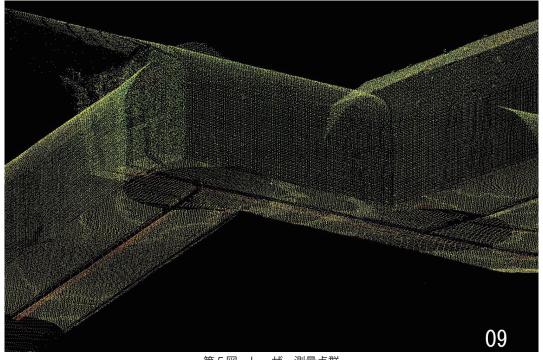
ズレを考慮しなければならないことになる。

さて、第5図は、地下壕の一部を、実際のレーザースキャナーによる点群で表示したものである。第6図~第21図は、こうした点群データに基づいて作成した、地下壕の平面図、横断面図、縦断図(側面図)、壁面・床面の展開図である。

ここでこれらの図の作成方法を説明しておくと、作図にあたっては、まず地下壕の中心軸を設定しなければならない。そのため地下壕を、直線に近い形状を示す単位に分割し、その起点・終点付近の安定的な横断面が得られる箇所を選んで仮の横断面図を描き、それぞれの重心同士を結んだ線を中心軸とした。

横断面図は、この中心軸上で任意の点を選び、そこから中心軸に直交する方向で天井、壁、床にぐるりと線を引き、その線を挟んだ5cm程度の幅のレーザー点群を表示させてトレースすることにした。平面図は、こうした横断面を連続的に作成し、壁面の下端、排水溝の上端の軌跡を3次元トレースすることで作成できる。縦断図は、中心軸を垂直方向に天井と床に投影し、横断面と同様、その線を挟んで5cm程度の幅の点群を表示させてトレースした。なお、第6~21図の縦断図には、レーザー点群を切り出した側面図を重ねて見通し図にしている。

一方、展開図については、地下壕の横断面が場所ごとに 微妙に異なることから、単純にカマボコ型の壁面を開くよ うにはいかない。そのため、今回は、次のような方法を用 いることにした。まず地下壕を、始点と終点の横断面形が ほぼ同じ大きさ・形となるようなスパンで分割し、それぞ



第5図 レーザー測量点群

れの天井の円弧に近似する直径の円筒形を重ね合わせる。 そして、その円筒の内側に円筒の中心から点群データを投 影し、円筒を床の中心線から切り開くわけである。こうし た方法によって作成した図であるため、アーチ状を呈する 天井部分は歪みの少ない状態で示すことができたが、下端 コーナー付近の壁面・床面は実際よりも縦に縮んでしまっ ている。今後も修正が必要な図ではあるが、展開図作成の 第一段階の図として、とりあえず提示しておくことにする。

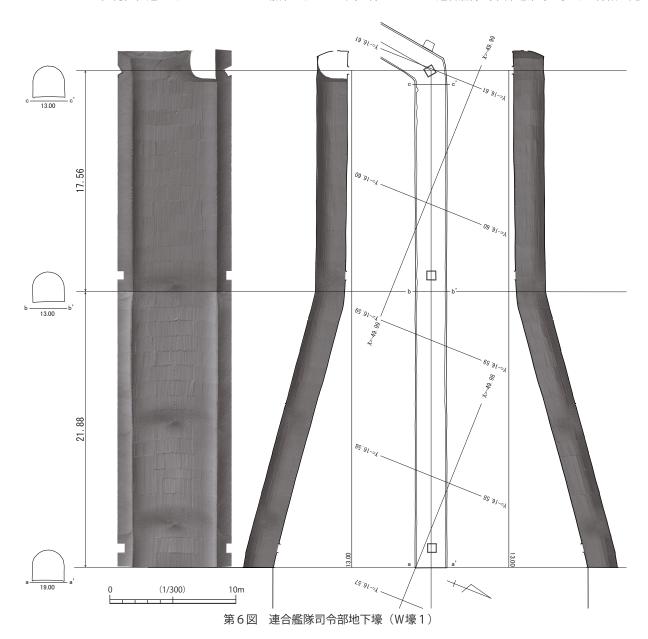
さて、足立造園内の13 a~16 a につながる部分(Z 壕南部、口壕南東部)については、現在、壕内部が物置と して使用されていることもあって、レーザー測量は不可能 であった。そのため、この部分は、トータルステーション で特徴点の座標を計測し、それぞれの点からメジャーを用 いて各部位の寸法を計測して作図することにした。また、 10 a と 11 a は、現在、近づくことができない場所にあ るため、これらについては、離れた場所からノンプリズム の方法で出入口の一部の座標値を測定するにとどめた。

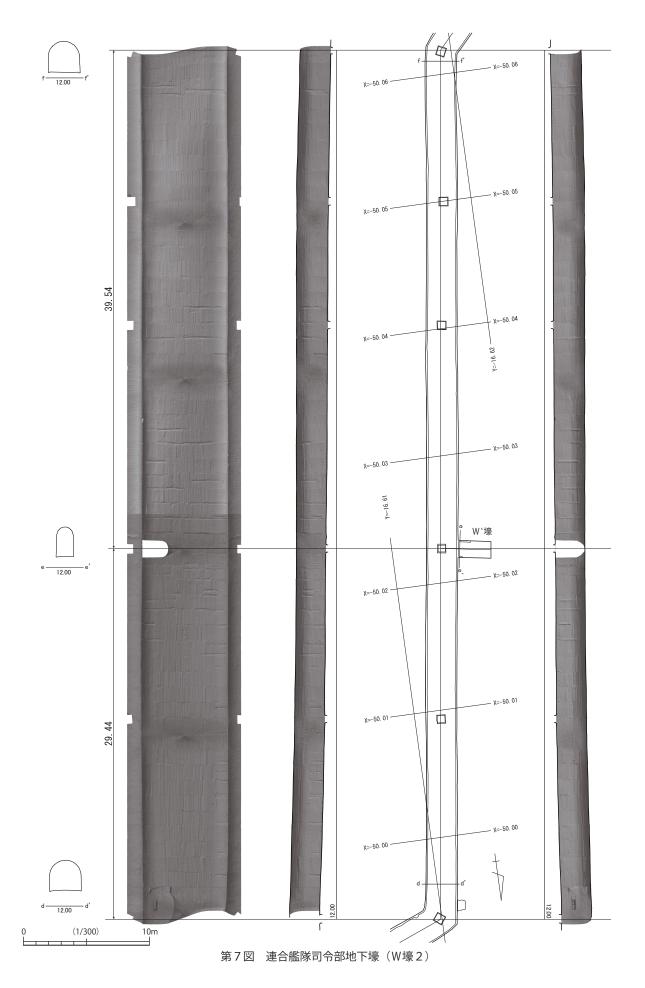
なお、今回、レーザー測量を行った範囲については、超 広角レンズのデジタルカメラを使用し、2~3 mごとに左 右の壁面、天井、床を全て写真撮影した。撮影枚数は約 1500 カットに及んだが、これらと全体図を組み合わせる ことにより、壕内の詳細を PC 上で確認できるようになっ たのは、今回のプロジェクトの大きな成果のひとつになっ た。

(2) 所見

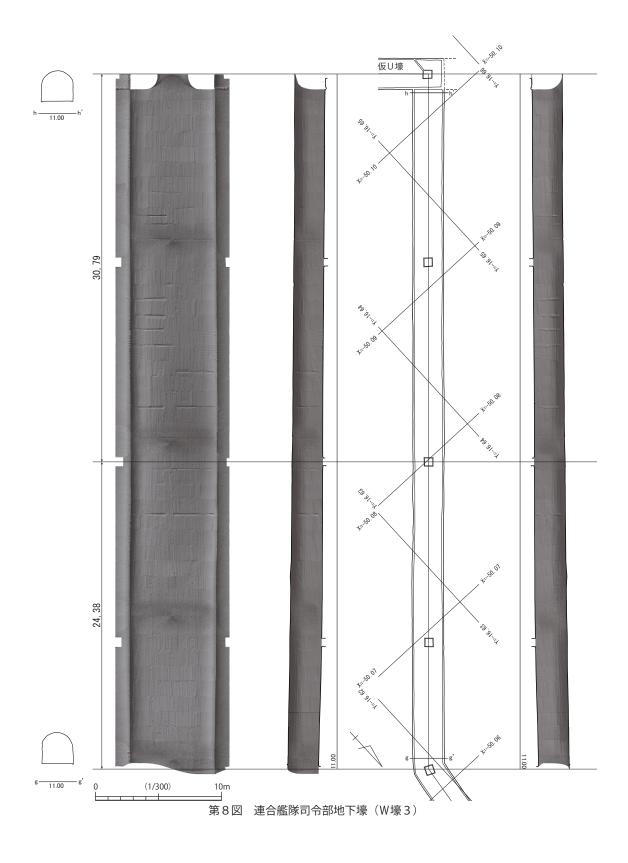
a. 地下壕の構築方法について

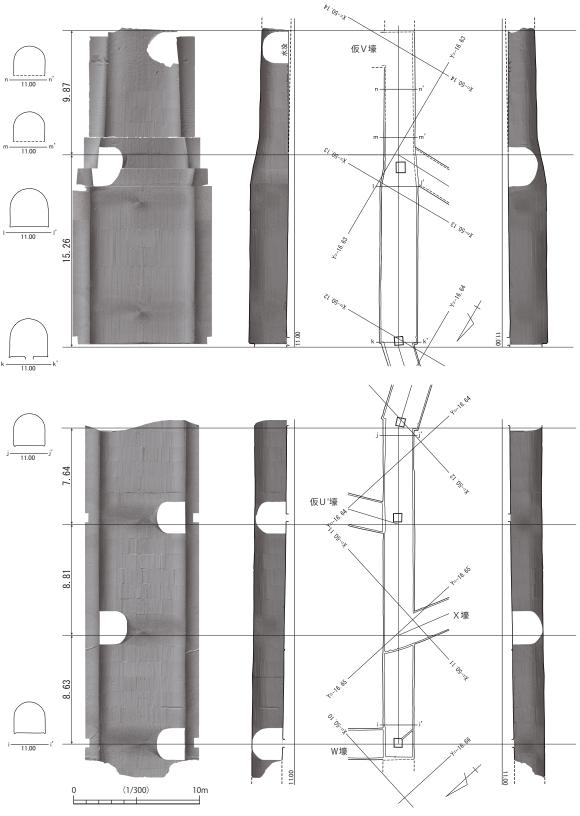
今回、測量や写真撮影を行ったことで、壕内をこれまで 以上に細かく観察する機会に恵まれ、その結果、これまで 気が付かなかった連合艦隊司令部地下壕の多くの特徴を発



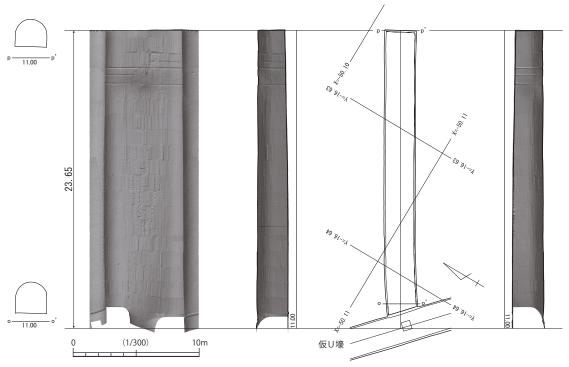


13

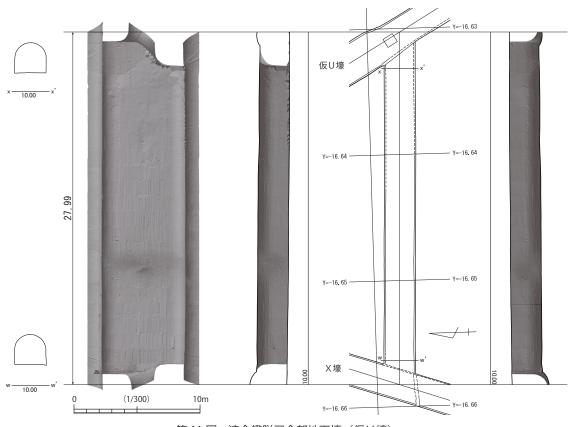




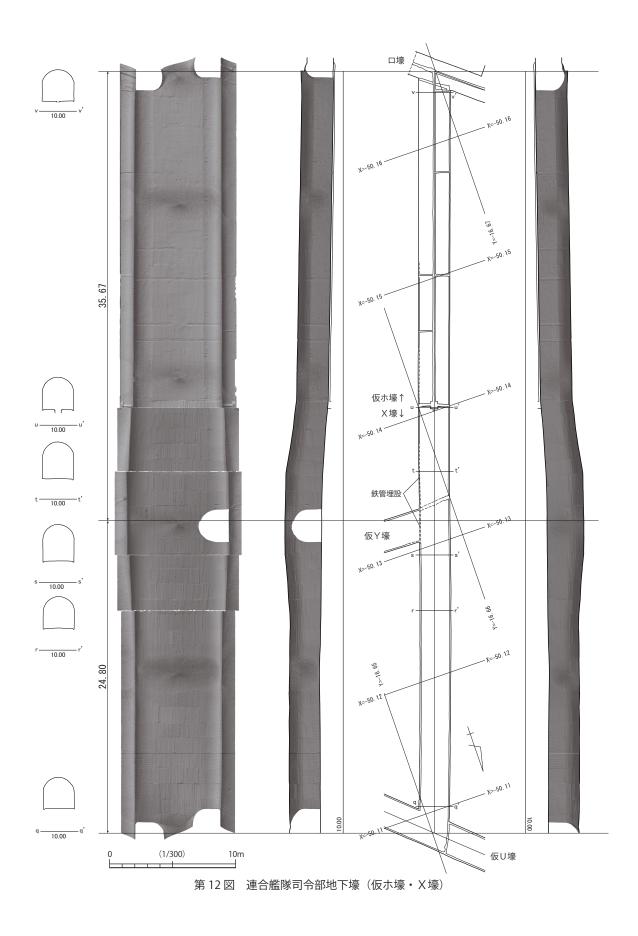
第9図 連合艦隊司令部地下壕(仮U壕)

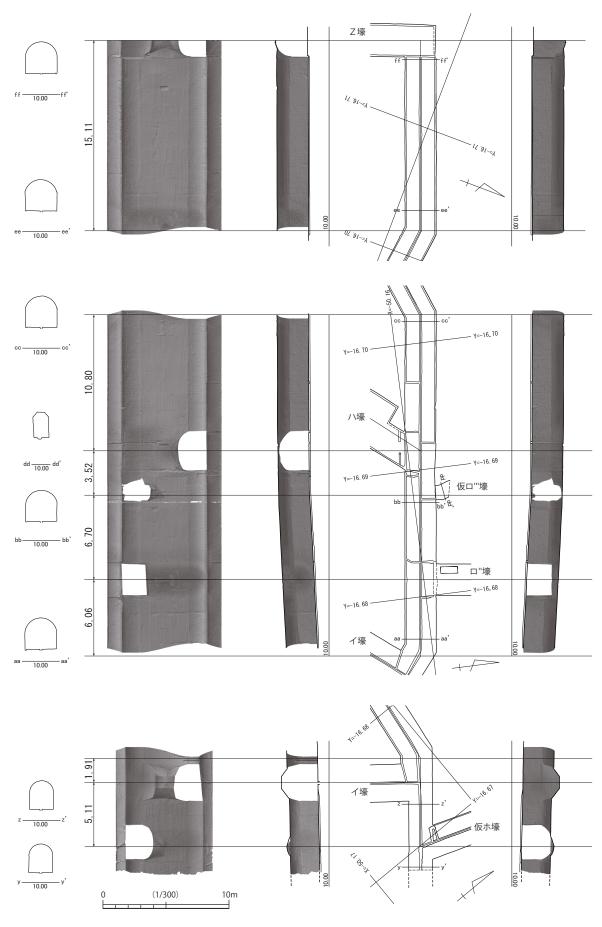


第10回 連合艦隊司令部地下壕(仮U'壕)

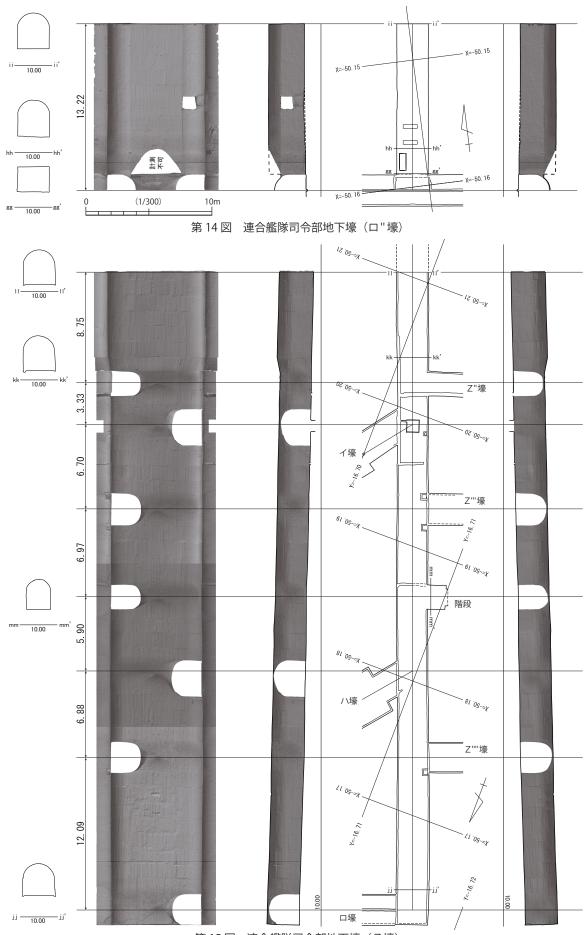


第11図 連合艦隊司令部地下壕(仮Y壕)

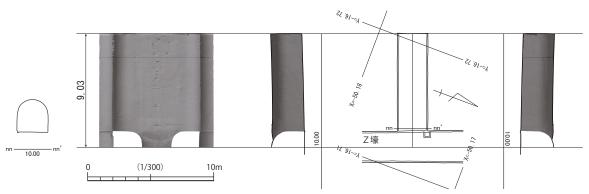




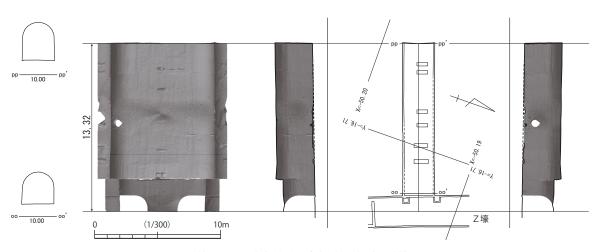
第13図 連合艦隊司令部地下壕(口壕)



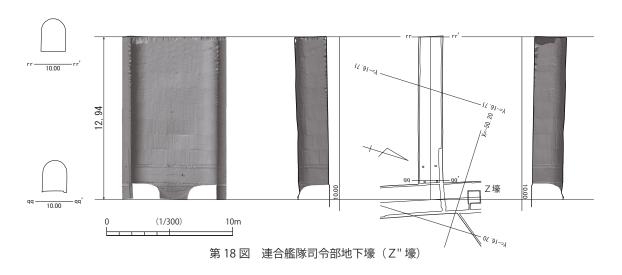
第 15 図 連合艦隊司令部地下壕 (Z壕)

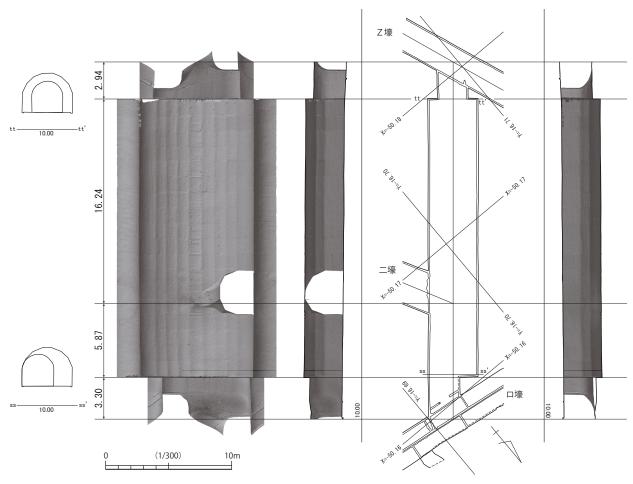


第 16 図 連合艦隊司令部地下壕(Z""壕)

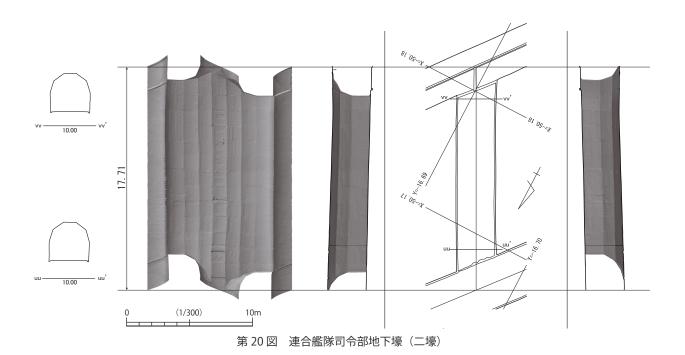


第 17 図 連合艦隊司令部地下壕(Z""壕)

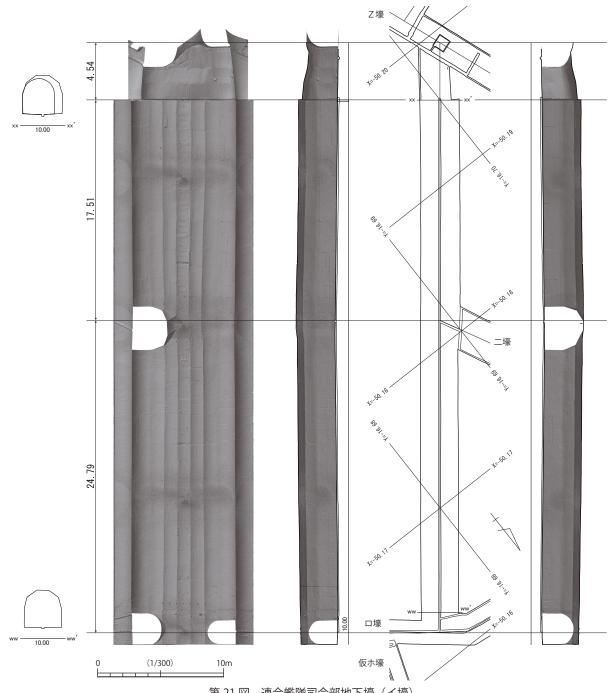




第19回 連合艦隊司令部地下壕(八壕)



21



第21図 連合艦隊司令部地下壕(イ壕)

見することができた。一連の調査で明らかになった新知見 は多岐に及んでいるが、紙数の関係上全てを報告すること は不可能であるため、ここでは、とりあえず、特に重要と 思われる、地下壕の構築方法、構築過程に関わる諸特徴と、 壕内に記された記号、そして、付属する諸施設についての 3点に絞って説明しておきたい。

まず、地下壕の構築方法、構築過程に関わる諸特徴であ るが、今回の調査によって、壕内各地点のコンクリート躯 体構築に用いられた工法の違いや、排水施設のあり方の差 異、そしてそれらの壕内での分布が明らかになった。以下、 それらを概観したうえで、連合艦隊司令部地下壕の構築過

程についての私見を述べておきたい(以下、壕の名称とし てU~Z、イ~ホ等の記号を用いるが、この点については、 本節 (2) bで説明する)。

はじめに壁体の構築方法からみていくと、これまでも知 られていたように、壁体は、天井まで一体的にコンクリー トを流し込んだ壁(w1類)と、コンクリートブロックを 積み上げた壁(w2類)に大別することができる。後者 はさらに長さ約50cm、高さ約25cmのブロックを積み上 げた部分と(w 2 a 類、口壕、イ壕北半:暗号室、仮ホ 壕、写真7~9)、それより小さい長さ約30cm、高さ約 15cm のブロックを積み上げた部分(w2b類、Z壕南部、

写真 10)に分けられる。一体成型のw1 類となる壁のほとんどは、内型枠を、長さ約 120cm(4尺)の木材で作っているが(w1 a 類、写真 3、4)、W壕の1 a 出入口付近と、仮U壕の中央付近などの一部に、より大型の長さ約240~300cm(8尺~1 丈)の板材が使用されている箇所が認められたため、これをw1 a 類として区別することにする(写真 5、6)。

天井については、横断面がアーチ型を呈する部分(c 1 類)、台形になる部分(c 2 類)、多角形の部分(c 3 類)の3つに分類できる。アーチ型のc 1 類は、いわゆる幹線にあたる壕(W、X、Z、仮U、仮Y、口、仮ホ)と、そこから分岐する部屋状の壕に広くみられる(写真 11、12、15)。一方、台形のc 2 類は、寄宿舎と地下壕を結ぶ階段、口壕に付属する耐弾式竪坑につながる通路、トイレから 15 a につながる通路など、連合艦隊司令部地下壕南半の幹線部分に付属する小型の壕にみることができる(写真 13、63)。一方、多角形のc 3 類は、同じく連合艦隊司令部地下壕の南半にみられ、ハ壕(作戦室)、イ壕(電信室、暗号室)、二壕など、幹線部分より大規模な壕に採用されている(写真 14、16、17)。

なお、天井部分の内型枠も、壁と同様、基本的に長さ約120cm (4尺)の細長い板材を、主軸方向に平行するように配列して製作しているが(c1a類)、アーチ型の天井部分では、アーチ型を作出するために、壁の板材よりも幅の狭いものが用いられている(写真11)。これ以外の寸法の板を用いた箇所は僅かであるが、仮U壕の中央付近では、壁体の板材に合わせるように長さ約300cm (1丈)の板材(頂部付近のみ5尺)が使用されている。これをc1a^{*}類としておく。

天井部分の工法としてひとつ注目しておきたいのは、天井頂部に主軸と直交する短い板材を並べる手法である(c 1 b類、写真 12)。これは口壕の西南部に限定的に認められるが、類似した手法は、多角形の天井部となるものの、イ壕の南部にもみられ(c 3 b類、写真 17)、後述する航空本部等地下壕でも確認できた。機能的には c 1 a 類と変わらないと思われるため、同一の作業者グループの手によるものである可能性が考えられる。

なお、連合艦隊司令部地下壕の天井と壁面の多くは、型枠の痕がそのまま壁となる、所謂コンクリート打ちっ放しの状態になっているが、一部に灰白色のモルタルを塗布して仕上げた部分が存在する。これらは、天井と壁全体にモルタルを塗布した箇所(m 2 類)に分けることが可能で、前者は Z *** "** 環(司令長官室)とハ壕にみられ(写真 15、16)、ともに 1 cm 前後の厚さのモルタルが丁寧に塗布されている。一方、後者

は、イ壕や仮ホ壕などに認められ、イ壕は壁の一部に帯状に(写真17)、仮ホ壕には、天井・壁面に、ややランダムに施されている(写真18)。仮ホ壕のモルタルは、そのランダムなあり方からして、壁を美しく仕上げるというよりは、補修の意味が強かったようにも推測される。ほかにも食糧庫とされる部屋(Z"壕)の入口付近のおそらく二重扉の内側にあたる部分にもモルタルの塗布が認められた。

さて、床については、主に排水施設のあり方によって分類することが可能である。壕内の大半の床は、幅数 cm ~ 20cm 程度の壁溝を伴っており、壁あるいは天井から沁み出す地下水を、まずこの壁溝で受ける構造になっている。ただし、イ壕のように壁溝が確認できない箇所もあり(写真 21)、これらには本来的に設けられなかった部分と、鉄管などを埋設して暗渠にした部分、壁溝がありながら埋もれてしまった部分などがあると思われる。ただし、壁際は石灰分や泥が凝結しやすいため、壁溝の有無を確認できなくなっているところも少なくない。

なお、天井や壁から地下水が沁み出す箇所には、浅い孤 状の鉄製の樋を、水の沁み出すポイントから壁溝まで、縦 方向に壁の形状に合わせて沿わせ、その上をモルタルで 被覆、固定して水を壁溝まで流す処置がみられる(写真 20)。こうした処置は、壕内全体認められるが、特に W 壕に多く認められ、この一帯が地下水の影響を受けやす かったことがうかがわれる。

次に、こうして壁溝に流下した水の排出方法であるが、これは3つに分類できる。一つは、そのまま壁溝を流下させる方法(d 1 類)で、 Z 壕、 X 壕、 仮 Y 壕、 口壕、 ハ壕などにみられるほか、15 a、16 a等の出入口付近も、この方法によって排水していた可能性がある。二つめは、壕中央に幅20cm前後の排水溝を設け、壁溝からこの中央の溝に、床を横切る溝を切って水を集める方法で(d 2 類)、口壕と仮ホ壕、 イ壕にみられる。 床面の溝には、いずれも上端に幅・高ともに2 cm 前後の段が作出されており、本来は板材の蓋が伴っていたことがわかる(写真21~23、25)。

三つめは、床中央に設けた集水枡に水を集め、床下に埋設した土管列あるいは暗渠で排出する方法である(d3類)。W壕、仮U壕では、1辺70cm前後の規格性のある集水桝を数m~20m程度の間隔で複数設け、壁溝から集水桝につながる暗渠で水を集め、個々の集水桝をつなぐ埋設土管を通して排水する仕組みになっている(写真24)。なお、X壕とZ壕にも、それぞれ一ヶ所ずつ集水枡が存在するが、X壕南端にある集水枡にはX壕方向の壁に、Z壕の集水桝は壕の主軸方向側の両壁に、暗渠が接続されていたことを示す方形の穴が認められた(写真25、26)。Z



写真3 コンクリート流し込みの壁(4尺の板材使用)



写真5 コンクリート流し込みの壁(5尺の板材使用)



写真7 50 × 25cm のコンクリートブロック積み上げ壁



写真 9 50 × 25cm のコンクリートブロック積み上げ壁



写真4 コンクリート流し込みの壁(4尺の板材使用)



写真6 コンクリート流し込みの壁(5尺以上の板材使用)



写真8 50×25cmのコンクリートブロック積み上げ壁



写真 10 30 × 15cm のコンクリートブロック積み上げ壁



写真 11 アーチ型天井



写真 13 アーチ型天井に台形天井が接続する



写真 15 全面モルタル仕上げ(Z""壕・長官室)



写真 17 部分的モルタル仕上げ(イ壕・通信室)



写真 12 アーチ型天井(頂部に主軸と直交する板材)



写真 14 多角形の天井(部分的なモルタル化粧壁)



写真 16 全面モルタル仕上げ (ハ壕・作戦室)



写真 18 部分的モルタル仕上げ(仮ホ壕)



写真 19 壁溝をもつ壕



写真 21 床面中央の排水溝 (壁溝はなし)



写真 23 T字路の排水溝



写真 25 暗渠と排水溝の接続した集水桝



写真 20 天井から壁に沿って貼りつけられた鉄樋



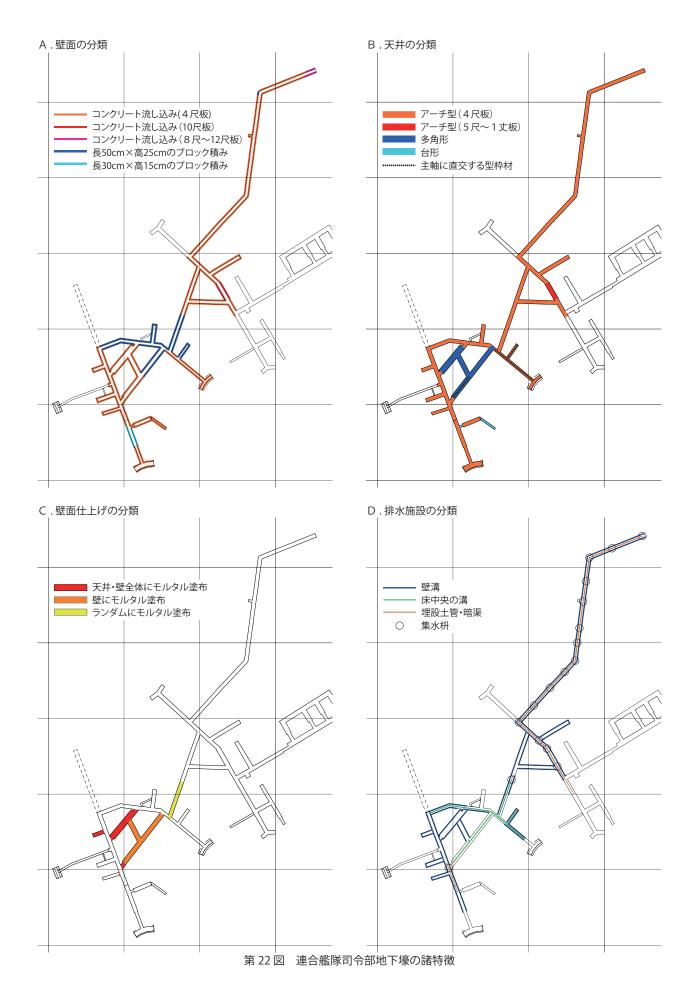
写真 22 床面の排水溝



写真 24 土管の接続した集水桝



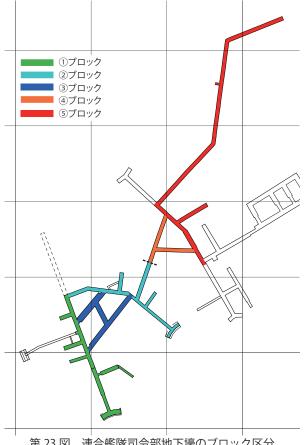
写真 26 暗渠と排水溝の接続した集水桝



壕の集水桝から出入口方向へと延びる暗渠は、そのまま床 下を通って、トイレの水洗機能に利用されていた可能性が あるが、一方の出入口と反対側に延びる暗渠は、どこまで 延びているかよくわからない。X壕南端の集水桝につなが る暗渠も同様である。ただし、ともに、それぞれの暗渠に 水を導く施設が壕内に見当たらないことからすると、Z壕 北側やX壕の床下全体に暗渠が作られていたとは考えに くいところがある。

なお、これらの排水方法の違いは、床面の横断面の形態 とも関係する。 d 1 類と d 3 類となる箇所では、基本的に 床面は水平か微妙に中央が高く作られており、水が壁側の 壁溝に流れやすくなっている。これに対し、中央に溝をも つd 2 類を採用する箇所では、壕中央に向かって床面が微 妙に傾斜している箇所が目立ち、床面の水が中央の溝に流 れ込むように作られている。

以上のように、連合艦隊司令部地下壕の構造や構築方法 は一様ではなく、壁、天井、床それぞれに複数の特徴をみ ることができた。むしろ、こうした多様な特徴がみられる 点こそが、この地下壕の最大の特徴と言ってもよさそうで ある。これらの諸特徴は、決してランダムなあり方をみせ ているわけではなく、その分布と組み合わさり方には、い くつかの明確なパターンが認められる。そこでここでは、 そうしたパターンに基づき、次の5つのブロックを設定



第23図 連合艦隊司令部地下壕のブロック区分

しておくことにする(第23図)。すなわち、①ブロック: 壁w1a類、天井c1a類、床d1類を基本とするZ壕、 ②ブロック:壁w2a類、天井c1a・b類、床d2類の 口壕と仮ホ壕、③ブロック:壁w1a類、w2a類、天井 c 3類、床d 1類を基本とするイ・ハ・二壕、④ブロック: 壁w1類、天井c1類、床d1類のX壕と仮Y壕、⑤ブロッ ク:壁w1a類、天井c1a類、床d3類からなるW壕、 仮U壕の5つである。

このうち、②と③は、規模や天井の形態に大きな違いが あるものの、イ壕北半の壁がw2a類で構築されているほ か、イ壕南半の天井頂部に主軸と直交する方向の板材(c 3 b類)がみられ、さらにイ壕の中央に排水溝が設けられ ているなど、いくつかの特徴が共有されている。また、① と③にも、壁溝のみで排水する d 1 類がみられる点や、モ ルタルによって仕上げた部分の存在などの共通点がある。 モルタルについては②にも部分的に認められる。

一方、⑤は、仮U壕の中央付近で型枠の板材に違いがみ られるものの、壁体、天井、排水施設に概ね強い規格性が 認められる。④も地下に埋設された土管を伴っていないこ と以外は⑤との類似性が強い。なお、④に、⑤のようなd 3類の排水方法が採用されなかったのは、溝による排水設 備しか持たない仮ホ壕や口壕に、湧水点の多い W 壕や仮 U壕の水を流すことを避けたためと考えられる。X壕の床 面レベルを見ると、仮 U 壕に近い部分は仮 U 壕側に傾斜 しており、仮Y壕も仮U壕側に水を流すように作られて いる。そのため、この区間についてはd3類にしなくても 良かったのだと考えられる。

以上をまとめると、①~③ブロックは、壕ごとに異なる 特徴がみられる一方で、複数の壕にまたがっていくつかの 特徴が共有されていることになる。仮にそれぞれの特徴に 機能上の差異がさほどないとすれば、これらは、異なる技 術を保持した複数の技術者集団が混在するような状態で構 築されたものと推測することができる。これに対し④・⑤ ブロックは、技術的により統一された状況で構築されたと 考えていいことになる。

連合艦隊司令部地下壕は、地下壕勤務経験者のいくつか の証言や手記等からみて、1944年8月15日から工事が 開始され、秋には一応使用できる状態になったものの、そ の後も追加工事が続いていたと推測される(慶應義塾大学 文学部民族学考古学研究室 2011:12・13 頁)。これらの 工事は、内地初の大型設営隊である第三○一○設営隊に よって行われたとされているが、着工当初は地下壕建設の 経験者がいなかったため、一足早く日吉入りし軍令部第三 部待避壕を建設していた第三○○設営隊の協力を仰いだと いう (伊東 1972:302・303 頁)。第三○○設営隊は秋 のうちに館山に移動し掩体壕建設に従事したとされている ため、その後は第三〇一〇設営隊が中心になって地下壕建 設にあたったと考えることができる。

とすれば、技術的に統一性のない①~③ブロックのあり方は、この部分が、依然第三○一○設営隊がしっかりとした技術をもっておらず、第三○○設営隊に協力を求めつつ工事に当たっていた時期のもの、つまり秋までに使用可能となった初期工事の範囲であることを示していると考えられる。これに対し、④・⑤ブロックの統一感のある様相は、この部分が、第三○一○設営隊がある程度経験を積み、安定的な技術をもつようになった段階で追加された部分であることを示しているようである。

実は、X壕と仮ホ壕は、排水施設等の特徴に違いが認められるだけでなく、床面に 60cm 近い高低差があり、そこでは、ほぼ水平の仮ホ壕の床に向かって、X壕の床がスロープ状にすり付けられていることがわかる。このことは、先に完成していた仮ホ壕に、仮U壕方面から掘削したX壕を連結させる際に、60cmを超える誤差が生じてしまい、それをスロープによって調整したことを示していると考えていい。その際、仮U壕から仮ホ壕に向かって緩やかな傾斜をつけるのではなく、仮Y壕とのT字路あたりから、比較的急な傾斜ですり付けたのは、先述のとおり、仮ホ壕よりも標高の高いW壕や仮U壕の水を、排水能力の劣る仮ホ壕に流さないことを考慮した結果であると推測される。こうした点も、仮ホ壕とX壕の境で構築時期が異なっているとの上記の推測を傍証するものとなろう。

なお、今回、仮U壕の中央付近において、壁面に2枚のケヤキの葉の圧痕が残されているのを発見した(写真27)。このことは、この部分がケヤキの落葉時期に構築された可能性を示唆するものであり、仮U壕が秋以降に構築されたことを示す証拠のひとつになると考えている。

b. 壕内の名称について

壕内には実に多くの落書きや記号等が存在するが、今回 調査を続けるなかで、壕内全体に点在する朱墨筆書きの記



写真 27 仮 U 壕中央発見のケヤキの葉の圧痕

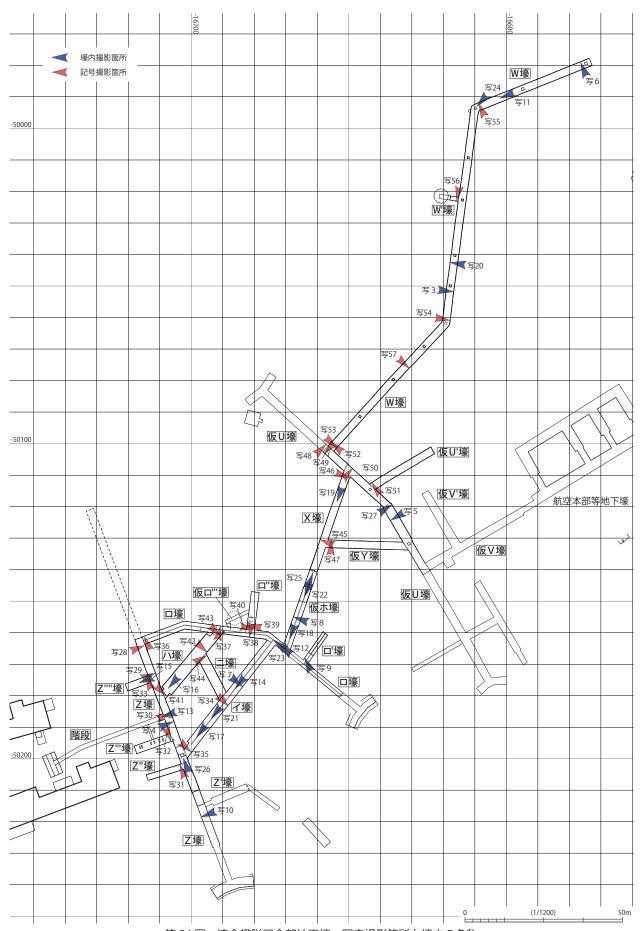
号の存在に目が留まった。これらは、後述するように、記された場所や、記号の選択、記し方に一定の規則性があり、ある時期に記された壕内の各部分の名称と考えていい。もちろん、これらが記された時期の特定は厳密には困難であるが、寄宿舎から階段を降りた司令長官室や作戦室のある壕に、連合艦隊の旗艦を示す意味でも用いられていた「Z」の記号が付されている点が意味深長であり、「イロハ」の使用や、剥落の度合いなどをみても、地下壕構築時、あるいは使用時に記された可能性が充分に考えられるものである(もちろん、その後の測量時のものである可能性も捨てきれない)。そこでここでは、これらの記号の報告を行うとともに、この記号に基づいて、壕内の名称の整理を試みたいと思う。

この朱墨筆書きによる記号は、地下壕のほぼ全体に、合計 30ヶ所確認できた。先述のとおり、司令長官室のある階段直下の壕には、3ヶ所に「Z」と記されている(写真 $28 \sim 30$)。したがって、この壕をZ壕と呼ぶことにする。このZ壕につながる電信室と暗号室の壕には、その南端と中央付近の壁に「Y」の記号がみられ(写真 Y 34、35)、Y 2壕から Y 13 a、Y 4 aへと屈折しながらつながる壕には、Y 3 ヶ所に「Y 15 にしまされていた(写真 Y 36 で Y 36 を記されていた(写真 Y 37 に「Y 26 によっていた(写真 Y 37 に「Y 37 に関立と記されていた(写真 Y 38 には「Y 37 に関立と記されていた(Y 38 には「Y 39 には、Y 40 に関立と記されていた(Y 40 に対したのまま、Y 2 に関と呼んでいいだろう。

ロ壕から北に伸びる壕には、2ヶ所に同様の記号が認められ、これらはともにきわめて不明瞭ながら辛うじて「X」と読むことができた(写真 45、46)。「X」の記号は、ともに集水桝より北側に認められることから、その部分をX壕と呼んでおく。集水桝より南側には記号を見つけることはできなかったが、先述のように、集水桝より南側は、Z壕やイ〜ニ壕と同時に造られた、第一段階の地下壕と考えられるため、この部分はX壕とは違う名称がつけられていたと仮定し、二壕に続けて、仮ホ壕と仮称しておく。

X 壕の北端で T 字に接続する、10 a・11 a と 18 a を 結ぶ壕には、3 ヶ所に記号が確認された。うち 2 ヶ所は 判別不可能であったものの(写真 49、50)、18 a 方面の フェンスの外側のものは、はっきりと「U」と読むことが できた(写真 48)。そこでこの壕にU という名称を与えた いところであるが、一方で、「U」の記号は、この壕の 18 a 側の部分を指していた可能性もあるため、とりあえずここでは、10 a・11 a と 18 a を結ぶ全体を指す場合には、 仮U 壕の名称を用いておくことにする。

この仮U壕から1 a に向かう壕には、4 ヶ所に「W」の記号が認められた(写真 $52 \sim 55$)。したがって、この部



第24図 連合艦隊司令部地下壕 写真撮影箇所と壕内の名称









写真 52 「W」



写真 54 「W」



写真 56 「W'」

分全体をW壕と呼んで差し支えないだろう。このW壕には途中に「98」の文字もみられるが(写真 57)、これが何を意味するかはわからない。なお、X壕と仮U壕を結ぶ短い壕にも記号が確認できたが、文字の識別は困難であった(写真 47)。ただ、後述する「」はないように見えるため、<math>Z壕とX壕の存在に鑑み、この部分を仮<math>Y壕と呼ぶことにした。また、仮U壕から航空本部等地下壕につながる壕に対しては、今のところ何も根拠はないが、未使用の文字を当てて、仮<math>V壕と仮称しておく。

これらの壕には先が行き止まりとなる部屋状の壕等がい くつか付属しているが、これらの壕には、付属する壕の文



写真 53 「W」



写真 55 「W」



写真 57 「98」

字に「'」をつけた記号が記されていることが明らかになった。例えば、Z 壕に付属する食糧倉庫とされる壕には「Z"」が、バッテリー室とされる壕には「Z"」が、司令長官室には「Z""」の記号が記されている(写真 $31\sim 33$)。食糧倉庫が「Z"」であることからすると、記号の存在は確認できなかったものの、その南東側にある水洗便所のある壕が「Z"」だったと推測できる。

一方、ロ壕に伴う機械室とされる壕には「ロ"」という記号が確認できた(写真 39)。とすれば、こちらも記号そのものは確認できたわけではないが、13 a、14 a出入口に近い位置にある倉庫とされる壕が、「ロ」であったと考

えて間違いないだろう。なお、竪坑につながる壕にも「'」を付した名称があったと考えられるため、そこは仮口"'壕としておく。

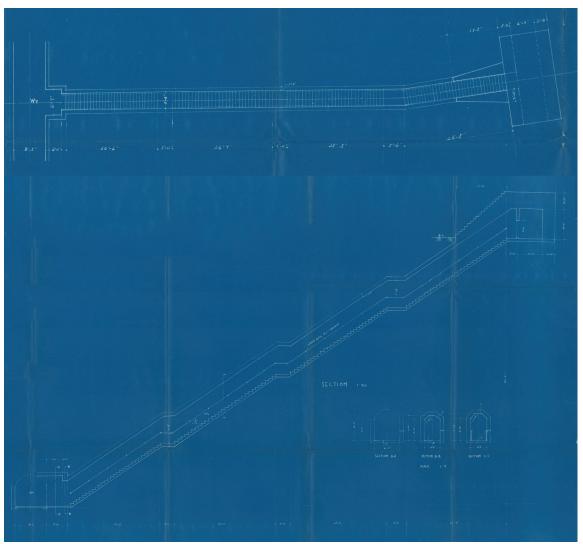
仮U壕に付属する部屋状の壕は、記号自体は確認できたものの、識別は不可能であった(写真 51)。ただ、「」が付されているようにも見えるため、この壕を仮U'壕と呼んでおきたいと思う。同様に、仮V壕に接続する部屋状の壕については仮V'壕とする。なお、W壕から耐弾式竪坑につながる壕にも記号が付されており、これは「W'」と読むことができた(写真 56)。

以上が確認できた記号とそこから整理した各壕の名称であるが、これらの記号は、基本的に壕同士が接する付近の壁に記されており、T字路に立って周囲を見渡せば、記号に目が留まる位置に意識的に記されていると考えていい。この点から考えても、これらの記号が、壕の名称を表したものであることは間違いなさそうである。

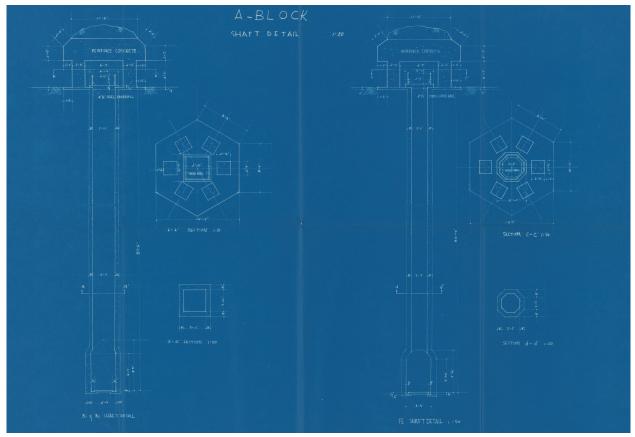
ところで、この記号のあり方は、アルファベットの末尾 あたりの文字が使われている点、そしてある一角のみに「イ ロハ」が使用されている点など、壕の名称のつけ方としては、かなり変則的であるように思われる。ただし、この一見不思議な記号のあり方も、先に推測した地下壕の構築過程と重ね合わせると、より興味深いものにみえてくる。

先述のとおり連合艦隊司令部地下壕は、全体が一度に完成したのではなく、まず仮ホ壕以南が使用可能となったと推測できる。仮にこれが正しいとすると、最初に完成した部分では、長官室のある壕に「Z」という名称を与え、それ以外の壕には「イロハニ(ホ)」を用いたことになる。注目すべきは、この時点で、長官室のある壕だけに、アルファベットの「Z」の記号が使用されたということであり、そうだとすると、これは単なるアルファベットの一文字ではなく、やはり、海軍において特別な意味をもつZ旗を意識した記号であったことを想像したくなってくる。

もちろん、その後に付け足されたX壕以北の壕に、「イロハ」の続きではなく、「Z」から続くアルファベットが用いられた理由は不明であるし、この点について無理な想像を重ねることは控えておくが、少なくとも以上のような



第 25 図 1949 測量図の 17a 地上構造物と階段(1/300)



第 26 図 1949 測量図の耐弾式竪坑(1/200) 左:仮口"壕 右:W'壕

第一段階部分の記号のあり方を見る限りでは、これらの記号が、地下壕構築時に記されたものである可能性が想定できそうである。その正否は別にしても、これまで連合艦隊司令部地下壕に限らず、日吉キャンパス一帯の地下壕群には、地下壕各部分を示す名称が定まっていなかったために、これまでも記述にあたって不便をきたしていた。そうした意味もあり、今後、この記号に基づいた名称で連合艦隊司令部地下壕の各部分を呼ぶことを提案したいと思う。

c. 連合艦隊司令部地下壕に付属する施設について

連合艦隊司令部地下壕に付属する、あるいは関係した施設として、現在までにその存在(かつて存在していたこと)が確認できているのは、17 a 出入口に構築されていた耐弾構造の地上出入口、2ヶ所の竪坑上部に構築されたキノコ型の構造物(耐弾式竪坑)、15 a 出入口の延長線上に造られた水槽、1949年測量図に記された、18 a の南側にあった水槽である。このうち、現存しているのは、W'壕に付属する耐弾式竪坑と15 a 前面の水槽のみである。

他にも、16 a の近くにも水槽が存在していたとの証言を得たが、写真や他の人々の証言などによる傍証は得られなかった。また、9 a \sim 16 a の東南側に、大規模なカマボコ兵舎が建てられていたとの証言もあるが(下村1994:9頁)、現地踏査、航空写真でも確認できなかった。

17 a の耐弾式出入口については、いくつかの写真が残

されている(例えば、慶應義塾大学寮和会 1987 の巻頭図版 19頁)。また 1949 年測量図には微細図があり(第 25図)、1975 年測量図にも平面形が描かれている。それらによると、階段を覆う部分はアーチ型を呈しており、左右に分かれた出入口の覆いは立方体に造られ、階段の覆い部分に造られた階段でその上に登ることができるようになっていたことがわかる。

階段と出入口の位置関係については、1949年と1975年の図で若干の違いがあり、1949年図では、階段とそこからT字に分かれる出入口が90度の関係に描かれているが、1975年図では若干の角度がついている。その正否は確かめようもないが、一応ここでは、全体的に正確な図面と評価できる1975年測量図の位置関係を採用しておく。

なお、この出入口が壊されたのは 1975 年 12 月のことで、後述する耐弾式竪坑の一つ、航空本部等地下壕、海軍省人事局地下壕の地上施設と一緒に撤去されたことが慶應義塾の記録に残っている。

さて、この地下壕には、2ヶ所の竪坑があり、それぞれに耐弾式構造物が構築されていた。このうちW'壕に付属する一基は、保存された弥生時代竪穴住居跡群内に存在することもあって破壊を免れ、日吉台一帯の大規模地下壕群において、唯一の見学可能な地上構造物になっている(写真58)。この耐弾式構造物は、竪坑を中心に放射状に配置



写真 58 W'壕耐弹式竪坑



写真 60 15a 出入口前面大型水槽(南東半)



写真 62 14a 出入口外観

された 6 本の太い角柱の上に、厚さ 1 m以上、対辺間 4.45 mを測る、正 12 角形を呈する総コンクリート製の屋根が乗ったものである。

この構造物については、1949年測量図に詳細な図が含まれているが、屋根の形が正六角形に描かれているなどの明らかな測量ミスが認められる(第26図)。また1975年測量図においても正八角形に描かれており(第28図)、同様に正12角形とは認識できていなかったことがわかる。ちなみにこれまで何度もこの構造物を目にしてきた地下壕保存の会の方々に、現地で構造物の角の数を聞いてみたところ、誰も正しくは答えられなかった。そうしたことから



写真 59 15a 出入口前面大型水槽(南東半)



写真 61 15a 出入口前面大型水槽(北西半)



写真 63 15a 出入口外観

みて、1949年、1975年の測量図にみられる角数の誤りは、 測量にあたり、これらの構造物の直径あるいは対辺間の長 さを測り、その数値に基づいて見た目で判断した角数の多 角形を描いたことによるものと考えてよさそうである。

もう一基の耐弾式構造物は、仮口"壕に付属していたもので、17 a の出入口とともに 1975 年に破壊された。こちらは今のところ、この構造物の写った写真を確認できていないため、その詳細はよくわからないが、1949 年測量図では、W'壕付属のものと同様、正六角形に描かれており、1975 年測量図でも八角形になっている。こうしたことからすると、W'壕付属のものと同じく正 12 角形だっ

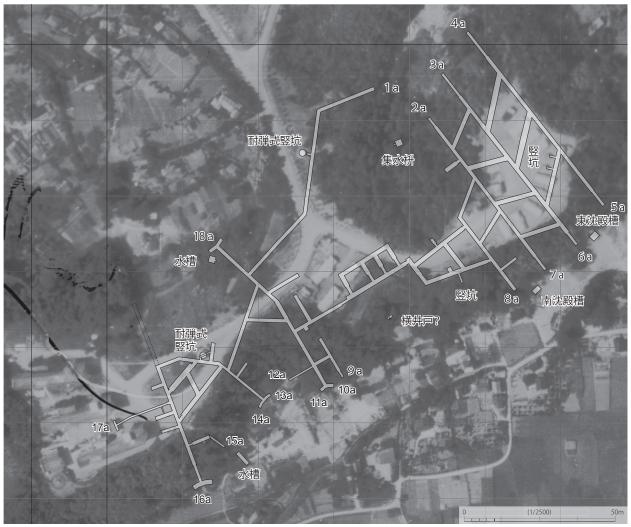


写真 64 1947 年の航空写真 1 (国土地理院提供 米軍撮影 USA-M372-15)

たと考えるのが妥当なように思える。ただし、先述のように、口壕とW壕は構築時期が微妙に異なるため、全く同じ形態、規模であったという確証はない。1947年に米軍が撮影した航空写真では、円形に近い形態をしているように見えるが(写真 64、65)、いずれにしても、その形態の詳細をめぐっては、今後の写真等の発見に期待するほかない。

15 a 出入口に付属する水槽は、かなり破壊が進んでいるものの、ほぼ全体の形態をうかがい知ることができ、長辺 $10.4 \,\mathrm{m}$ 、短辺 $2.6 \,\mathrm{m}$ の細長い長方形の水槽であることが明らかになった(写真 $59 \sim 61$)。現在、地上より80cm 弱の高さのコンクリート製の壁が残っているが、深さや天井の有無については確認できなかった。壁のコンクリートは無筋で、壁面には型枠の木材の後が明瞭に残っている。15 a の奥が水洗便所だったことからすると、汚水用の沈殿槽であった可能性が高そうである。

18 a 出入口に付属していた水槽は、1949 年測量図に描かれているほか、都倉報告の K 氏がかなり具体的なことを証言してくれている。こちらはあくまでも 1949 年測量

図を信用すればであるが、約 4.7×4.5 mの略正方形を呈する大型の水槽だったようで、一辺約1 mの枡が付属していたとみられる。その規模や形態、位置からみて、航空本部等地下壕のところで説明する、大型集水桝に類似したものと推測される。ただ、K 氏の証言では、地下壕内で利用する水を確保するための貯水槽とされており、その機能を明らかにするためには、新たな証拠の発見が必要である。

3. 航空本部等地下壕の調査

(1) 全体図の作成

航空本部等地下壕は、連合艦隊司令部地下壕の北東、現在自動車部の練習場となっている台地の下に展開する。連合艦隊司令部地下壕の仮V壕と接続しており、両者を合わせてひとつの地下壕と考えることも不可能ではない。事実、1949年の測量図においては、合わせてブロックAとされており、ここで用いている出入口の番号も、ブロックA内で連番になっている。しかし、ここでは連合艦隊司令部地下壕が当初から連合艦隊司令部用の地下壕として造ら



写真 65 1947 年の航空写真 2 (国土地理院提供 米軍撮影 USA-M388-9)

れたのに対し、航空本部等地下壕は移転部局が決まっていない状況で造られたという建造経緯の違い、また連合艦隊司令部地下壕が、作戦室や長官室等の重要部分の護りを意識した構造になっているのに対し、航空本部等地下壕は壕内の面積を広く確保することを意図した構造になっている点などを考慮し(慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室2011:148頁)、両者を別々の地下壕として扱っておくことにする。

さて、航空本部等地下壕は、現在、ごく一部を除いて、 入坑することができない状態になっている。また、出入口 についても、地上で確認できるのは5a一基のみである。 そこで本地下壕の全体図の作成にあたっては、5aのみ トータルステーションを用いてやや遠方からノンプリズム で測量し、その他の部分については、過去の調査・測量デー タを総合することにした。

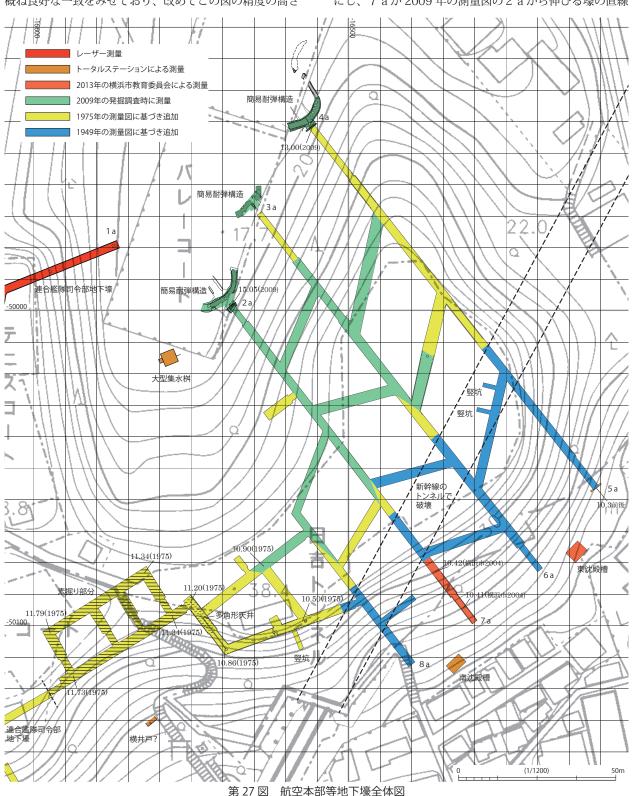
本地下壕の過去の調査・測量のデータとしては、連合 艦隊司令部地下壕のところでも使用した 1949 年測量図と 1975 年測量図 (第 28 図) のほか、横浜市教育委員会が 2004年に行った7 a と沈殿槽の調査データ、2009年に 慶應義塾が行った蝮谷内の発掘調査による2 a 、4 a 出入口の調査データ、及び2009年5月21日実施の壕内の測量データ、2013年に7 a 一帯が宅地造成によって破壊された際に行われた横浜市教育委員会の立ち合い調査のデータなどがある。

これらのうち、測地座標系による位置情報が示されているのは、2009年の発掘調査時のもののみだったため、まずこの時に測量された 2 a、 4 a の位置と、今回測量した 5 a の位置を、全体図の基準点とした。また、本地下壕と接続する連合艦隊司令部仮 V 壕と仮 U 壕が接する T 字路も、基準点のひとつとした。ただ、先述のとおり、2009年の座標値は、地震によるズレを考慮しなければならないため、東に 25cm、北に 1.5cm 動かしている。

壕内については、2009年5月21日にセオドライドを 用いて測量したものを、最も信頼できるデータと考え、2 aの位置に合わせて、まずはこの部分を全体図に加えるこ とにした。とはいえ、2009年の測量範囲は狭く、その他 の部分については、過去の測量図によって補わなければならない。そこで、1975 年測量図を、 $2a\sim4a$ の位置、 $4a \geq 5a$ を結ぶ直線、仮V壕と仮U壕のT字路の位置に合わせて重ね、この図に記された範囲を追加することにした。ちなみに、1975 年測量図は、航空本部等地下壕の部分においても、各基準点だけでなく 2009 年のデータとも概ね良好な一致をみせており、改めてこの図の精度の高さ

を確認することができた。

ただ、航空本部等地下壕は、新幹線のトンネルによって一部破壊されているため、1975年測量図にはこのトンネルより東側は描かれていない。そこで、この部分については、まず2004年と2013年の横浜市教育委員会の調査で記録された7a一帯の図を、まず周囲の階段や道路を基準にし、7aが2009年の測量図の2aから伸びる壕の直線



上にくるように若干の補正を行ったうえで、全体図上に位置付ける作業を行った。そして、この作業により位置が確定した7aと、横浜市教育委員会の調査で前面の諸施設が見つかったことで位置の推測が可能になった6a、トータルステーションで測量した5a、さらにトンネルの西側の1975年の測量図の各壕の配置を基準に、1949年測量図をそれぞれと可能な限り合致するように配置して、破壊部分を補った。こうして作成したのが、第27図である。

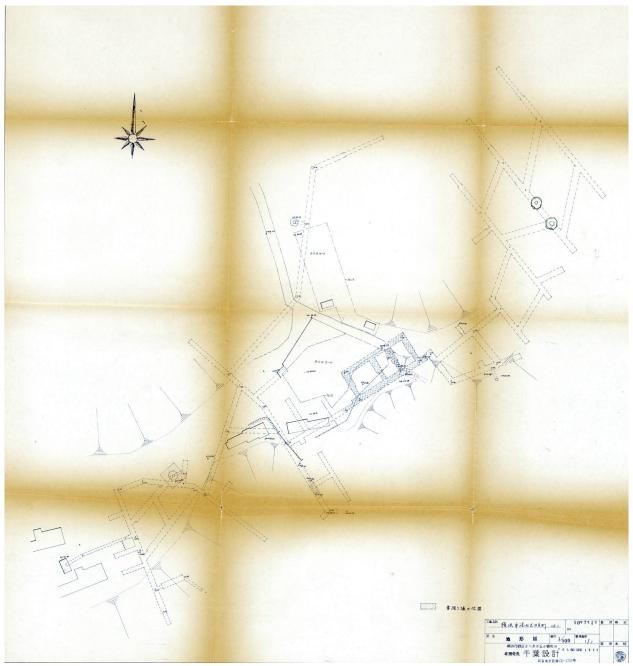
なお、この図にも、測量ごとの標高データを、測量年を付したうえで示しているが、1975年の測量図の標高が $16 \sim 18 \text{cm}$ 低くなっている可能性があることは、すでに 述べたとおりである。2004年の横浜市教育委員会による

調査時の標高については、7 a の南側に現存する南沈殿槽 上部を計測したところ、横浜市教育委員会の数値が 33cm 低い数値になっていることが判明した。なお、2009年の 発掘調査時の標高値については、改めて計測できる場所が なかったため検証できなかった。

(2) 所見

a. 航空本部等地下壕の諸特徴について

航空本部等地下壕は、現在入坑できる状態になく、また5 a 以外の出入口も見ることができない。それゆえ、直接地下壕を観察して得た新知見は少ないが、先述の連合艦隊司令部地下壕の調査成果を踏まえて、2009 年の壕内調査

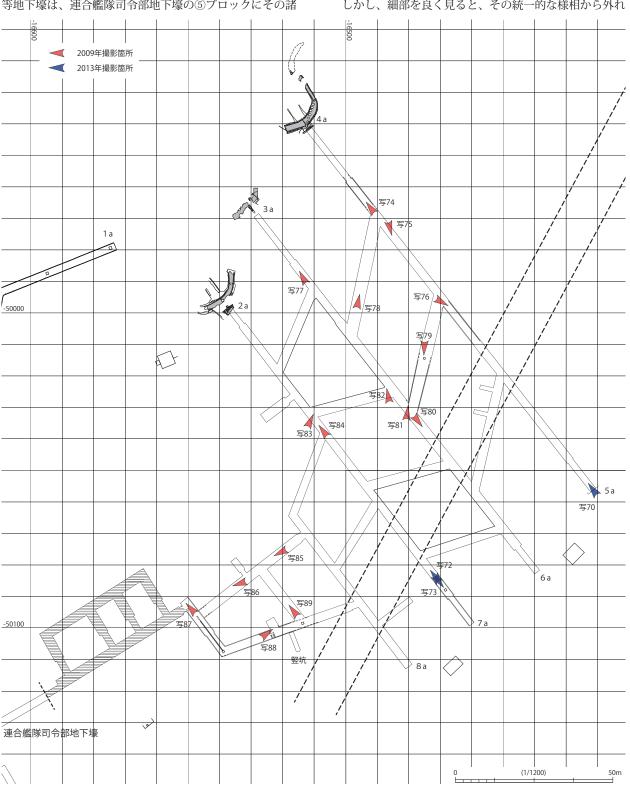


第28図 1975年測量の連合艦隊司令部地下壕・航空本部等地下壕

の際の写真や記録を見直すことで、本地下壕のいくつかの 興味深い特徴に気付くことができた。また、2013年4月 ~8月に行われた7a出入口一帯の造成工事の際に、7a から新幹線のトンネルまでの約 25 m分の壕内の観察をす ることができたため、その所見も加えておくことにする。

2009年の壕内調査の写真や記録をみる限り、航空本部 等地下壕は、連合艦隊司令部地下壕の⑤ブロックにその諸 特徴が類似していることがわかる。つまり、壁は全てコン クリート一体造りのw1a類であり、天井はほとんどが アーチ型の c 1 a 類、床の排水施設もほとんどが集水桝 と埋設土管を備えた d 3 類になっている (写真 72、79)。 全体的に統一的な工法によって構築されているようであ

しかし、細部を良く見ると、その統一的な様相から外れ



第29図 航空本部等地下壕 写真撮影箇所(写真74~89は山田譲氏提供)



写真 66 2 a 出入口



写真 68 4 a 出入口



写真 70 5 a 内部



写真 72 7 a 内部



写真 67 3 a 出入口



写真 69 5 a 出入口



写真 71 7 a 出入口



写真 73 7 a 内部



写真 74 航空本部等地下壕内部 1



写真 76 航空本部等地下壕内部 3



写真 78 航空本部等地下壕内部 5 (モルタル仕上げ)



写真80 航空本部等地下壕内部7



写真75 航空本部等地下壕内部2 (c1b類)



写真 77 航空本部等地下壕内部 4 (スロープ部分)



写真 79 航空本部等地下壕内部 6 (集水枡)



写真 81 航空本部等地下壕内部 8



写真 82 航空本部等地下壕内部 9



写真 84 航空本部等地下壕内部 11

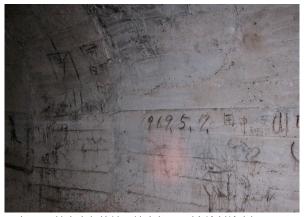


写真 86 航空本部等地下壕内部 13 (白塗料塗布)



写真 88 航空本部等地下壕内部 15 (白塗料塗布)



写真83 航空本部等地下壕内部10 (天井の鉄管)



写真 85 航空本部等地下壕内部 12 (白塗料塗布)



写真 87 航空本部等地下壕内部 14 (多角形天井)



写真 89 航空本部等地下壕内部 16 (機械基礎)

た注目すべき特徴もいくつか認めることができた。例えば、4a-5a間の坑道(以下、4a-5a壕と呼ぶ)の横断面は、天井のアーチから壁へとスムースに移行せず、その境界に明瞭な角が形成されている(写真 76)。こうした横断面の特徴は、連合艦隊司令部地下壕には認められないものである。同様の横断面は、4a-5a壕と3a-6a壕の間をつなぐ壕にもみられる(写真 78)。間をつなぐ壕は、4a-5a壕等の台地を横断する壕に比べて幅が広く、天井と壁の境界に角が形成される横断面は、そうした幅広の壕の構築にあたって考案されたものである可能性もある。

この 4a-5a 壕をめぐっては、この部分にのみ、天井頂部に主軸と直交する短い板材を並べる c1b 類が採用されている点にも注目しておく必要がある(写真 $74\sim76$)。連合艦隊司令部地下壕においては、口壕にみられた工法であり、口壕を造った作業者たちの関与が想定できるかも知れない。

その他の注目点としては、壁面、天井のモルタル仕上げの箇所があることと(写真 78)、連合艦隊司令部地下壕では認められなかった、モルタルではなく白い塗料のみを塗布した箇所が認められることも挙げておきたい。2009年の調査においては、これらの範囲を記録したわけではないため、全体図に分布を示すことはできないが、モルタル仕上げは、4a-5a 壕と3a-6a 壕の間をつなぐ壕などに施されており、白い塗料は、2a-7a 壕南西の台形部分を中心に認められたように記憶している(写真 $85\sim 88$)。白い塗料は、航空本部等地下壕のみに見られる特徴のようである。塗料による仕上げの意図は不明であるが、内部を明るくするためには一定の効果があったものと考えられる。

航空本部等地下壕の南西部、連合艦隊司令部地下壕の仮 V壕との接点の近くには、「目」字状の平面プランを呈す る部分があり、この場所は素掘りのままであったことが、 1949年測量図、そして 1975年の埋め戻し工事の記録に 残っている。ただし、なぜこの部分が素掘りのままで残さ れることになったのかは不明である。なお、この素掘り部 分の北東に接する壕の断面が、多角形(c3類)を呈して いることが写真から判明した(写真87)。2009年の調査 記録によると、この部分には床中央に排水溝が造られてお り、南側コーナーの集水桝につながっていた。こうした特 徴は、連合艦隊司令部地下壕のイ壕によく似ており、この あたりにも作業者の系譜が見え隠れしているようである。 なお、1949年測量図では、多角形の壕とT字につながる 壕にも中央の溝が存在することになっているが、確かなこ とはわからない。

さて、航空本部等地下壕の構築時期は、必ずしもはっ

きりとはしていないが、いくつかの証言を総合すると、1944年11月24日のB29による東京初空襲の後に、第三〇一〇設営隊によって工事が始まり、1945年4月ころに連合艦隊司令部と繋がった可能性が高い(慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室2011:13頁)。これが正しければ、連合艦隊司令部地下壕の第二期の工事と期間的に重なっていたことになり、さらに同じ第三〇一〇設営隊が従事していたということであれば、それまで連合艦隊司令部地下壕を造っていた作業者の一部が分かれて、航空本部等地下壕の構築に当たったと考えられることになる。これまで述べてきた、航空本部等地下壕にみられる、連合艦隊司令部地下壕の⑤ブロックや、②③の一部に類似した諸特徴は、こうした状況を物語っているようにも思われる。

b. 航空本部等地下壕に付属・関係する施設について

航空本部等地下壕では、他の大規模地下壕に比べ、付属・関係する施設が数多く確認されている。これは、本地下壕が、唯一、出入口一帯の発掘調査が行われた地下壕であることとも関係する。それらは、①地下壕の出入口に関連した施設、②竪坑の上部施設、③集水桝や沈殿槽等に分類することができる。

①は、2009年の慶應義塾大学による発掘調査と、2013年の横浜市教育委員会による立ち合い調査で検出されたものであり、いずれも出入口に接続する通路の遺構とそれに関わる排水施設からなる。両調査ともにすでに報告書が刊行されているため詳細はそちらに譲り、ここでは概要と補足を述べることにするが、蝮谷に面した2a~4aの3ヶ所の出入口では、出入口を左右に分ける簡易型の耐弾構造をもつ通路が検出された(写真66、68)。また、この耐弾構造の通路につながるコンクリート舗装や砂利敷の道も確認され、地下壕掘削時のトロッコ用の通路も発見された。ほかにも、蝮谷内から地下壕を通って5a~7a側に水を排出するための土管列、集水桝など、さまざまな排水用施設も調査されている。大規模地下壕出入口一帯の諸施設を一体的に捉えた例として、非常に重要な調査成果といっていいだろう。

一方、2013年の横浜市教育委員会の調査は、工事が進む中での立ち合い調査ということもあって、各出入口一帯の諸施設のあり方を充分調査できたわけではない。しかし、6 a 前面でコンクリート舗装面と土管が(写真90)、そして7 a 前面で土管と集水桝等が確認されており、ともに何等かの出入口に関わる施設が存在していたことだけは確認できた。特に6 a 前面の舗装面は、この部分にも耐弾構造があった可能性を示唆しており注目される。とはいえ、この調査でその構造を明らかにできなかったのはきわめて残念であった。これで、この斜面に最後に残った5 a に、こ



写真 90 6 a 前面の舗装と埋設土管



写真 92 南沈殿槽



写真 94 地下壕に伴っていたと考えられる集水枡

うした崖面に作られた出入口の耐弾構造を明らかにする望みをかけるほかなくなったことをここで再確認しておく必要がある。なお、6 a から少し東に離れた位置に、断面逆台形を呈する比較的大きな溝を発見したが、これは蝮谷内でも確認されたズリ搬出用のトロッコの軌道である可能性が高い(写真91)。

航空本部等地下壕には、1949年測量図によると、3ヶ所の竪坑があることになっている。残念ながらそれらの詳細図はなく、地上からの写真も残されていないため、形態についてはよくわからない。唯一の手がかりは、1947年



写真91 トロッコ用の軌道?



写真 93 南沈殿槽の壁の土管とそれに接続する土管列



写真 95 東沈殿槽

の米軍による航空写真で、そこには4a-5a壕、3a-6a壕間の東端の壕に付属した二つの竪坑の構造物が写っている(写真64、65)。不明瞭ながらともに円形に近い形をしているようで、大きさは連合艦隊司令部地下壕の耐弾式構造物の2/3程度と考えられる。多角形であった可能性もあろう。もう一つは、8aと素掘り部分の間の台形部分の南東辺に設けられたものであるが、1949年測量図と1975年測量図に位置が記されているのみで、詳細は全くわからない。これらは、全て、1975年に行われた地上構造物撤去工事によって失われた。

③としては、5 a~8 a一帯の2基の大型水槽と、蝮谷の谷頭付近にある大規模な集水桝、素掘り部分の南東斜面に存在する横井戸状の構築物の4基がある。ただし、航空本部等地下壕との関係がある程度はっきりしているのは最初の2基のみで、集水桝と横井戸状構築物は、位置やコンクリートの質などから地下壕群と関係を推測しているに過ぎない。

 $5~a\sim8~a$ —帯の大型水槽は、横浜市教育委員会により 2004年と 2013年に調査されたものである。報告書が刊行されているため(横浜市教育委員会 2014)、詳細はそちらを参照していただくとして、ここでは現地で観察した所見を補足として述べておくことにしたい。

まず、南沈殿槽とされた水槽から説明すると、これは7aと8aの間、やや8a寄った位置に存在する。工事以前から地上に露出していたもので、おそらく水槽の東に展開する住宅地の造成の際に、前面(南東壁)が破壊され、以後、ずっと内部が見える状態になっていたと考えられる。2004年に横浜市教育委員会によって一度調査され、2013年の宅地造成工事時にも、施工範囲に接していたことで再度調査が行われ、2004年の成果と合わせて報告された。なお、この南沈殿槽は、工事によって内部にさらに土砂等が詰め込まれたものの、現在も残存している(写真92)。

横浜市教育委員会の報告によると、この水槽の規模は、 内側で長辺 5.04 m、短辺 2.96 m、深さ 2.52 mを測る とされ、床の標高は 7.82 mとなっている。壁体の厚さは 22cm 前後である。現在、南東辺の壁が失われ、それに接 続していた北東、南西の壁も一部欠損しているが、北東壁 に本来の壁の上端がよく残存しており、そこから、この水 槽の南東辺側には天井はなく、大きな窓になっていたこと、 この窓の部分が前面(東南辺側)に向かって僅かに傾斜し ていた(高低差約10cm) ことが判明した。ただし、蓋の 有無等それ以外の特徴までは明らかにできていない。この 窓より斜面側には天井が造られているが、そこは当初から 斜面に埋めることが想定されていたようで、天井の縁辺に 斜面から土砂が水槽内に入り込むことを防ぐための、高さ 60cm、幅約30cmの土留め壁が造られている。なお、今 回、GPS 基準点からこの土留め壁上端の標高を測定したと ころ、11.33 mであった。一方、横浜市の報告では 11.00 mになっているため、先述の床の標高も今回の基準点から すると 33cm 低い数値になっている可能性が高い。

この水槽には、北東、南西の壁にそれぞれ外径 21cm の土管が接続されている (写真 93)。水槽の奥壁には、こ の土管の底面に近い高さまで水が溜まっていたことを示す 痕跡が認められた。横浜市教育委員会の報告では、北東側 の土管が僅かに高くなっているため、7 a から排出された 水を水槽に導き、ここで汚泥等を沈澱させたのち南西側の 土管から排出していたと推測しているが、それ以外に、南 西壁の土管も8 a から導水するためのものと見て、欠失し た前面壁側から、沈殿処理後の水の排出を行っていた可能 性があることを指摘しておきたい。なお、この水槽の北側 には、水槽につながっていたと考えられる土管列の一部と、 それに関連すると思われる集水桝が発見されている(写真 93、94)。ただ、いずれも十分な調査はできておらず、詳 細は不明である。

次に、東沈殿槽と名付けられた水槽であるが、これは5 a と 6 a の間、6 a 側に寄った位置にあり、地下壕出入口との関係は南沈殿槽とよく似ている(写真 95)。こちらは、2013 年の宅地造成工事の際に新たに発見されたもので、現地で見ていた限りでは、工事によって破壊されつつあるなかで最低限の調査がようやくできた、というのが実情に近いようであった。横浜市教育委員会の計測によると、水槽の規模は、外側で長辺 5.36 m×短辺 4.32 m以上、高さ 2.92 mとされ、短辺がやや大きくなっているものの、長辺や深さは南沈殿槽と近い数値を示している。コンクリート壁の厚さも 23cm 前後と南沈殿槽と近い数値を示しており、こちらでは、より均一であることが確かめられた。

床面の標高は 8.59 mとなっているが、後で述べるように、この数値が南沈殿槽と同じ基準点から測定したものであるとすると、今回の GPS 基準点からの測定値より、33cm 低くなっている可能性がある。ただ、工事で使用していた基準点が今回の GPS 基準点に比して 50cm 低くなっていたため、仮に工事の基準点で標高を測定していたとしたら、その分を考慮しなければならない。いずれにしても、ここに記した標高の数値には、細心の注意が必要である。

この水槽の形態は、現地で見た限り、天井のある直方体の構造物と考えてよさそうであった。こちらでは、南沈殿槽のような窓の有無は確認できなかったものの、おそらくフラットな天井部分の北東側のどこかに設けられていたものと考えられる。しかし、南沈殿槽のように窓のある側が傾斜していたり、天井部に土留め壁が造られていたということはなかったようである。また、取排水用の土管も確認できなかったが、こちらも調査前に破壊された南西側の壁、未調査の北東側の壁、あるいは過去に壊れた南東側の壁のどこかに付属していた可能性が高い。

コンクリートは、砂利の量が多いことは変わらないものの、内面は非常に滑らかに仕上げられていた。天井部分には鉄筋が使用されており、強度が求められていたことがわかる。内面の上部には汚れた水が溜まっていたことを示す



写真 96 大型集水桝(東より)



写真 98 大型集水桝(西壁に付属する小型枡)

痕跡が認められ、覆土からは油の混じったような異臭が感じられた。その位置と上記の諸特徴から、南沈殿槽と同様に、5 a や 6 a の排水施設(d 3 類)から流れてくる排水を一時的に溜めて、汚泥を沈澱させる沈殿槽と推測した。

さて、残りの二つ、蝮谷の谷頭の集水桝と、素掘り部分 南東の横井戸状の構造物は、先述のとおり地下壕と同時期 との確証があるわけではない。ただし、ともに砂利の多い コンクリートで造られているだけでなく、地下壕との関係 を想定しないとその存在理由そのものが理解しづらいこと から、ここでは海軍により造られたとの想定のもとで報告 しておく。

まず、蝮谷谷頭の集水枡は、4 a の南西約 20 mの位置にあり、見学用に使用している連合艦隊司令部地下壕の1 a 一帯からも、よく見ることができる。長辺 4.5 m、短辺 4.35 mの略正方形を呈する大型の集水枡で、内寸は 4.02 m× 3.93 mを測る。上面の標高は 20.76 mである(写真96)。現在枡内は完全に埋められており深さは不明であるが、外壁は現状で約 1.53 mの高さまで露出した箇所がある。その部分では、外壁の上半と下半で型枠の組み方が明らかに異なる様子が看取でき、下半部は旧地表面を掘削して型枠を作った部分、上半部分は地表面より上で型枠を組み立てた部分である可能性が想定できる(写真 97)。



写真 97 大型集水桝(北壁に付属する土管の孔)



写真 99 横井戸

短辺である東辺と西辺の中央には、それぞれ一辺 1.5 m 前後の小型の枡が付属している(写真 96、98)。しかし、南西辺のものが本体と上面の高さが一致するように造られているのに対し、北東辺のものは上面が本体よりも 60cm ほど低い位置に造られており、地形からみても、南西辺の枡は、本体に流入させる水量を調整するためのもの、一方の北東のものは逆に本体から蝮谷に流す水の量を調整する機能があったと推定するのが妥当なようである。

実は、この北東の枡の方向には2aが存在しており、2aで検出された耐弾式の通路の南端からは、この集水枡方向に伸びる暗渠が検出されている。もし、北東の枡とこの暗渠がつながっていたとした場合、枡から排出された水が、この暗渠を通って2aの排水施設に流れ込み、それが2a-7aのd3類の土管列を流下して、最終的に先述の南沈殿槽に至るという、排水のルートの全体がつかめたことになる。なお、北西辺の中央より東よりには、土管が接続していた痕跡が認められ、ここから蝮谷の西側縁辺方向にも排水していたことがうかがわれる(写真97)。

さて、最後の横井戸状の水槽であるが、これは航空本部 等地下壕南側の台地斜面に入り込む弱い谷の谷頭に現れた 土丹層の露頭の下、標高約 17 mの位置に造られたもので、 現在、コンクリート製の水槽が崖面と斜面の境界部分に埋 め込まれたようになっている(写真 99)。見えている部分はこの水槽の上面のみで、地形に合わせて傾斜するように造られている。水槽全体の規模は不明であるが、幅は 3.54 m、見えている部分の奥行は 95cm であった。

コンクリート面の南西に寄った位置に内法 $40 \times 39 \text{cm}$ の略正方形の窓が一ヶ所設けられ、そこから水の溜まった 内部を覗き込めるようになっている。窓には蓋をはめるための、幅 $5 \sim 6 \text{ cm}$ ほどの段が形成され、この段を含めると窓は一辺 51 cm の正方形となる。

この水槽の周囲には、導水あるいは排水用の施設は一切なく、またそうした施設を造ることができる場所も見当たらない。一方で、内部には季節によって若干上下するものの、ほぼ満水といっていい状態まで水が溜まっている。これらのことから、この施設を、露頭から湧き出す水を溜めて利用するための横井戸と判断した。

繰り返しになるが、問題はこの施設が海軍によって構築 されたものか否かという点である。こうした横井戸状の水 槽の類例については充分調査ができたわけではないが、湧 水を日常的に利用するだけであれば、こうした大規模な構 造物を造らなくても、湧水点からの導水施設で充分だろう。 また、この水槽内に溜まった水にはかなり濁りがあり、使 用時の状況は不明であるものの、生活用水として使用でき た可能性は低いように思える。つまり、こうした大きな横 井戸状の貯水施設を、台地下に暮らす人々が構築する合理 的な理由はなさそうであり、となると、日常生活とは異な る特別な目的、例えば空襲による火災の消火用として造ら れた可能性を想定したくなってくる。地下壕やその他の施 設と同様、極端ともいえるほど砂利の多いコンクリートが 使用されていること、そして近辺に素掘りの地下壕が存在 していたことなどからしても、航空本部等地下壕の8aあ たりから連合艦隊司令部地下壕の 16 a あたりまでの台地 の下に兵舎を造っていた、海軍の部隊が構築し使用した可 能性を想定しておきたいと思う。

4. 海軍省人事局地下壕の調査

(1) 全体図の作成

海軍省人事局地下壕は、蝮谷の出口の西側の台地、現在の第8校舎のあたりから、その北、東、南に下る台地斜面にかけて存在する。出入口の保存状態という点に限れば、大規模地下壕群のなかで最も良好であり、10ヶ所の出入口が全て残っているだけでなく、そのうち9ヶ所は現在も地上で確認することができる。おそらく地下壕使用当時の出入口一帯の諸施設の遺構も非常によく残っているはずであり、いたずらに破壊が進まないよう、周辺の地形も含めた早急な保護方針の確立が求められる。

現在、この地下壕も内部に入ることはできないが、9ヶ所の出入口が地上で確認できることから、全体図の作成にあたっては、まず出入口の位置をトータルステーションで測量し、その出入口の位置に1975年の測量図を合わせることにした(第30図)。

1975年の測量図(第31図)は、ほとんど修正することなく、今回測量した地下壕出入口の位置と合わせることができた。その点では、本地下壕においても1975年測量図の正確さが改めて確認されることになったが、一方で標高に関しては、残念ながらここにも大きなズレが認められることが判明した。例えば、出入口の測量用にこの一帯に設定した基準点と、それらに近接した1975年の測量図に記された標高測定点の数値を比較したところ、何と1975年の数値が63cmも高くなっていた。もちろん、地下壕本体の標高については、現在は内部に入れないため、正確な数値のズレを示すことは不可能である。そこで、地下壕本体の標高のズレについては、1975年の測量図に示された各出入口の下字、Y字の交点部分の標高と、現在地上で確認できる出入口の床面レベルを比較することで、ズレ幅の検証を行うことにした。

とはいえ、現状で出入口は、全て前面に厚く土砂が堆積しているため、床面レベルそのものを計測することはできない。ただ、7ヶ所については、天井頂部の標高を測ることのできたため、1949 年測量図に基づいて出入口付近の天井高さを2.1 mと仮定したうえで、床面レベルを推定することにした。具体的には、1 c 東は、天井頂部 20.691 mであるため推定床面レベルを18.59 mとし、以下同様に、2 c 南は天井頂部 22.145 mで推定床面20.05 m、2 c 北は天井頂部 22.038 mで推定床面19.94 m、3 c 西は13.431 mで11.33 m、4 c 東は13.646 mで11.56 m、4 c 西は13.806 mで11.71 m、5 c 東は12.895 mで10.80 mとした。

これに対し、1975年の測量図における1 cの分岐点の標高は19.25 mとなっており、1 c東の推定床面レベルとの差は66cmとなる。同じように他の全ての出入口を比較すると、2 c分岐点は20.55 mで2 c南との差は50cm、2 c北との差は61cm、3 c分岐点は12.03 mであるため3 c西との差70cm、4 c分岐点は12.20 mで4 c東との差64cm、4 c西との差49cm、5 c分岐点は11.47 mで5 c東との差67cmである。これらは、あくまで推定値であり、かつ比較しているポイントも若干離れているため、信頼性の高い数値とは言えないが、それでも概ね地上部分のズレである63cmを前後した数値になった点には注目していいと思う。以上のことから、1975年の海軍省人事局地下壕の測量図は、地下壕の形態に関しては

正確なものであり、標高を全体的に 63cm 程度低くすれば、 概ね標高も補正可能と考えることができそうである。

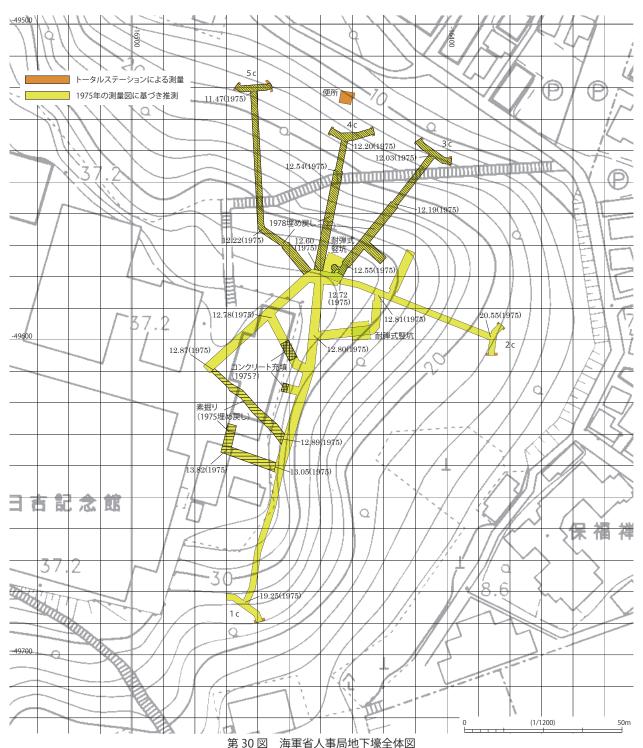
(2) 所見

a. 海軍省人事局地下壕の諸特徴について

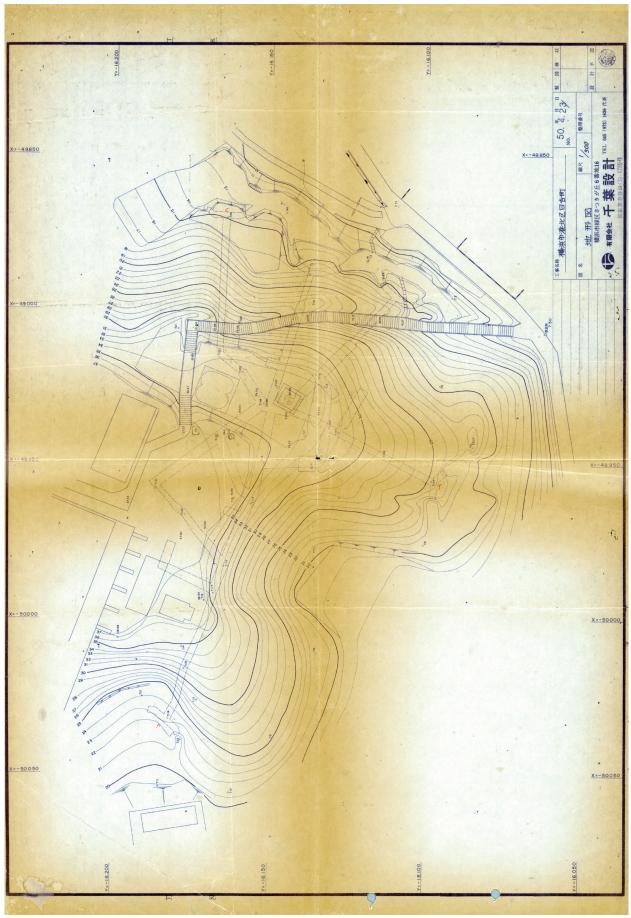
本地下壕は、現在全ての出入口が塞がれており、入坑できない状態になっている。しかし、第8校舎建設工事中の1976年10月と、1990年7月4日、2008年7月16日に、それぞれ地下壕内の状態を確認するための調査が行われて

おり、その際の写真によって、内部の様子を垣間見ること ができる。

そこでここでは、それらの写真から本地下壕の特徴を読み取ることにするが、まず断面形と構築方法を見ると、素掘りの部分と後述するモルタル塗布の部分を除いて、写真に写った本地下壕の天井と壁は、どこもアーチ型の天井と壁を一体成型する、c 1 a 類、w 1 a 類になっていることがわかる(写真 $109 \sim 111$ 、114、116、117、120、122、125、126、132、133、136)。モルタルが塗布さ



51



第31図 1975年測量の海軍省人事局地下壕全体図



写真 100 海軍省人事局地下壕 5 c 西出入口



写真 102 海軍省人事局地下壕4 c 西出入口



写真 104 海軍省人事局地下壕 3 c 西出入口



写真 106 海軍省人事局地下壕 2 c 北出入口



写真 101 海軍省人事局地下壕 5 c 東出入口



写真 103 海軍省人事局地下壕4 c 東出入口



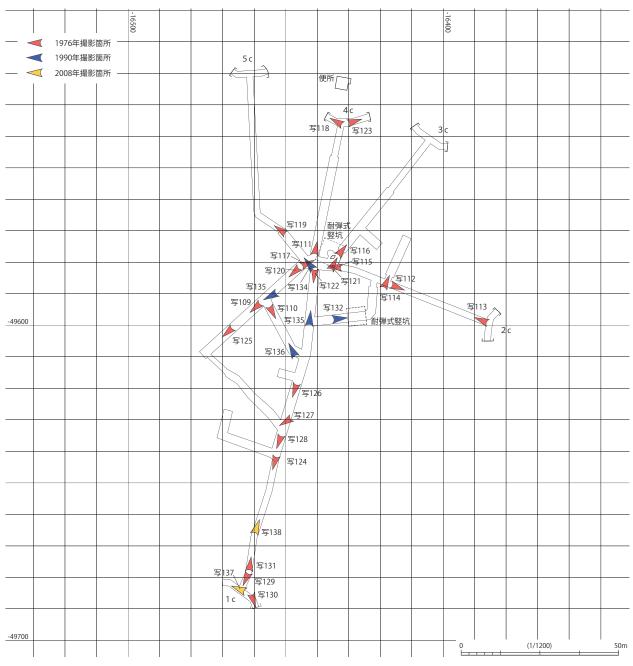
写真 105 海軍省人事局地下壕 3 c 東出入口



写真 107 海軍省人事局地下壕 2 c 南出入口



写真 108 海軍省人事局地下壕 1 c 東出入口



第32図 海軍省人事局地下壕 写真撮影箇所



写真 109 1976 年海軍省人事局地下壕内部 1



写真 110 1976 年海軍省人事局地下壕内部 2

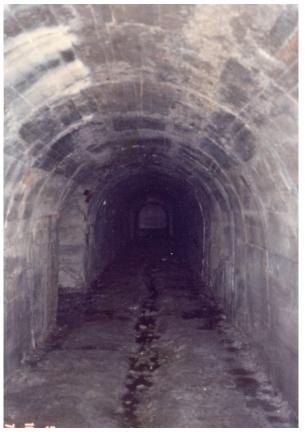


写真 111 1976 年海軍省人事局地下壕内部 3

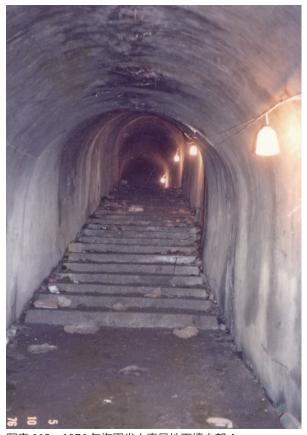


写真 112 1976 年海軍省人事局地下壕内部 4



写真 113 1976 年海軍省人事局地下壕内部 5



写真 115 1976 年海軍省人事局地下壕内部 7



写真 117 1976 年海軍省人事局地下壕内部 9



写真 119 1976 年海軍省人事局地下壕内部 11



写真 114 1976 年海軍省人事局地下壕内部 6



写真 116 1976 年海軍省人事局地下壕内部 8



写真 118 1976 年海軍省人事局地下壕内部 10



写真 120 1976 年海軍省人事局地下壕内部 12



写真 121 1976 年海軍省人事局地下壕内部 13



写真 122 1976 年海軍省人事局地下壕内部 14



写真 123 1976 年海軍省人事局地下壕内部 15



写真 124 1976 年海軍省人事局地下壕内部 16



写真 125 1976 年海軍省人事局地下壕内部 17



写真 127 1976 年海軍省人事局地下壕内部 19



写真 129 1976 年海軍省人事局地下壕内部 21



写真 130 1976 年海軍省人事局地下壕内部 22



写真 126 1976 年海軍省人事局地下壕内部 18



写真 128 1976 年海軍省人事局地下壕内部 20



写真 131 1976 年海軍省人事局地下壕内部 23



写真 132 1990 年海軍省人事局地下壕内部 1



写真 134 1990 年海軍省人事局地下壕内部 3



写真 136 1990 年海軍省人事局地下壕内部 5



写真 133 1990 年海軍省人事局地下壕内部 2



写真 135 1990 年海軍省人事局地下壕内部 4



写真 137 2008 年海軍省人事局地下壕内部 1



写真 138 2008 年海軍省人事局地下壕内部 2

れた箇所も、w 2 類の場合にみられる、ブロックの境界の 亀裂や色むらなどが写っていないため、基本的にw 1 類に よるものと考えてよさそうである。その点では、本地下壕 は、航空本部等地下壕以上に、断面形や構築方法に統一性 がみられると言っていい。

本地下壕は、他の大規模地下壕に比べ、モルタルを塗布して仕上げた部分が多いのも特徴である(写真 112、113、115、118、119、121、123、124、129 \sim 131、137、138)。写真を見る限り、 $1 \sim 5 c$ の出入口から中心部に向かう通路は、天井から壁まで全面にモルタルが施されるm 1 類で仕上げられていたようである。その点からすれば、海軍省人事局地下壕は、他の地下壕よりも、手をかけて造られていたと言うことも可能である。

ただ、面白いのは、m 1 類の手法で丁寧に仕上げられているのが、地下壕全体のなかでは幅、高さともに小さな数字を示す通路部分だということである。これらの壕の奥にある、広い壕からなる中心部分には、モルタルの塗布された場所はなく、天井、壁全面に内型枠の痕跡が見えている。連合艦隊司令部地下壕では、こうした全面モルタル仕上げは、長官室と作戦室という重要な壕にしかみられず、航空本部等地下壕でも、確認できているところは大型の部分である。そうしたことからすると、海軍省人事局地下壕は、m 1 類が多くみられるというだけでなく、そのあり方も他の地下壕とは異なっていることになる。

さて、次に床の排水施設に目を向けると、本地下壕の場合、標高の高い出入口付近や階段部分を除くと、1976年の段階ですでに床面の大半が水や泥に覆われてしまっており、その後のものも含め、排水施設が写った写真は皆無であった。しかし、全く手がかりがないというわけではなく、一部の写真に、床の中央に直線状に泥が流れたような痕跡が写っており(写真111、122、135)、そうした場所は、d2類が採用されていた可能性が高そうである。ちなみに、その信頼性には疑問符がつくものの、1949年の測量図では、多くの壕がd2類の断面をもつことになっている。

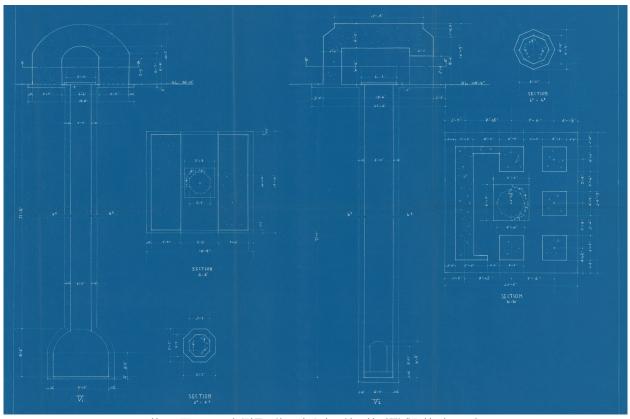
集水桝をもつd3類の有無については、写真を見る限り 集水桝の存在を示すような痕跡を認めることはできなかっ た。ただ、1949年の測量図に示されたe-e'断面図に は集水桝とそれにつながる土管が描かれているため、d3 類が存在していた可能性がないわけではない。しかし、e-e'の断面は、平面図上は、中央から北側に伸びる3本 の通路の付け根付近の、幅が広くなる箇所のみにみられる ことになっており、仮にこのあたりに集水桝をもつ排水施 設が存在していたとしても、連合艦隊司令部地下壕のW壕 や、航空本部等地下壕にみられる集水桝をいくつも連結さ せた排水施設とは、根本的に異なるものであった可能性が 高い。

このように、海軍省人事局地下壕には、その構造や工法に、連合艦隊司令部地下壕や航空本部等地下壕とはやや異なる特徴がみられるようである。第三〇一〇設営隊副長の伊東三郎氏の手記によると、海軍省人事局地下壕は、連合艦隊司令部地下壕の初期段階の工事が終わったころに、東京施設事務所編成の柳瀬隊が日吉にやってきて設営にあたったとされている(伊東1972:303頁)。この地下壕にみられる連合艦隊司令部地下壕や航空本部等地下壕とは異なる特徴は、この柳瀬隊の参加という事情が関係している可能性も考えられよう。

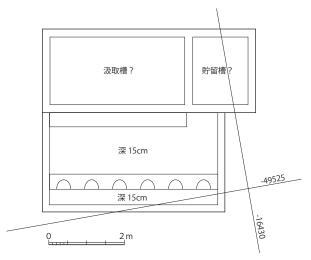
b. 海軍省人事局地下壕に付属・関係する施設について

1949年、1975年の測量図によると、かつて本地下壕 には2ヶ所の竪坑があり、それぞれの上部に耐弾式の構造 物が造られていた(第33図、第31図)。竪坑の一つは中 央部の壕と3 cへと伸びる通路状の壕が接する箇所の西側 コーナーに、もう一つは、中央部の東側台形部分の南辺上 に位置し、前者は、短い通路の先に竪坑を穿つスタンダー ドなものと言えるが、後者は壕の天井部に直接竪坑を穿つ 特異なあり方である。両者の耐弾式構造物もそれぞれ異 なった形態をしており、前者は5本の柱と一ヶ所の壁で略 正方形の分厚い天井部を支える構造、後者はカマボコ型の 両小口に出入口を設けたもので、ちょうど地下壕出入口の T字の耐弾構造を縦にしたような構造になっている。これ らの耐弾式構造物の形態も、柳瀬隊が持ち込んだものと考 えることができるかも知れない。なお、耐弾式構造物は、 ともに 1975 年の地上構造物の撤去工事の際に破壊された ことが記録されている。

海軍省人事局地下壕に付属する施設としては、もう一 つ、4c出入口の北、約10mの位置に造られた便所があ る (第34図、写真139)。現在は土砂やゴミ、落ち葉等 でほぼ完全に埋もれており、構造の詳細は不明であるが、 地表面における観察では、幅 3.86 m×奥行 2.1 mの本体 部分の北側に、幅 4.51 m×奥行 1.77 mの便槽(貯留槽 と汲取槽の2槽一連)が接続していることが分かった。ま た、本体部分はやや複雑な造りになっていて、南辺側には、 まず幅 33cm、深さ 15cm の溝があり、その溝の北側に小 便器用の窪みが6ヶ所並んでいる。さらにその北には、幅 95cm、深さ 15cm の幅の広い溝が作出されており、東辺 で折れて貯留槽に接続する。この部分の使用時の状態を想 像することは困難であるが、この幅広の溝が大便器に関係 していたことは間違いないだろう。なお、この便所は、2 槽一連の便槽をもつことから、水洗式ではなく、汲取式だっ た可能性が高い。海軍省人事局地下壕の内部は、巨大な鍾 乳石が形成されるなど、おそらく連合艦隊司令部地下壕以



第33図 1949年測量の海軍省人事局地下壕耐弾式竪坑(1/200)



第34図 海軍省人事局地下壕便所模式図

上に湧水が多かったと考えられ、それらは3c~5cの出入口から外に排出されていたはずであるが、その排水を便所に利用するような工夫はなされなかったようである。

5. 軍令部第三部待避壕の調査

(1) 全体図の作成

軍令部第三部待避壕は、今回の調査において最も情報が 集まらなかった地下壕である。地下壕の出入口は全て破壊 され、もちろん壕内に立ち入ることもできない。壕内の写 真等の記録類も、測量図以外は全く発見されなかったため、



写真 139 海軍省人事局地下壕便所

1949 年測量図と 1975 年測量図 (第 36 図) に基づいて、 その位置を含めた全体図を作成することにした(第35 図)。

まず、地下壕の位置については、1975 年測量図に、第一校舎、日吉会堂などの建物や、並木やグラウンドの縁石等が記録されていたため、これらを手がかりに現在の地図に落とすことにした。その際、南側の地下壕の本体部分で、表示された数値(85.0 m)と描かれた図の長さにズレがあることが判明したため、全体図においては、表示された数値に合わせて図を修正することにした。

また、これまでの図と同様、軍令部第三部待避壕の図

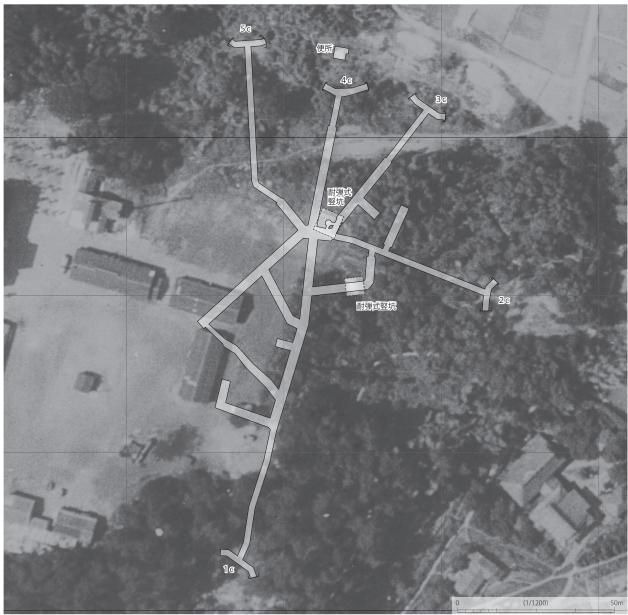


写真 140 1947 年の海軍省人事局地下壕一帯の航空写真(国土地理院提供 米軍撮影 USA-M372-15)

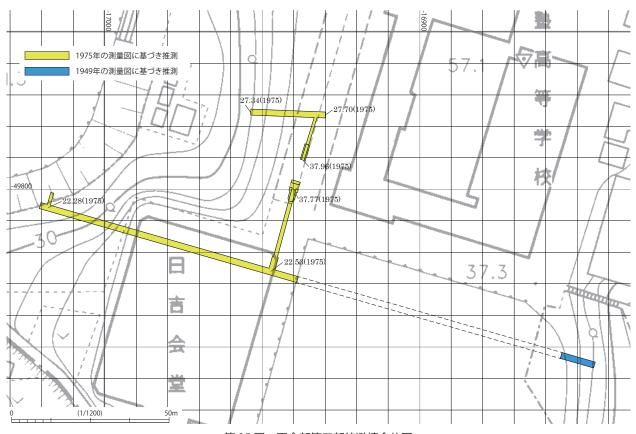
にも、標高に大きなズレが認められた。具体的に言うと、1975年測量図の日吉会堂北東コーナーあたりに記された36.18 mのポイントの近辺を、今回のGPS基準点から測定し直したところ36.72 mと、54cmも高い数値を示した。したがって、第35図に示した地下壕内の標高値も概ね50cm程度低い数値になっていると考えていいだろう。

(2) 所見

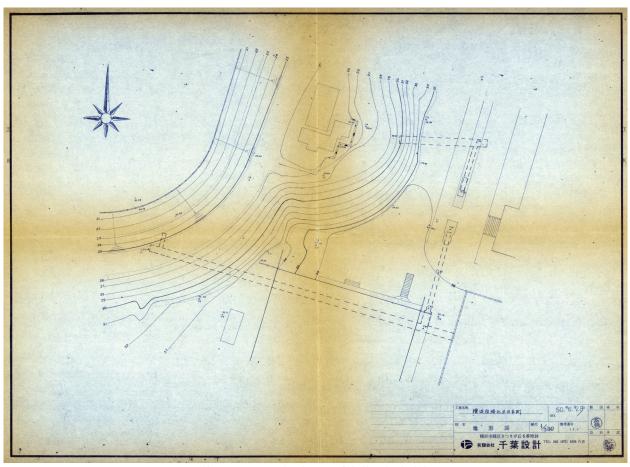
軍令部第三部地下壕については、入手できる情報がきわめて限られているため、壕の構造や工法を検討することはできなかった。1949年の測量図をみる限りでは、南壕、北壕ともに本体部分の天井はアーチ型のc1類で、排水施設は壁溝のみのd1類だったようである。また、ともに西側に向かって緩やかに傾斜しており、南壕の東端と西端の

比高差は 25cm、北壕は短い割にやや大きく 36cm である。 つまり、水はいずれも西側に向かって流下していたと考え られるが、西端にあったはずの壕外に水を排出する仕組み については不明である。

なお、1949 年測量図には、本来、南壕は、グラウンドの下を通って蝮谷まで貫通させる計画だったように記されている。蝮谷側の出入口はコンクリート被覆もなされており、一応完成していたようである。今回、この付近を踏査してみたが、出入口の痕跡を見つけることはできなかった。南壕、北壕への出入りは、第一校舎南出口の正面の植樹帯に造られた、二つの出入口施設から、それぞれ階段を降りるようになっていた。出入口施設はコンクリート製で、南壕のものはT字に分かれる耐弾構造、北壕はそのまま直線的に開口するものであった。なお、南壕西端には北



第 35 図 軍令部第三部待避壕全体図



第36図 1975年測量の軍令部第三部待避壕



写真 141 1959 年撮影航空写真に写った軍令部第三部待避壕の出入口(慶應義塾大学福澤研究センター提供)

方向に短い壕が接続しているが、これが出入口として機能していたかどうかは不明である。福澤研究センター所蔵の1959年の航空写真には、二つの出入口施設とともに、この部分がグラウンドの斜面に突き出していた様子が写っており(写真141)、出入口あるいは排水施設としての機能を備えていたことも考えられる。

6. 小規模地下壕の調査

キャンパス内には、以上の大規模地下壕のほかに、素掘りの小規模地下壕が多数存在していたものと考えられる。そのうちの一基は、2005年に第一校舎東の蝮谷に下る斜面移行部で発見され、櫻井準也氏によって調査・報告されている(櫻井 2005)。これは2ヶ所の出入口と1ヶ

所の部屋状の支坑をもつもので、未完成の地下壕である可能性も指摘されている。私は、この一帯にあったとされる東京警備隊の掘削した地下壕が、これに当たる可能性があると考えたが(慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室2011:13頁)、依然確証はない。

今回の調査では、この他に、現在も開口する小規模地下壕を3基確認した。いずれも開口部の位置の測量を行ったが、内部に崩落が認められ、たいへん危険な状態であるため、ここでの報告は控えておく。いずれにしても、以前指摘したとおり慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室2011:20・21頁)、日吉キャンパス一帯には、素掘りの小規模地下壕が多数存在していたことは間違いないため、今後も継続的に調査を行っていく必要がある。

引用文献

伊東三郎 1972「地下海軍省分室と施設系残務整理回想 録」『海軍技術系技術官の記録』『海軍技術系技術官の記 録』刊行委員会 302-312 頁

慶應義塾大学寮和会 1987 『慶應義塾大学日吉寮開設五 十周年記念誌』

櫻井準也 2005「慶應義塾高等学校購買部棟東側から発 見された地下壕」『日吉台地下壕保存の会会報』74号 2-4頁 下村恒夫 1994「日吉台地下壕《続編8》聯合艦隊日吉 司令部跡を尋ねて」『KEIO せいきょう 教職員版』 第69号 慶應義塾大学生活協同組合 8-11 頁

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011『日吉台 遺跡群蝮谷地区発掘調査報告書-航空本部等地下壕出入 口関連遺構の調査-』

横浜市教育委員会 2014『(仮称) 日吉5丁目開発計画地 【航空本部等地下壕】工事立会調査報告書』

艦政本部地下壕の調査

櫻井準也

はじめに

地下壕は隧道(トンネル)の集合体であり、戦時中隧道 は少ない労力や工期で構築可能で耐弾力に優れ、偽装も容 易な施設であるとされていた(海軍施設本部『耐弾構造規 準』)。神奈川県横浜市港北区の日吉台付近には、太平洋戦 争中に旧大日本帝国海軍が構築した地下壕が分布するが、 このうち慶應義塾大学日吉キャンパス内にある連合艦隊司 令部地下壕はレイテ作戦や沖縄戦などの作戦が発令された ことで全国的に著名な戦争遺跡である。

日吉台の旧大日本帝国海軍関連の地下壕群は多摩丘陵の丘陵幅 100~150 m程度の地点に丘陵平坦面から15~25 m程度の深さに構築されているが、これらの地下壕群は東急東横線日吉駅を挟んで東側の一群と西側の一群に区分できる(第1図)。その総延長は日吉駅東側の慶應義塾大学日吉キャンパス側(①~③)で約2.6km、西側の箕輪側(④)で約2.4kmに及んでいる。このうち、慶應義塾大学日吉キャンパス内には3ヶ所の地下壕が存在する。南側の地下壕(①)には連合艦隊司令部・軍令部第三部(情報部)・航空本部・東京通信隊、北側の放射状に延びた地下壕(③)には海軍省人事局が入っていた。また、第一校舎(現慶應義塾高等学校校舎)の南西側にあった地下壕(②)は軍令部第三部(情報部)の待避壕として掘られたものである。

これに対し、今回調査を実施した箕輪海軍省艦政本部地下壕は東西方向に抜ける「あみだくじ」状の平行肋骨式(浄法寺 1981)の地下壕である。また、規模は大きいものの素掘りの部分や未完成の部分が多いことも本地下壕の特徴である。

日吉台に旧大日本帝国海軍の施設が作られるようになったのは、文部省の校舎貸与の指示を受けて昭和19年(1944)2月に慶應義塾評議員会で5万坪の土地と建物群(第一校舎、寄宿舎、赤瓦食堂など)の貸与が決定され、契約が交わされたことを契機とする。日吉の地が旧大日本帝国海軍の施設に選ばれた理由として、空襲に耐えるコンクリート建築物があること、高台のため電波の送受信状態が良かったこと、そして首都東京と軍都横須賀の中間にあたることなどがあげられている。

旧大日本帝国海軍の組織が最初に日吉台へと移ってきた

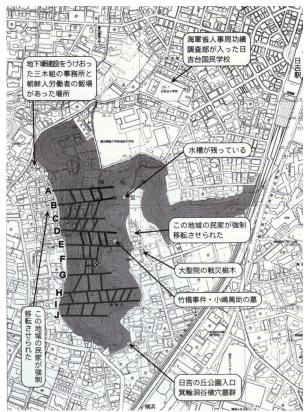
のは軍令部第三部(情報部)で昭和19年(1944)3月、 次いで、連合艦隊司令部が巡洋艦「大淀」から移ってきた のが昭和19年(1944)9月29日、人事局は昭和20年 (1945) 年 2 月頃、航空本部の一部は翌昭和 20 年 (1945) 6月頃に日吉に移ってきている。 これらの移動に先立っ て行われた地下壕の構築は、海軍施設本部の指揮によって 行われたが、地下壕の建設作業が始まったのは昭和19年 (1944) 7月15日で第300設営隊が軍令部第三部の待避 壕建設に着手し、その後8月15日に第3010設営隊が連 合艦隊司令部の地下壕の建設を始めている。次いで、10 月頃からは海軍省人事局の地下壕が建設に着手し、翌昭和 20年(1945)2月頃完成した。地下壕建設工事には民間 建設会社の(株)鉄道工業が参入しており、派遣された民 間労働者約 2000 人のうち 700 人が朝鮮人であったとい う。これに対し、今回調査を実施した海軍省艦政本部地下 壕の建設は昭和20年(1945)1月に始まり8月14日に 完成したとされているが実際に使用されることはなかっ た。また、本地下壕は未完成の部分が多く、側壁に大谷石 が使用されるなど敗戦間際の資材不足の状況を物語る地下 壕である。

1. 艦政本部地下壕について

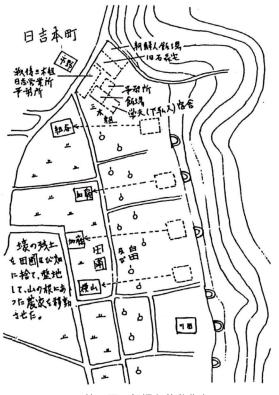
a. 艦政本部地下壕の概要

海軍省艦政本部は海軍大臣に隷属し、造船や航空機を除 く兵器開発に関係する事務を司った部門である。明治 33





第2図 艦政本部地下壕周辺地域の状況(白井監修2006)



第3図 飯場と移動農家

(慶応生協「生協ニュース」第50号、1990)

年(1900)に設置され、各種の兵器や弾薬を開発・製造する海軍工廠がその管轄下にあった。昭和19年(1944)になって米軍による首都圏の爆撃が激しくなり、翌昭和

20年(1945)に艦政本部が日吉の箕輪地区に移転するに伴って地下壕が構築されることとなった。

箕輪海軍省艦政本部地下壕は他の日吉台地下壕とは東急東横線を挟んだ反対側(西側)の丘陵地に構築された。この丘陵は地元で「夕日が丘」とよばれた場所で東西約200 m、南北約400 mの範囲に構築されている(第2図)。また、地下壕の東側には大聖院(景谷山東観寺)があり、昭和20年(1945)4月4日の空襲で本堂が焼失し、境内のイチョウ・ヒバ・クスノキが焼夷弾の被害に遭っている。地下壕の北西方向にある日吉台国民学校(現日吉台小学校)に海軍省人事局功績調査部が入っていたが(直径5mのコンクリート製の施設が4基構築されていた)、同年4月15日に空襲を受け校舎が全焼している。また、同日には慶應義塾大学工学部校舎も空襲を受けほぼ全焼し、犠牲者が出ている。このように、旧大日本帝国海軍の施設が集中していた日吉一帯は米軍による空襲の対象となっていた。

箕輪海軍省艦政本部地下壕の建設工事は昭和20年(1945)1月に始まった。工事は民間業者の三木組が請け負い、地下壕の入口Aの北西に事務所や飯場があった(第2・3図)。三木組では約150人の朝鮮人を使用しており旧石森宅のわきに朝鮮人の飯場もあった。また、この工事に伴って地下壕西側の土地が海軍に強制的に買い上げられ、そこにあった農家がウインチで移動させられ、そこに地下壕を掘削して出た多量の土砂が搬出された(第3図)。

地下壕の工事は発破や人力による岩盤の掘削後、コンク リートを施設するが、その際に海軍では側壁にコンクリー トブロックを積み上げる工法や型枠を作って掘削面との隙 間にコンクリートを流し込む工法がとられている(Z工 法)。また、物資不足で6月以降はセメントが不足したため、 本地下壕では側壁に大谷石を使用しているが、その中には 戦災にあった田園調布の住宅街の石垣や塀に使用されてい た大谷石が運び込まれ側壁として使用されることもあっ た。連合艦隊司令部地下壕など他の日吉台地下壕とは異な り、本地下壕では全面あるいは床面が素掘りのままの部分 が多く、コンクリート施工の際の型枠板や掘削土を運んだ トロッコの枕木などが残されているが、本地下壕は一応完 成したとされている。しかし、箕輪海軍省艦政本部地下壕 の引越しの予定日が昭和 20 年(1945)8 月 15 日であっ たため、実際には海軍省艦政本部がこの地に移ってくるこ とはなかった。

海軍省艦政本部地下壕は総延長が約2.4kmに及ぶ。全体構造は東西方向に走る10本の長い坑道(その他にF-G間に東西方向に走る短い坑道がある)とそれらを繋ぐ33本の南北方向に斜めに走る短い坑道で構成される「あ

みだくじ」状の平行肋骨式地下壕である(F-G間に梯子付きの竪坑が存在する)。また、連合艦隊司令部地下壕などに存在する部屋状の地下壕は存在しない。内部は北側部分を中心に全面コンクリートで施工されている部分とコンクリートで施工されていない部分があるが(入口部分はすべて全面コンクリート施工である)、『舊日本海軍の地下施設について(追加報告)』によるとコンクリート施設部分は3903.6㎡、素掘り部分は3020.6㎡とされている(安藤 2011)。

現在地下壕は、防災上の理由から地下壕の上が住宅地となっている北側部分は横浜市緑政局北部公園緑地事務所によって埋め戻されており、上が公園となっている南側部分も含め、地下壕の入口は閉鎖されている。

(2) 艦政本部地下壕に関する聞き取り調査

海軍省艦政本部地下壕については、寺田貞治氏による関係者の聞き取り調査が実施され、『生協ニュース教職員版』に掲載されたが、その後『日吉台地下壕保存の会会報』に転載されている(日吉台地下壕保存の会 1994・97)。その内容は以下のようなものである。

日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話7 地下壕の築城2

父上が現場監督をされ、ご自身でも手伝っておられ た石森氏に伺います。

石森一成氏の話

(ききて:寺田貞治)

父は清水建設に勤務し、満洲や小笠原に出張していた。満州に出張中の昭和13年頃、私は常盤松にあった慶応の普通部に入学し、渋谷から自転車で通うことになった。父は私を日大工学部に入学させたかったようだ。

父は帰ってくると三木組に現状監督として入った。厚木の航空隊の格納庫を作りに行ったり、清水の三保に予科練の兵舎を作りに出かけたりしていた。昭和19年頃、横浜市の反町へ、浅野ドックの社員寮を作るために行ったが、空襲で焼けたので日吉に移った。

日吉では三木組が入札で請負った地下壕を作る仕事 に従事した。最初、宮前の足立さんの方に事務所を建 てる予定で、私が案内したが、道も悪く足場も悪くて うまくいかなかった。軍の命令で箕輪の方をやれとい うので、現慶応普通部から下ってきた赤門坂下に三木 組の事務所を設け、我が石森宅も近くに作られ、地下 壕が掘り始められた。

地下壕は、現在の箕輪の藤屋酒屋の前の山から掘り始め、川田宅の方へ掘って行った。地下壕の中で会議が

できるようにとのことであった。

入口辺りはツルハシで堀り、奥の方ではハッパをかけ、堀った土砂はトロッコで運び出し、田や畑に捨てた。三交代で昼夜兼行で掘っていた。

山根(山ぎわ)にある家は、地下壕を掘るのに邪魔になるので、父は苦労して曳き屋を集め、移動させた。家を持ち上げコロをかませ、線路を敷いてウインチで引張った。一軒曳くのに何十人もの人手が必要だった。

日本人の職人が50~60人位通っていた。三木組の宿舎には10人位の常夫(下職人)がおり、事務所と宿舎の間の飯場で渡辺という人が炊事を担当していた。医学生が働きにきたので飯をよく食べさせた。軍の仕事なので食糧は十分にあり、日本人労働者の待遇はよかった。

我が家の隣りには韓国人の飯場があり、三木組が連れてきた 150 人ほどの人がいた。(鉄道工業が連れてきた朝鮮人の一部ではないかと思う・寺田註)

安田春雄という韓国人の親方が、韓国人の親方が、韓国人労働者の面倒を見ていた。韓国人の食事は、それほど悪くはなかった。よくどぶくろを作って飲んでいた。雨が降って仕事がない時はバクチを打っていた。韓国人労働者の賃金その他の費用は、父が三木組に請求した。私は労働者の出勤簿をつけていたが、それは三木組本社に報告された。

昭和20年3~6月、私は川崎の北辰電気に学従動員 で通い、精密機械の部品を作っていたが、6月入隊し 我孫子に配属され、そこで終戦を迎えた。

(生協ニュース教職員版第50号より抜粋転載)

『日吉台地下壕保存の会会報』第30号

日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話 20 日吉の日々 11

元海軍艦政本部・中尉の石原氏に伺います。

石原 光氏の話

(ききて:寺田貞治)

広島高等師範を昭和18年9月に卒業し、10月1日に兵科として海軍に入った。土浦海兵団で訓練を受けたあと、須崎航空隊に配属され少尉となった。藤沢航空隊に移り予科練の教育に当った。予科練には中学二年から志願して入ってきた。

次に新長後にあるレーダーの学校に移った。コレヒドールで米軍から奪い取ったレーダーと同じものを作った。しかし、米軍ではレーダーを妨害する研究が進んでいたため役に立たなかった。米国はレーダーで手に取るように日本の地上を見ていた。

昭和20年6月末に艦政本部に移り、新橋の第一ホテルに居住した。士官クラスが居住していた。艦政本部は田村町のNHKの近くにある日産ビルにあった。約千人の人がいた。技術将校が多く、兵学校出の士官や技術士官、主計士官などもいた。艦政本部は艦船を作り、供給する所で、仕事は艦船に関すること、経理に関することをやっていた。人事局・航空本部などと共に海軍省に属していた。

私は下士官・兵の12人と一緒に総務にいて、総務 関係の仕事をしていた。車の出し入れ、倉庫の管理、 警備などである。また、甲板士官として下士官・兵の 管理をしていた。直接の上司は少佐であった。

日吉に艦政本部が来ることになったのは、爆撃が激しくなったためである。引越しが決って以来、二~三度様子を見にきた。地下壕の部屋割りや引越しの準備計画なども私の仕事だった。

昭和20年8月はじめに見にきた時、慶応普通部から南に続く丘の下の地下壕はコンクリートで固められ、空気抜き用の縦穴が二つ見えた。地下壕の中は天井に裸電球があるだけの殺風景なもので、こんな所で仕事ができるかと考え込んでしまった。兵や下士官を泊めて貰う農家も探さねばならなかった。

日吉には 20 年 8 月 15 日に移転の予定であった。 その日終戦となったのである。

(生協ニュース教職員版第51号より抜粋転載)

『日吉台地下壕保存の会会報』第42号

このような父親が地下壕建設の現場監督であった石森氏への聞き取りの中で重要な発言として、①地下壕が箕輪の藤屋酒屋の前の山から掘り始め川田宅の方へ掘って行ったこと、②入口はツルハシで掘り、奥の方ではハッパをかけ、掘った土砂はトロッコで運び出して田や畑に捨てたこと、③作業は三交代で昼夜兼行で行っていたこと、④山ぎわにある家は、地下壕を掘るのに邪魔になるので、曳き屋を集めて移動させたこと、⑤日本人の職人が50~60人位通っていたが、三木組が連れてきた150人ほどの韓国人がいたことなど当時の様子を知る貴重な証言が得られている。

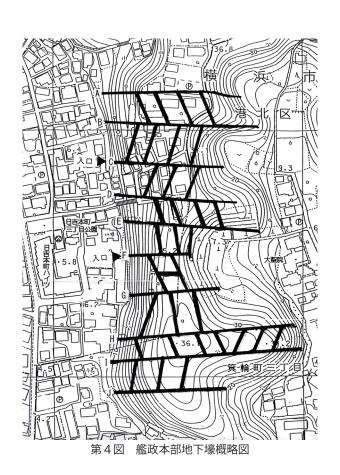
次に、艦政本部移転担当者であった石原氏への聞き取り調査でも、①8月はじめに様子を見に来た時、慶應普通部から南に続く丘の下の地下壕はコンクリートで固められ、空気抜き用の縦穴が二つ見えたこと、②地下壕の中は天井に裸電球があるだけだったこと、③8月15日に移転の予定であったが、その日に終戦となったことなど、ここでも重要な証言が得られている。これらは文献史料等には残らない当時の地下壕の様子、作業の手順や働いていた作

業員に関する情報など当時の状況を知ることができる貴重 な聞き取り調査の成果である。

2. 艦政本部地下壕の考古学的調査

a. 調査の経緯

海軍省艦政本部地下壕が存在する丘陵の北側には民家や アパートが立ち並んでいる。そのため国の「特殊地下壕対 策事業」の補助金が交付され、横浜市緑政局北部公園緑地 事務所によって防災上の理由から平成12年(2000)に 地下壕の埋め戻し作業が始まった。その後、「日吉台地下 壕を保存する会」から地下壕の埋め戻しが進行していると の指摘を受け、平成14年(2002)11月1日に「箕輪地 下壕学術調査計画書」、11月8日に「日吉の丘公園内箕 輪地下壕学術調査について(協議) を横浜市緑政局北部 公園緑地事務所長宛に提出し、11月12日に承認の回答 を得て、慶應義塾大学超表象デジタル研究センタープロ ジェクト研究「空間と人間」(代表 高山 博 慶應義塾大 学文学部教授)の一環として同年11月20日から25日 にかけて海軍省艦政本部地下壕の北側部分の学術調査を実 施した。具体的な調査内容は、地下壕の①測量調査、②写 真撮影、③地下露頭調査、④遺物、コンクリート片、木材 等の採集である。本調査の概要については既に公表済であ る (桜井 2003 a・b、桜井・大西ほか 2005)。



68

b. 調査体制

調査参加者は以下の通りである(所属は調査時)。 櫻井準也 慶應義塾大学文学部助教授(調査責任者) 朽木 量 慶應義塾大学文学部非常勤講師 都倉武之 慶應義塾福澤研究センター 藤山隆造 慶應義塾大学大学院生 町田壮平・山本 卓 慶應義塾大学学生 細井 守 藤沢市教育委員会 関東第四紀研究会 菊地隆男(立正大学)、上杉陽(都留文科大学)、 安野 信、稲垣 進 神奈川災害史研究所 林 美佐 日吉台地下壕保存の会 新井、喜田、亀岡、常盤、関崎、谷藤、富澤、岡上

c. 調査日程

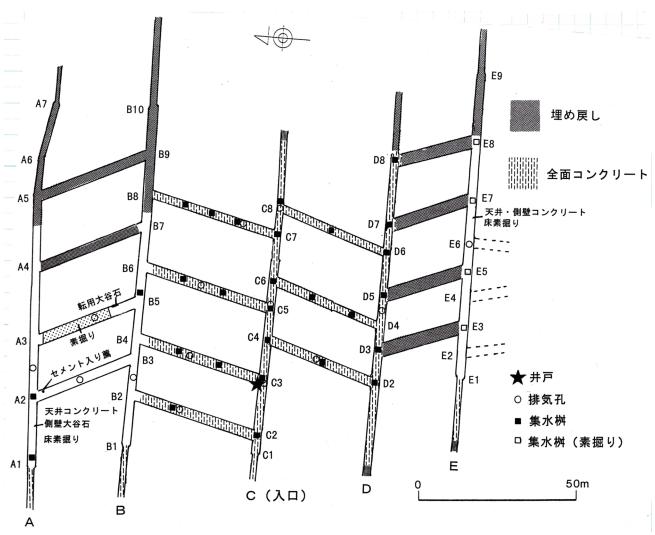
平成14年(2002)11月20日(水)から25日(月) にかけて実施した。

d. 調査範囲と調査内容

調査は、防災対策のため埋め戻し作業が進行していたより緊急性の高い北側部分(A列~E列)を中心に実施し、南側部分(F列~J列)は写真撮影のみ実施した(図4)。 具体的な調査内容として、まず地下壕の測量調査および写真撮影を行った。測量調査(簡易測量)では地下壕平面図の再確認、コンクリートの施工状況の調査、排気孔・集水枡・井戸の位置の記入を中心に実施した。写真撮影は支壕ごとの全体撮影に加え、天井・側壁・床面の施工状態など細部の撮影、さらに排気孔・集水枡などの付属施設の撮影を行った。また、大谷石の切石や型枠板など内部に残る遺物を若干採集した。さらに、関東第四紀研究会の方々に地下露頭の調査をお願いし、コンクリートに使用されていた砂利(礫)の分析を上本進二氏、林美佐氏に依頼した。

e. 調査結果

今回は地下壕北側 (A列~E列) を中心に調査を実施した (第5図)。調査段階ですでに埋め戻しが完了している部分は、A列東側部分 (A5以東)、B列東側部分 (B8



第5図 艦政本部地下壕北側測量調査図



写真1 地下壕内部(A列西側)



写真3 地下壕内部(A3-B5間北側)



写真5 側壁裏込め(A2-A3間)

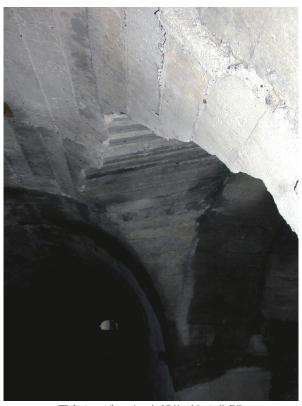


写真2 ジョイント部分(B3北側)



写真4 大谷石とコンクリートの側壁(B2付近)



写真 6 大谷石持ち出し跡 (A列)



写真7 地下壕内部(B4-C3間)



写真8 コンクリート流し込み跡(A2)



写真9 コンクリート断面(A3)



写真 10 集水枡 (B8-C7間)



写真 11 排気孔蓋 (B8-C7間)



写真 12 導水管跡(B8-C7間)

以東)、 $A \cdot B$ 列の間($A \cdot 4 - B \cdot 7$ 間、 $A \cdot 5 - B \cdot 9$ 間)、D 列東端部分($D \cdot 8$ 以東)、E 列東端部分($E \cdot 8$ 以東)、D 列・E 列の間($D \cdot 3 - E \cdot 3$ 間、 $D \cdot 5 - E \cdot 5$ 間、 $D \cdot 7 - E \cdot 7$ 間、 $D \cdot 8 - E \cdot 8$ 間)である。そのため今回はA 列からE 列にかけての埋め戻しされていない部分について報告する。

まず、地下壕内部の大きさは入口部分が最大幅2mで最大高2.1~2.3 m程度、内部は東西方向(A列~E列)の地下壕が最大幅2.5 mで最大高2.6~2.7 m、南北方向の地下壕が最大幅2.5 mで最大高2.5 m(A列~C列間)あるいは最大幅3mで最大高3m前後(D列~E列間)である。このうちD列~E列間の南北方向の地下壕の規模がやや大きいことから部屋としての機能があらかじめ想定されていたことが伺える。また、A列~E列の入口部分はすべて本壕よりも幅が狭く、全面コンクリート施工となっている。

次に、地下壕内の施工状況である。A列およびB列の東 西地下壕については側壁に大谷石が使用され、天井はコ ンクリート、床が素掘り(中央に溝が掘られている)の 状況であった(写真1)。また、南北地下壕とのジョイン ト部分(A2南側・A3南側・B3北側・B5北側)は側 壁・天井ともコンクリート流し込み施工となっている(写 真2)。A列~B列間の東西地下壕については、A2-B 3間が側壁に大谷石が使用され、天井はコンクリート、床 が素掘りの状況であった。A3-B5間は南側が側壁に大 谷石(転用大谷石)が使用されているが、北側はすべて素 掘りの状態で床に崩落した岩石が散乱していた(写真3)。 なお、大谷石が使用されている側壁は全面大谷石で施工さ れているわけではなくほぼ等間隔に大谷石の壁面が並んで いる状態であり、コンクリート天井を支える柱としての機 能を果している。また、一部コンクリートと大谷石の側壁 が交互に施工されている部分もみられた(写真4)。大谷 石の側壁の裏側の岩盤との隙間に岩石片や大谷石片等で裏 込めがなされている(写真5)。また、戦後になって大谷 石が持ち出されたと推測される部分も多くみられる(写真 6)。

これに対し、C列およびD列の東西地下壕は全面コンクリート施工であり、B列~D列間の南北地下壕(B2-C2間、B4-C3間、B6-C5間、B8-C7間、C4-D2間、C6-D4間、C8-D6間)も同様の施工であった(写真7)。また、E列は側壁と天井がコンクリート流し込みで床が素掘りの状況であった。

一般に地下壕(隧道)の構築は掘削(切崩・屑出・支保 工)→覆工の工程で行われる。このうち、切崩には鶴嘴や 削岩機を用いる人力掘削と爆破による掘削があるが、聞き 取り調査にもあるように本地下壕では入口付近は人力、奥 の部分は爆破により掘削が行われたようである。また、コンクリートの施工方法としては、コンクリート組み立て工法である「コンクリート塊積」と壁面に予め板で型枠をつくりコンクリートを流し込む「コンクリート場所打」があるが(海軍施設本部『隧道工法』)、本地下壕は基本的に「コンクリート場所打」施工であり、使用された型枠木材(120×12×3cm)がそのまま残っている場所やコンクリート流し込みの痕跡が明瞭に観察できる箇所も各所に存在している(写真8)。また、コンクリートの厚さは平均で40cm程度であるが、床面近くでは90cmを超える部分もあった(写真9)。

次に、内部施設として排水施設、排気施設、配電施設、 井戸がある。このうち排水施設としては、地下壕中央の床 面下に土管が埋設されており、地下壕の中央(幅 18cm 程 度)ないし壁際(幅 5cm 程度)にある溝の排水をコンクリー ト製の集水桝に集め、床下に敷設された土管に流す構造と なっている (写真 10)。集水枡の設置場所は東西地下壕と 南北地下壕の交点や地下壕の中央、さらには三分割した位 置にあり、コンクリートの枠が完成しているものが28ヶ 所(A1、A2、B5付近、B2-C2間、B4-C3間 の2ヶ所、B6-C5間の2ヶ所、B8-C7間の3ヶ 所、C2、C3、C4、C5、C6、C7、C8付近、C 4-D2間、C6-D4間の2ヶ所、C8-D6間、D2、 D3、D5、D6、D7、D8)と素掘りの状態のものが4ヶ 所(E3、E5、E7、E8)ある。集水枡は全面コンク リート施工の部分(B列からD列の間)に集中しているが、 南北地下壕に設置されている集水枡の数は1ヶ所から3ヶ 所まであり一定しない。なお、完成している箇所も含め集 水枡や側溝に蓋はまったく存在していなかった。

天井部の排気施設は全部で13ヶ所あるが、東西地下壕と南北地下壕の交点付近にはなく、地下壕のほぼ中央部分に設置されていること以外に配置に規則性はみられない。内部に鉄製の排気管が通っているが、先端にキノコ状の蓋(雨水受け)がついており(写真11)、そこから導水管が壁面に延びて(写真12)床の側溝に繋がる仕組みになっている。天井の排気管のまわりに方形の型枠板が残っているものもあるが(写真13)、コンクリートが施工されていない素掘りの場所では岩盤に穴を開けて排気管を差し込んだ状態であった(写真14)。

また、天井部の配電施設として $10 \sim 30 \text{cm}$ 程度の長さの木煉瓦があり、鉄釘で板材を打ち付けられているものや板材に碍子が残っているものも確認された(写真 15)。さらに、井戸については、C列のC3の位置に1 基存在している(写真 16)。井戸枠は陶器製で今も地下水を湛えている。



写真13 排気孔(B2-B3間)



写真 14 排気孔 (A3-B5間)



写真 15 木煉瓦 (B6-C5)



写真 16 井戸 (C3)



写真 17 戦災を受けた大谷石の側壁 (A3-B5間)



写真 18 戦災を受けた大谷石の側壁(部分)(A3-B5間)



写真 19 型枠板検出状況(A 2-B 3間)



写真 20 地下壕内部(| 列)

このような、天井・側壁・床の施工状況や排水施設、排 気施設などの内部施設の施工状況から地下壕北側(A列~ E列)の状況は次のようにまとめられる。

まず、B列~C列間の南北地下壕、C列、C列~D列間の南北地下壕、D列が天井・側壁・床がすべてコンクリートで施工されており完成した部分であると思われる。これに対し、A列、A2-B3間、A3-B5間の南側、そしてB列が天井コンクリート施工で側壁に大谷石が用いられ床は素掘りの状態であり地下壕は未完成である。側壁に使用されている大谷石については、敗戦直前のセメント不足



写真 21 残された型枠板 (F~G列)



写真 23 コンクリート構造物 (G列)



写真 25 採集した大谷石の切石

を物語るとして以前から注目されていたが、A3-B5間の南側の壁面に使用されている大谷石の表面が焼夷弾で焼けたような状態であり(写真17・18)、これが空襲を受けた田園調布の大谷石を転用したものであると推定される。また、E列も側壁と天井がコンクリート施工で床が素掘りであり(集水枡も素掘りのまま)であり未完成である。この他にも全面素掘りで崩落した岩石が散乱する箇所(A3-B5間)があり、全体の半分程度が未完成の状態であり、コンクリート施工の型枠板(A2-B3間)(写真19)、薦に入ったセメント(A2付近)、鎹(A3-B5間)



写真 22 トロッコの枕木 (F~G列)



写真 24 井戸 (H列)



写真 26 採集した型枠板

などがそのまま残されていた。また、排水施設である集水 桝、排気施設としての排気孔の数や位置は場所によって異 なり、規則性が認められない点も本地下壕の特徴である。

これに対し、F列の入口から入坑する地下壕南側部分 (F列~J列) については、次のようにまとめられる。まず、天井・側壁・床の施工状況をみると、全面コンクリートで施工されている部分、天井がコンクリート施工で側壁に大谷石が用いられ床が素掘りの部分、側壁がコンクリート施工で天井と床が素掘りの部分、全面が素掘りの部分があった。このうち、全面素掘りの部分の中でもI列およびJ列については砂岩層のため壁や天井がかなり崩落していた(写真20)。その他にも、南北地下壕と東西地下壕のジョイント部分でコンクリートの型枠板が施工当時の状態で残され(写真21)、土砂を運んだトロッコの枕木が残存している(写真22)など、工事が途中で放棄された様子が窺える。また、用途不明のコンクリート構築物(写真23)および井戸(写真24)が各1基確認された。

3. 艦政本部地下壕の自然科学的調査

(1) 地下壕内路頭の地質学的検討

日吉台海軍地下壕群は多摩丘陵の端部(丘陵幅 100~150 m程度)に構築されている。このうち、今回調査の対象となった箕輪海軍省艦政本部地下壕は丘陵平坦面から15~25 m程度の深さに構築されている。今回は関東第四紀研究会のメンバーによって地下壕内路頭の調査が実施された(写真 2 7)。調査が実施されたのは、主に A 3 - B 5間の地下路頭部分である。なお、日吉台海軍地下壕群において内部の地下露頭が地質学の専門家によって調査されたのは初めてのことである。

調査にあたった関東第四紀研究会の菊地隆男氏によると、地下壕が掘られた地層は第四紀更新世前期の上総層群 王禅寺層(海成層:約120万年前頃)にあたる(図6・7) (岡・菊地・桂島1984)。地層は全体として泥勝の砂岩・



写真 27 地質調査の様子

泥岩互層で走向は NNE - SSW \sim NE - SW \circ NW 方向に $3\sim5$ °で傾いている。地質学的な特徴としては、厚いごましお状の結晶質火山灰層(無色鉱物は石英や長石、有色鉱物はカクセン石)が発見されたことで、この火山灰層は宮田タフ(MT:タフは凝灰岩の意味)と称されるもので王禅寺層に介在するものである。また、上部層準に軽石粒を伴うことも特徴である。さらに地下壕の南側部分(I 列・J列)は砂岩層が異常に厚くなり、層理面が起伏を伴って明らかなスランピング構造(海底地すべり堆積物の構造)をみせているところがあるが、これもこの付近の王禅寺層にみられる特徴であるとのことである。

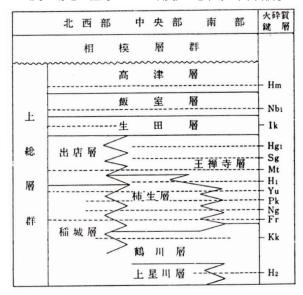
(2) コンクリートに使用された礫の採集地について

本調査では箕輪海軍省艦政本部地下壕のコンクリートから採集した礫 60 点について、上本進二氏(神奈川災害史

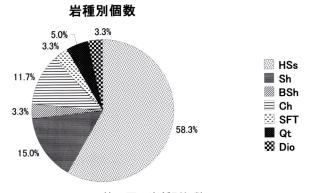


第6図 東京西南部地域の地質

(岡・菊地・桂島 1984 を改変):地下壕は矢印部分



第7図 火砕質鍵層に基づく上総層群各層の関係を示す図 (岡・菊地・桂島 1984)



第8図 岩種別個数

(HSs:硬質砂岩、Sh:頁岩、BSh:黒色頁岩、Ch:チャート、SFT:軟質細粒凝灰岩、Qt:石英、Dio:閃緑岩)

表1 平均礫径と形状

平均 標準偏差	長径 37.23 12.61 長径	中径 27.89 10.04	短径 16.71 6.79	偏平度 0.39	方形率 1.36	細長率
標準偏差 Sh	12.61			0.39	1 26	
Sh		10.04	6.79		1.30	2.40
	長径			0.19	0.24	0.73
राष्ट्र भटन		中径	短径	偏平度	方形率	細長率
十均	33.00	23.00	13.89	0.38	1.44	2.66
標準偏差	13.89	8.45	7.01	0.20	0.38	1.27
Dio	長径	中径	短径	偏平度	方形率	細長率
平均	29.50	26.00	12.50	0.49	1.15	2.60
標準偏差	1.50	4.00	3.50	0.21	0.12	0.85
Ch	長径	中径	短径	偏平度	方形率	細長率
平均	30.86	24.71	15.00	0.37	1.24	2.06
標準偏差	18.15	12.69	6.65	0.09	0.19	0.64
Qt	長径	中径	短径	偏平度	方形率	細長率
平均	26.00	24.00	9.67	0.61	1.10	3.08
標準偏差	12.75	12.73	6.02	0.09	0.07	1.01
BSh	長径	中径	短径	偏平度	方形率	細長率
平均	25.50	20.00	11.00	0.32	1.27	2.43
標準偏差	10.50	8.00	1.00	0.32	0.02	1.18
SFT	長径	中径	短径	偏平度	方形率	細長率
平均	23.50	17.00	14.00	0.16	1.37	1.65
標準偏差	6.50	4.00	2.00	0.08	0.06	0.23

(HSs:硬質砂岩、Sh:頁岩、BSh:黒色頁岩、Ch:チャート、SFT:軟質細粒凝灰岩、Qt:石英、Dio:閃緑岩)

研究会)、林 美佐氏(災害考古研究所) に礫種・礫径分析 を依頼した。

その結果、礫種構成について以下のようなコメントをい ただいた(第8図)。

- ・ 礫種については硬質砂岩が過半数を占め、チャート、 頁岩、黒色頁岩などの多摩川の礫に特徴的な礫種構成で あった。
- ・多摩川水系の礫は(あきる野市睦橋の調査では)、砂岩・ 頁岩を主体とする関東山地を流域とするため硬質の砂岩が

半数を占め、次に黒色頁岩の礫が多い。

- ・凝灰質砂岩は第三系の五日市町層群を流域とする支流(平井川)から出たもので軟質粗粒である。
- ・チャートは赤・黒灰・黄緑・青灰色のものがあるが、良 質のものは少ない。
- ・この他、閃緑岩・結晶片岩・石灰岩・凝灰岩・輝緑凝灰 岩がわずかだが含まれている。

次に、礫径については、礫の長径・中径・短径を計測し、 計測結果から偏平度・方形率・細長率を算出した(表 1)。 ただし、偏平度・方形率・細長率を以下の式で求めた。 偏平度=短径÷中径

偏平度は0に近いほど偏平な礫である

方形率=長径÷中径

方形率は1に近いほど方形に近い

細長率=長径÷短径

数値が大きいほど偏平で細長い礫で、1に近いほど立方 体に近い礫である。

上本、林両氏の分析によって、コンクリートに使用されている砂利 (礫) の礫種は硬質砂岩が過半数を占め、チャート、頁岩、黒色頁岩が含まれるなど多摩川の礫に特徴的な礫種構成であったことが判明した。また、礫種によって異なるが礫径については、礫の長径が $23.50 \sim 37.23$ mmと小形であり、偏平度は $0.16 \sim 0.61$ 、方形率は $1.10 \sim 1.44$ 、細長率は $1.65 \sim 3.08$ であった。

これらの分析結果は海軍省艦政本部地下壕で使用された コンクリートに混和された砂利(礫)が多摩川下流域で採 集されたことを示すものである。

4. まとめ

今回は短期間の調査ではあったが、日吉台海軍地下壕群の中の箕輪海軍省艦政本部地下壕の北側部分を中心に調査を実施した。本地下壕は敗戦の年である昭和20年(1945)1月に掘削が開始され8月14日に完成したとされる地下壕であるが、翌8月15日に敗戦となり、実際には使用されなかった地下壕である。地下壕構築をめぐる状況は既に紹介したように寺田氏の関係者への聞き取り調査によって明らかになっているが、今回は構築された地下壕内部を調査することによって地下壕の様子を記録することができた。

調査の結果、完成して実際に使用された連合艦隊司令部 地下壕などの他の日吉台地下壕とは異なり、本地下壕では 内部のコンクリート施工(大谷石施工も含む)が完成した 部分は入口部分を除くと一部であり、未完成で放棄されて いる部分が多いことがわかった。また、未完成の部分も床 以外が完成している部分や側壁のみ完成している部分、さ らには素掘りの状態で東西地下壕と南北地下壕のジョイント部分のみコンクリート施工が実施されている部分などいくつかの段階で作業が中断している。また、コンクリート施工の際の型枠板が外されずそのまま残され、掘削土搬出のためのトロッコの枕木が残されていることも確認された。このように本地下壕は当時の海軍による地下壕建設の方法や手順を知ることができる貴重な地下壕ということになる。また、内部施工状態だけでなく地下壕の大きさや排水施設、排気施設などの内部施設の数や配置も異なっているが、その理由がどこにあるのか解明することも今後の研究課題である。

さらに敗戦直前のコンクリート不足のため側壁に大谷石が使用されていることも日吉台海軍地下壕群の他の地下壕にはない本地下壕の特徴である。また、東京の田園調布の空襲で被災した大谷石が転用されたとされているが、それに該当すると思われる大谷石の側壁も確認された。このよ

うに本地下壕は戦争末期の物資不足の状況を物語る歴史の 証人でもある。

現在、防災上の関係で箕輪海軍省艦政本部地下壕の北側は土砂で埋められた状態であるが、今後本地下壕に対して本格的な学術調査が実施されることを期待したい。

謝辞

今回の調査を実施するにあたっては横浜市緑政局北部公園緑地事務所に御理解・御協力を得た。また、慶應義塾大学文学部の高山博先生、日吉台地下壕保存の会の方々には終始多大な御協力を得た。さらに、菊地隆男先生をはじめ関東第四紀研究会の方々には地下壕内の露頭について貴重なコメントをいただき、神奈川災害史研究会の上本進二氏、神奈川災害史研究所の林美佐氏にはコンクリートに使用された砂利(礫)の分析をお願いした。関係各位に感謝する次第である。

参考文献

安藤広道 2011「日吉台一帯の地下壕群について」『日吉台遺跡群蝮谷地区発掘調査報告書―航空本部等地下壕出入口関連遺構の調査―』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

岡 重文・菊地隆男・桂島 茂 1984『東京西南部地域の地質』 地質調査所

海軍施設本部 1944『耐弾構造規準』(防衛庁防衛研究所蔵) 海軍施設本部 (刊行年不明)『隧道工法』(防衛庁防衛研究所蔵) 神奈川県歴史教育者協議会(編) 1996『神奈川県の戦争遺跡』 大月書店

- 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会 2001 『戦争を歩く・ みる・ふれる』教育資料出版会
- 菊地隆男 1984「多摩丘陵―上総層群とその堆積環境―」 『URBAN KUBOTA』23号
- 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011『日吉台遺跡 群蝮谷地区発掘調査報告書―航空本部等地下壕出入口関連遺 構の調査―』
- 桜井準也 2003a「箕輪地下壕(海軍省艦隊本部地下壕)の調 査成果」『日吉台地下壕保存の会会報』第65号
- 桜井準也 2003b「日吉台海軍地下壕の調査」『考古学ジャーナル』501号
- 桜井準也・大西 章ほか 2005「空間と人間ーキャンパス・スフェアにおける適応・生態・表象・デザインの分析と展開」(代表) 高山 博『表象文化に関する融合研究 平成12年度~平成16年度私立大学学術研究高度化推進事業(学術フロンティ

ア推進事業)研究成果報告書 第4巻 融合研究』

十菱駿武・菊地 実 2002『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房 十菱駿武・菊地 実 2003『続しらべる戦争遺跡の事典』柏書 房

浄法寺朝美 1981『日本防空史』原書房

- 白井 厚(監修)日吉台地下壕保存の会(編) 2006『フィール ドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』平和文化
- 戦争遺跡保存全国ネットワーク(編) 2003『戦争遺跡から学ぶ』岩波ジュニア新書
- 寺田貞治 1987「連合艦隊司令部日吉台地下壕について(5)」 『KEIOせいきょう 教職員版』第38号
- 寺田貞治 1997「旧海軍極秘地下施設「日吉台地下壕」」日吉 台地下壕保存の会(編)『太平洋戦争と慶応義塾』
- 東海林次男 2000「大聖院裏山(仮称日吉の丘公園)の地下 壕一川田さんへのお礼にかえて一」『日吉台地下壕保存の会 会報』第57号
- 日吉台地下壕保存の会 1994「日吉台地下壕 当時の関係者 の思い出話 7 地下壕の築城 2」『日吉台地下壕保存の会会 報』第30号
- 日吉台地下壕保存の会 1997「日吉台地下壕 当時の関係者 の思い出話20 日吉の日々11」『日吉台地下壕保存の会会報』 第42号
- 山田 朗(監修)日吉台地下壕保存の会(編) 2011『一度は訪ねてみたい戦争遺跡 本土決戦の虚像と実像』高文研

矢上台周辺における小規模地下壕の調査

千葉 毅

はじめに

日吉台、矢上台周辺には、連合艦隊司令部地下壕のような大規模地下壕だけでなく、小規模な地下壕も散在している。これらの遺構については、現在に至ってもその性格付けが不明瞭で、いくらかの議論がみられる程度であるが、軍が拠点としたような大規模地下壕に比べ、より一般市民の生活圏に近接した存在であることは間違いないだろう。

このような小規模地下壕は、開発に伴う造成工事等で、 その詳細が記録されないまま消滅してしまうことが多い。 しかし、これらの遺構についての記録を行うことは、戦時 中における生活空間の実態を把握する上で非常に重要な作 業になると考えられる。

ここでは、慶應義塾大学矢上キャンパス付近で発見された2箇所の小規模地下壕内部測量調査報告を行う。これらの地下壕は、道路沿いの擁壁工事に伴って発見されたもので、その資料的価値を鑑み緊急的に内部の測量調査、記

録保存を行った。

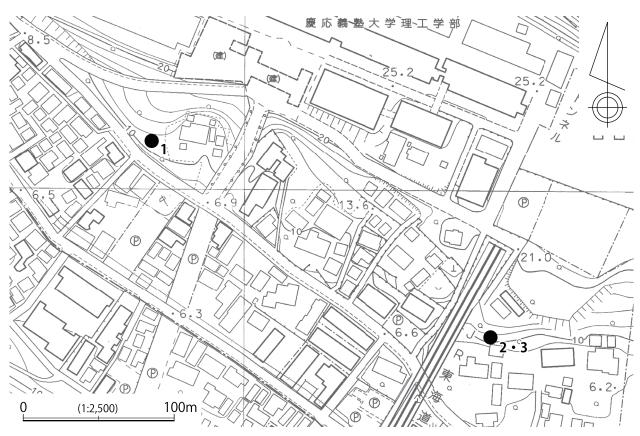
調査期間は 2006 年 10 月 8 日、29 日、調査者は櫻井 準也(当時、慶應義塾大学文学部助教授)、下島綾美、千 葉毅(同学部 4 年)、澤浦亮平(同学部 2 年)である。

なお、これらの地下壕については、『日吉台地下壕保存の会会報』第81号、第82号に概要を報告してある(桜井2007、千葉2007)。

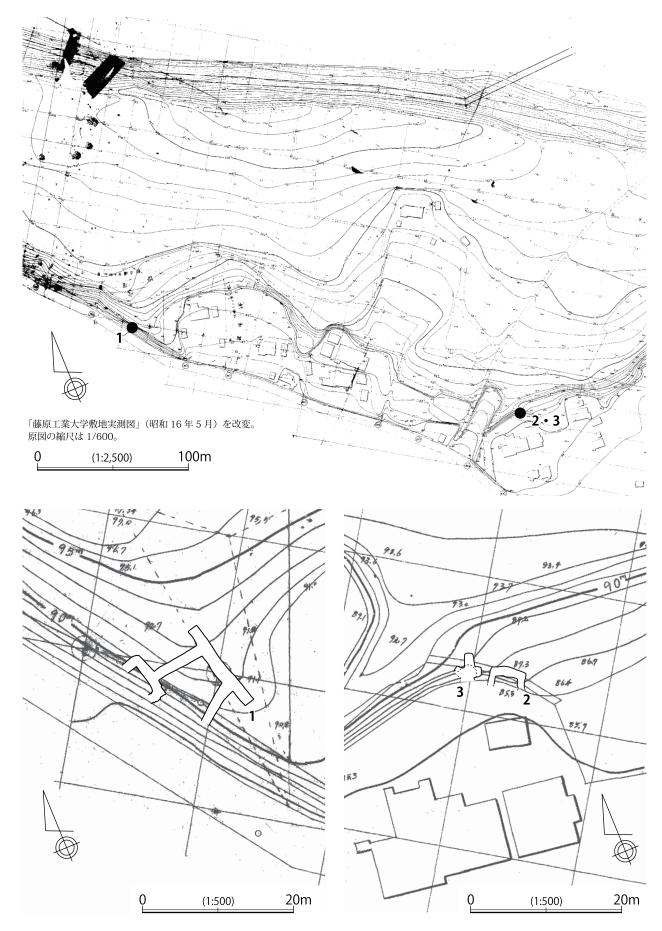
1. 小規模地下壕の測量調査

2箇所の地下壕は、いずれも慶應義塾大学矢上キャンパスの南方約50mに走る道路沿いより発見された(第1図)。このうち1箇所は、2つの小規模地下壕からなっており、合計で3つの地下壕の存在が確認された。この道路は戦前から同じ道なりに存在している(第2図)。標高はいずれも約10mに位置する。

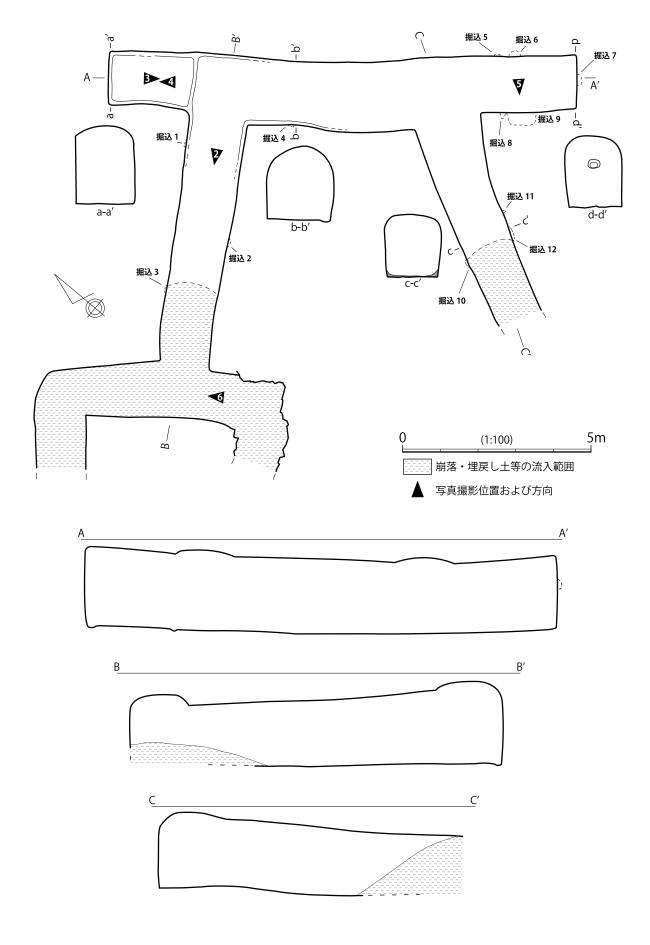
遺構の構築、使用時期を示すと考えられる遺物は出土していないが、立地や内部構造から、アジア太平洋戦争期に



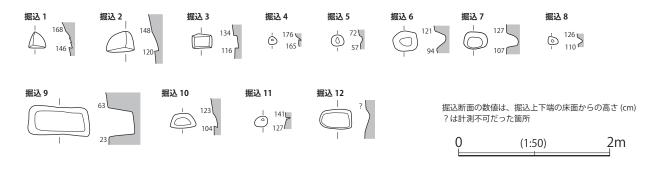
第1図 小規模地下壕の位置

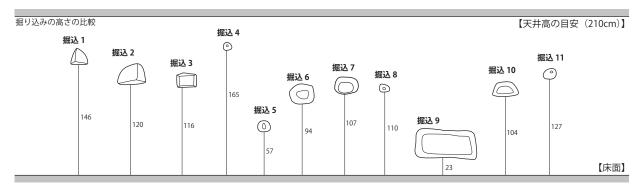


第2図 当時の地形と小規模地下壕の立地



第3図 第1号小規模地下壕(1)





第4図 第1号小規模地下壕(2)



写真 1 第 1 号小規模地下壕 発見時の近景」



写真 2 第1号小規模地下壕 内部の状況



写真 3 第1号小規模地下壕 内部の状況



写真 4 第1号小規模地下壕 内部の状況



写真 5 第 1 号小規模地下壕 掘込 9



写真 6 第1号小規模地下壕 内部の状況写真



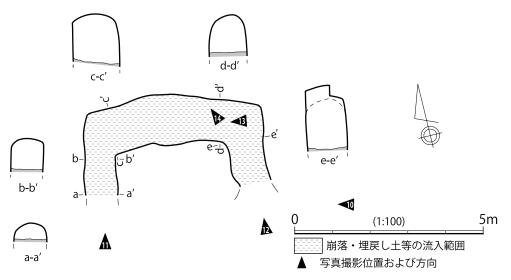
写真 7 第 1 号小規模地下壕 作業状況



写真8 第1号小規模地下壕 調査後の近景



写真 9 第 1 号小規模地下壕に投棄されていた遺物



第5図 第2号小規模地下壕



写真 10 第 2 号小規模地下壕 入口近景



第2号小規模地下壕 入口正面(東側)



写真 14 第 2 号小規模地下壕 内部に投棄された遺物



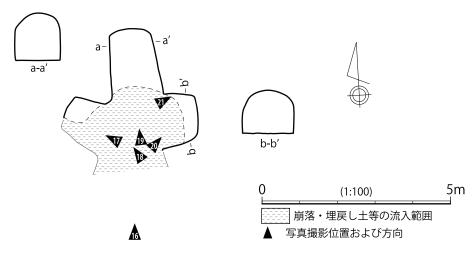
第2号小規模地下壕 入口正面(西側)



写真 12 第 2 号小規模地下壕 入口正面(東側)



写真 15 第 2 号小規模地下壕 作業状況



第6図 第3号小規模地下壕



写真 16 第 3 号小規模地下壕 入口正面



写真 18 第 3 号小規模地下壕 内部の状況



写真 20 第3号小規模地下壕 内部の状況 (東側)



写真 17 第 3 号小規模地下壕 内部の状況 (西側)



写真 19 第 3 号小規模地下壕 内部の状況(正面)



写真 21 第 3 号小規模地下壕 壁面のスコップ痕



写真 22 第 2 号・第 3 号小規模地下壕に投棄されていた遺物

構築された小規模地下壕として調査を行った。

第1号小規模地下壕は、10月8日に調査したもので今回発見された地下壕のうち最大である(第3・4図)。入り口は道路に面しており、現状で道路より1m程高い位置にある。入り口は当初3箇所あったようだが、そのうち1箇所は戦後に塞いだと思われる土砂と崩落土によって完全に埋没しており、残っている2箇所も同様の土砂やゴミが投棄され狭くなっている。

全体の構造は、トンネル状に掘削された通路が組み合わさった形状をなしており、海軍施設本部の『築城隧道(小型)計畫基準』(昭和19年8月30日発行)の隧道形状分類に当てはめれば「コノ字型」のバリエーションと考えられる(第7図)。

通路はいずれも幅約 150 ~ 180cm、天井高約 210cm で全体的にほぼ均一であるが、交叉する箇所は天井が他より 10cm 程高くなっている。内面はすべて素掘りで、掘削の際の鶴嘴やスコップの痕跡が残る。壁面、天井はすべてスコップ痕で覆われており、鶴嘴痕は通路先端の壁面にのみ認められた。現存する総延長は約 37 mである。

壁には合計 12 箇所に掘り込みが確認された。規則的に 配列されているものではなく配電施設等ではないと考えら れるが、何らかの施設が設置されていた可能性は十分考え られる。掘り込みの高さは、床面から 120cm 程度のもの が多いが、ややバラつく(第4図)。掘り込みは形状から大きく3種類に分類できる。掘りがやや深く明確な掘り込みが認められるもの(掘込6、7、9)、円形で先の尖るもの(4、12)、掘りが浅く形状が不定形のもの(1、2、3、5、8、10、12)である。

明確な掘り込みが認められるものは、概ね直方体状に掘り込まれており、箱状のものの収納に用いられていたことも考えられよう。特に最大の掘込9は、他の掘り込みに比べ設置された高さが低いことから、重量物の収納に使用した可能性も予想される(写真5)。円形のものは、上方から刺さっていた棒状のものを下方に向けて引き抜いたような痕跡となっている。掘りが浅いものは、壁面に設置されたものが、周囲の土ごと剥落したようである。

通路には一部壁に沿って簡易な側溝が付されている部分があるが、大半は壁からの崩落土に埋もれてしまっており全体に設けられていたかは不明である。

前述のように構築、使用時のものと思われる遺物は検出 されなかったが、戦後のものと考えられるガラス瓶や湯飲 み茶碗等が投棄されていた(写真 9)。

第2号、第3号小規模地下壕は、10月29日に調査したもので、道路より約40m北へ入り込んだところに入り口がある(第 $1\cdot2$ 図)。これらは入り口部が近接していため発見当初は1つの地下壕と推測されていた。すべ

ての入り口は第1号地下壕と同様に土砂が堆積しており、 狭くなっている。特に第2号地下壕の西側と第3号地下壕 の入り口は狭く、内部に入るのは非常に困難であった。

第2号小規模地下壕は、「コ」字形で通路幅は入り口部が約90cm、奥が約120cm、天井高は約120cmである(第5図)。壁面、天井ともに崩落している箇所が多く、全体的にやや歪な印象を受ける。壁面はすべて素掘りである。東側の入り口部は、部分的に重機による削平が及んでおり、残存していない。削平は近年のものと思われる。床面はほぼ全面が崩落土によって埋没している。残存する壁面、天井部分にはほぼ全体に掘削の際のスコップ痕が認められる。総延長は約6mである。

第3号小規模地下壕は、入り口付近より三方向へ通路が分岐する形状を呈しているが(第6図)、崩落が激しく、特に入り口部はほとんど構築時の形を残していないものと思われる。正面へ延びる通路は約350cm、左右へはそれぞれ約150cmである。通路幅は約130cm、天井は崩落が激しいが、約120cmの高さである。壁面はすべて素掘りである。第2号地下壕と同様に、残存する壁面にはほぼ全面にスコップ痕が認められるが(写真21)、壁面、天井自体の作りは粗く不整形である。総延長は約4.3 mである。第2号、第3号のいずれも、第1号地下壕に比べ小規模であり、作りも簡素である。また第1号地下壕にあったような壁面への掘り込み等の痕跡は確認されなかった。

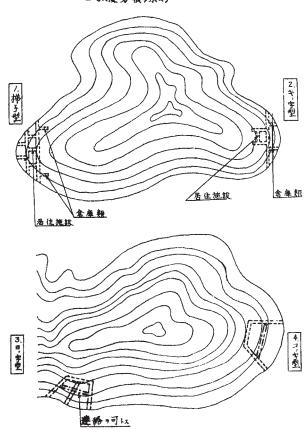
第2号、第3号地下壕からも構築、使用時のものと思 われる遺物は検出されなかったが、戦後のものと考えられ るガラス瓶や缶、マヨネーズの空き容器等が投棄されてい た (写真22)。

2. 小規模地下壕の性格

前述のように、小規模地下壕に関する記録は少なく、議 論もほとんどなされていないのが現状である。これらの性 格はどのようなものと推定されるであろうか。

これらの地下壕は、その構造や掘削の熟練度より、いわゆる「防空壕」ではなく、湘南地域から横浜地域にかけて多く分布する、本土決戦を想定して陸軍によって構築された「戦術用地下壕」の可能性が挙げられる(清水 1997、桜井 1999)。壁面に存在していた何らかの施設と思われ

附圖第一 隧 道 形 状 (毒子優多順,示x)



第7図 『築城隧道(小型)計畫基準』掲載の「隧道形状」

る掘り込みもそれに関連するものと考えることができる。 第2号、第3号は、第1号に比べ規模が小さく構造の不 整形な点が見受けられ、民間の「防空壕」である可能性も 残る。ただ壁面に残された鶴嘴、スコップのような工具痕 は第1号と非常に類似しており、それらが無関係ではな いことを示唆する。これらの地下壕掘削の経緯や当時の状 況に関しては今のところわずかな証言等(清水1997)を 除いてほとんど記録が知られておらず、残念ながらその性 格を詳細に知ることは困難である。より具体的な内容に接 近するためには、さらなる聞き取り調査の実施や地形との 関係を踏まえた上で地下壕分布等を把握していくことが肝 要であろう。

参考文献

桜井準也 1999「発掘された戦争遺跡-藤沢周辺の遺跡から発掘された「防空壕」について-」『湘南考古学同好会々報』 第75号 湘南考古学同好会 7-11 頁

桜井準也 2007「〔速報〕慶應大学日吉キャンパスにおいて埋蔵文化財試掘調査、矢上キャンパスにおいて地下壕の測量調

査実施される」『日吉台地下壕保存の会会報』 第81号 日 吉台地下壕保存の会 9・10頁

清水照信 1997「シナリオ『戦時下の藤沢・藤沢にも戦争があった』」『藤沢市史研究』第30号 41-70頁

千葉 毅 2007「矢上地下壕調査報告」『日吉台地下壕保 存の会会報』第82号 日吉台地下壕保存の会 8-11 頁

日吉台地下壕に関する音声・映像資料について

都倉武之

はじめに

ここでは、日吉台地下壕に関連する音声・映像資料について報告する。

日吉台地下壕の建設の経緯や使用状況については、歴史的文書の現存が乏しいことから、何らかの記憶を持つ者への聞き取り調査が重要な意味を持つ。しかしそのような当事者は現在では非常に限られており、しかも現在では70年以上の経過により談話の信憑性の面でも問題が多いことが予想される。さらに現在でも健在の海軍関係の当事者がいたとしても、海軍という組織の動向を巨視的に把握できる立場にあった者ではない可能性が高い。

そこで、過去に行われた聞き取り調査の記録が重要な意 味を持つこととなる。日吉台地下壕の歴史に関しては、慶 應義塾の大学、高校、中学で単発的な調査が過去に数度行 われたことが確認できるものの、民間有志によって組織さ れた日吉台地下壕保存の会によって積み上げられてきたも の以外に継続的な調査は存在しなかった。幸い日吉台地 下壕保存の会では、会報に長く聞き取り調査の結果を連載 するなどして体験談の記録が蓄積されてきた。しかしそれ は実施された聞き取り調査のすべてではないと考えられ、 また掲載された談話は明らかに逐語的ではなく、記録者に よる要約や解釈が若干なりとも加えられていると考えられ る。このため、これらの記録の資料的性質を考える上では、 音声や映像記録との比較がなし得れば、より資料としての 価値を高めることができると考えられる。また、それ以外 にも、過去に実施された調査などの際の音声・映像資料を 発掘することは、今では確認し得ない情報を得る手段とし て重要な意味を持つであろう。

そこで、本研究に際して音声・映像記録の現存状況の調査を実施した。また、それらの記録媒体自体を保存するための措置を講じるとともに、今後学術研究への活用ができるようデジタル化を進め、そのデータを保管していく体制を整備した。以下ではその概略を報告する。

1. 音声・映像資料の現存状況の調査

日吉台地下壕に関する音声・映像資料が保管されている 可能性が高い機関として、慶應義塾が想定される。そこで まず慶應義塾に関連する歴史資料を保管している大学付属 研究所である福沢研究センターの所蔵資料の調査を行った³。 未公開の資料目録等を含めて所蔵資料の調査を行ったが、 地下壕に関連する音声・映像資料の所蔵は確認されなかっ た。またかつて生徒による地下壕調査が行われた慶應義塾 高等学校、慶應義塾普通部にも、関連資料は確認すること ができなかった。

次に日吉台地下壕保存の会に協力を要請し、既存の記録の所在についての情報提供を受けた。その結果、同会の記録が一元的には管理されていないこと、現在ある程度まとまって保管されている資料も、基本的には近年の行事の映像記録に限られ、資料的な音声・映像記録は保管されていないことが判明するに至った。

同会では 1999 年に実質的に会の運営全体を担っていた 事務局長が退任し、この時点で会の創立以来の記録に断絶 があることが明らかとなった。そこで、当初の事務局長や 当時調査に協力した関係者と連絡を取り、資料探索を行っ た結果、音声・映像資料の提供を受けることができた。そ の内容は表 1 の通りである。

2. 音声・映像資料の内容

現存していた音声・映像記録は、1996 年~99 年にかけて収録されたもので、8 ミリビデオが 6 本、VHS-C / SVHS-C 形式が 13 本、カセットテープが 2 本である。

その内容は、聞き取り調査 16 本、日吉台地下壕、蟹ヶ谷通信隊地下壕等の記録撮影が 5 本である。

聞き取り調査の内訳は、海軍関係者に対するものが9本、日吉住人に対するものが7本(海軍関係者と半分ずつ記録されているもの1本含む)、慶應義塾出身者に対するものが3本(海軍関係者でなおかつ慶應出身の者を対象とした2本を含む)となっている。これらには、同一時の記録で複数本にまたがるものや、同一時に別々のカメラで撮影されたものも含まれるため、同一時の記録を1件として整理したものが表1である(談話内容がごく断片的にしか残されていない聞き取り風景を記録しただけのビデオ2本は省略した)。

地下壕に関係する音声・映像記録は、地下壕全体の使用 状況、任務の状況、自分の所属以外の地下壕の状況などに ついて広く把握する立場になかった者が大半を占めている ものの、地下壕の使用者としての日常の様子、任務の様子、 その立場から垣間見た高級将校たちの様子などが断片的に記録されている。ただし、特筆すべき新事実は見当たらない。また、地下壕の構造や使用方法に関する具体的情報は乏しい。慶應関係者の証言は、当時の慶應義塾や学生、キャンパスの様子を知る者による貴重な証言であるが、地下壕には直接関連しないものであった。

これら今回確認された聞き取り調査記録を日吉台地下壕保存の会の会報と照合した結果、いずれも掲載されていないことが判明した。これらの記録撮影の多くは、1996年に慶應義塾高校の文化祭で行われた展示発表(③参照)」。との関連で、同会事務局長が高校生と行ったものが主であると考えられ、必ずしも同会としての調査ではなかったことが、会報への未掲載に関係するものかと思われる。。日吉台地下壕、蟹ヶ谷通信隊地下壕などの内部状況を記録した映像資料も、同じ時期の撮影である。これらには、慶應義塾当局によって整備工事が行われる前の連合艦隊司令部地下壕、閉鎖前の艦政本部地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕が比較的丹念に記録された映像が含まれており、貴重である(写真2~8参照)。

本調査を契機として、今後同会で実施する聞き取り調査については、記録を共有しておけるよう同会と打ち合わせ、その第一回として地下壕の土地所有者だった男性、第二回として航空本部理事生だった女性2名の聞き取り調査を共同で実施し、双方で記録を保管することとした(表1-12・13)。これにより今後調査の記録蓄積を継続的に行えることとなった。

これらのうち、地下壕の構造に関連する内容を含む 2013年7月1日実施の第一回聞き取り調査の要旨を資料 として掲げる。この聞き取り調査によって、従来知られていなかった連合艦隊司令部地下壕入口 18 a 周辺の構造についての情報を得ることができた。

3. 総括

すでに述べたとおり、日吉台地下壕保存の会において過去に行われた聞き取り調査の結果は、同会会報に多数掲載されており、そのデータは同会ホームページにて全文公開されている⁶。それらは今後にわたり、日吉台地下壕の研究に重要な意味を持つこととなる。

今回の調査は、会報に収録された記録が、1名の聞き手個人の筆記のみによって構成されたものであることを示すもので、その内容を逐語的に検証するための音声・映像記録は基本的には残されていないことが判明した。

これまでに蓄積された日吉台地下壕に関する音声・映像による記録が当初想定よりはるかに乏しいことは遺憾である。しかし、従来蓄積された調査の資料的性格や今後の課題などを的確に把握する上で、これらの事情は有益なものであると思われる。

今回発見された音声・映像記録は、慶應義塾福沢研究センターへ寄贈され、まとめて保管されることとなり、またデジタルデータも作成され、同センターにおいて保管することとなった。公開方法については現在検討中である。

さらに、日吉台地下壕保存の会において、今後実施する 聞き取り調査などの記録は、同センターと共有することが 申し合わされた。将来にわたる学術研究の資源として保管 される環境が整ったことは、重要な成果といえよう。

注

1) 日吉台地下壕保存の会以外で、過去に実施された調査として、4 例を確認した。①1958年秋、慶應義塾普通部生徒が例年開催する「労作展」に際して発表した調査。慶應義塾福沢研究センターに展示風景写真1 枚が所蔵されている(資料番号K03228-47、写真1 参照)。ただし調査の詳細は不詳。②1969年の慶應義塾高等学校生徒による文化祭「日吉祭」での調査発表。その内容は『わが足の下』と題して小冊子にまとめられた(発行は1972年、慶應義塾福沢研究センター蔵)。③1996年、同じく慶應高校生徒による「日吉祭」発表(注3 参照)。④2004年、慶應義塾大学放送研究会有志によって製作され「三田祭」で上映された映像作品「わが足

の下」(慶應義塾福沢研究センター蔵)。

- 2) 福沢研究センターは、慶應義塾の創立者である福沢諭吉に 関する調査研究を行うと同時に、慶應義塾の歴史資料を収集 保管するアーカイブズの役割を持つ機関である。
- 3) 『日吉台地下壕保存の会会報』40号、1996年12月4日 付、7ページ掲載の「幹事会報告」においても、今回発見された記録に関連する記載は2件のみ(蟹ヶ谷通信隊地下壕関 係者への聞き取り、田奈陸軍弾薬庫跡見学)である。なお、 慶應高校の展示についても同会報3ページ参照。
- 4) http://hiyoshidai-chikagou.net/kaihou.htm

表 1 日吉台地下壕関係音声・映像資料一覧

(1) 聞き取り調査

(1)	1 C 4/2 / 1/19 EL.					
通番	収録年月日	種類	記録対象	収録時の年齢	聞き取り者	内容
1	1996年5月5日	音声	S氏	不詳	地下壕保存の会 A	日吉住人 戦時下の日吉での生活について
2	1996年5月5日	音声	H氏	89 歳	地下壕保存の会 A	日吉住人 町役場勤務時代の見聞について
3	1996年7月19日	映像	I氏	不詳	地下壕保存の会 A	
4	1996年7月21日	映像	S氏	74 歳	地下壕保存の会 A	日吉住人(旧華族)、戦時下の日吉について 同家の戦前・戦中・戦後史
5	1996年7月26日	映像	K氏	77 歳力	地下壕保存の会 A	慶應義塾大学経済学部昭和 18 年卒、第 3 期兵科予備学生 戦時下の日吉での学生生活、海軍での体験
6	1996年7月31日	映像	M氏	74 歳力	地下壕保存の会 A	元下士官 連合艦隊司令部の暗号班で勤務した頃の見聞
7	1996年8月18日	映像	T氏 Y氏	不詳	地下壕保存の会 A	蟹ヶ谷通信隊にて勤務した当時の生活について
8	1996年8月22日	映像	H氏	70 歳力	地下壕保存の会 A	藤原工業大学4期生 戦時下の日吉での学生生活について
9	1996年8月27日	映像	S氏	93 歳	地下壕保存の会 A	元海軍大佐 海軍艦政本部出仕兼人事局員としての任務
10	1996年9月3日	映像	M氏	83 歳力	地下壕保存の会 A	元主計科士官カー連合艦隊司令部勤務時代の日常
11	1999年1月14日	音声	W氏	81 歳	地下壕保存の会 A	第 3010 設営隊の一員として地下壕工事に関与 (病後のため、会話聞き取り困難)
12	2013年7月8日	音声	K氏	79 歳	都倉 地下壕保存の会 B	日吉在住 地下壕一帯の土地所有者の子(終戦時小学生) 地下壕入口 18a の周辺構造 地下壕の崩落事故について
13	2013年11月30日	映像	N氏 F氏	87 歳 86 歳	地下壕保存の会 C 都倉	海軍航空本部に理事生として勤務した当時の見聞 二人とも女性

(2) 記録撮影

通番	収録年月日	種類	内容
14	1996年8月10日	映像	日吉台地下壕(連合艦隊司令部)見学会 慶應義塾による整備工事前の内部状況を記録
15	1996年8月20日	映像	日吉台地下壕(海軍艦政本部)の調査 閉鎖前の内部状況を記録
16	1996年8月23日	I HIILMER	田奈陸軍弾薬庫跡(現こどもの国)見学会・同地下壕(体験者談話含む)記録 *日吉台地下壕とは直接関係しない
17	1996年8月31日	映像	海軍蟹ケ谷通信隊跡・同地下壕見学会(体験者談話含む) 同地下壕の閉鎖前の内部状況の記録を含む
18	1996年9月7日	映像	陸軍登戸研究所跡見学会(現明治大学生田キャンパス)*日吉台地下壕とは直接関係しない

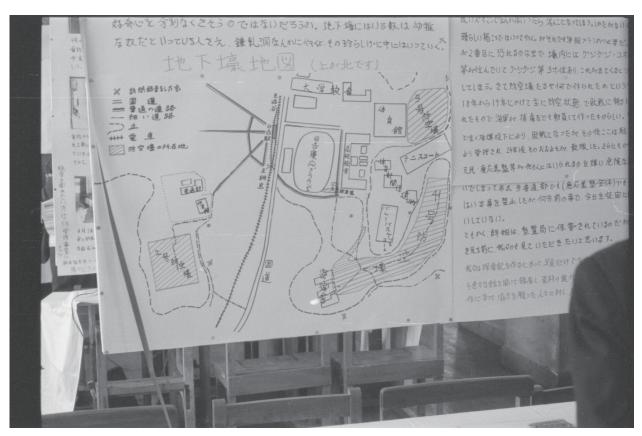


写真 1 1958 年度慶應義塾普通部労作展の風景写真中より発見された写真



写真 2 1996 年 連合艦隊司令部地下壕見学会の映像 整備工事前で、足下一面が泥水でぬかるんでいる様子が分かる。



写真4 1996 年艦政本部地下壕の映像 素掘り部分の様子。



写真 6 1996 年 蟹ヶ谷通信隊の遺物で撮影当時現存していた電波塔



写真8 1996年蟹ヶ谷通信隊地下壕の壁面の様子



写真 3 1996 年 艦政本部地下壕の映像



写真 5 1996 年 艦政本部地下壕の映像 壁面のツルハシの痕跡。



写真7 1996年蟹ヶ谷通信隊地下壕の内部の様子

資 料

K氏聞き取り調査(要旨)

2013年7月1日実施於:慶應義塾大学日吉寄宿舎南寮食堂

K氏は昭和 10 年生まれ。寄宿舎西側から高校グラウンド南側にかけての谷間一帯 5000 坪あまりが K 家の旧所有地であり、その敷地内で海軍による地下壕構築が行われた。

K家の所有地内に造られた入口(18 a) は Y 字型になっており、両側からの入口の合流点付近に 60m くらいの深井戸が掘ってあった。恐らくここから水を汲み上げて、地下に貯水槽を作って、水の供給をしていたのだろう。壕を出て約50m くらい行ったところにも、大きなコンクリートの貯水槽があって、その隣に深井戸を掘って給水ポンプがあり、そこから汲み上げた水を貯水していた (写真 13)。これは 15 年ほど前まで、防火用水として使っていたが、現在では痕跡がなくなっている。昭和 25 年ころに給水パイプを引き上げてみたら、その長さが 60m 以上の深さに達していた。

台地の上の寄宿舎のところからこの入口(18 a)のところまで、道が尾根伝いにぐるっと巻いて出てきていた(写真9、10、11、14 参照)。工事用車両もここを移動し、空襲警報が鳴った場合には高級将校が車でここを降りて、壕の中へ避難したのではないかと思う。その道路の痕跡は今でも残っており、車が退避するような、拡幅した場所もある。ただし、自分は集団疎開で下田におり、行き来する様子を直接見たわけではない。海軍が接収している土地は全部封鎖されており、家から工事現場まで直線距離で100m以上も離れていたので、普段の様子はあまり知らない。

Aさんの家の入口(16 a)から K家所有側の谷まで、真っ直ぐに伸びる地下壕通路の工事が相当進んでいた。K家側に抜けた出口から道が伸びて、綱島街道まで出られるように計画していた。しかし大雨の影響で崩落し、この部分の工事は中止になった(写真 14 参照)。その場所は寄宿舎建設の際、丘の上の土地を切り取って整地した際に出た土を埋めた場所で、非常に地盤が悪いところだった。掘り始めたときに父が、「あそこはダメだな」ということを言っていたのを覚えている。事故はちょうど夜間だったので、人的な被害はなかったというふうに聞いている。K家には海軍関係者が時々手土産を持って訪れ酒を飲んでいくというようなこともあり、色々と話を聞かせてくれることもあったようだし、この事故は隠すにも隠せない状態だった。

戦後誰でも地下壕に立ち入れる状態が、半年ぐらいあったように思う。その間に友達とろうそく1本で探検したことがあり、その際拾ってきた書類箱を2つ今でも使っている(今回そのうちの1つを慶應義塾に提供)。慶應のバレーコートから入って(1 a)坂を下りた辺りに二段ベッドが両側に並んでいる居住区域があり、その付近で拾ったと記憶する。その後米軍が管理上困るからというので、主だった出入り口は破壊してしまった。K家敷地の地下壕入口(18 a)も米軍に破壊され、がれきを放り込んで埋めただけなので、地下に構造物が残っており、かなり工事をしないと家が建てられないため、一軒分の空き地として残っている(写真12)。長年冬になれば霜で崩れて、大雨が降れば崩れて、手を焼いてきた場所だった。



写真9 左奥が慶應義塾日吉寄宿舎のある丘階段踊り場にかけて坂道の痕跡



写真 10 写真 9 のコーン位置から右側を見る 道は画像左奥民家の先で左へ回り込む



写真 11 写真 10 で左へ回り込んだ道が降りてきたところ



写真 13 右手の車庫付近が地下壕外の貯水槽跡地 正面奥の階段途中右側が写真 12



写真 12 造成されずに残っている斜面の土地 地下壕入口(18 a)の跡地



写真 14 写真 9~13 の撮影位置と方向(写真は YAHOO! 地図 JAPAN より転載)

戦争末期の海軍による大倉精神文化研究所の利用について

―海軍気象部の大倉山移転と水路部の資料疎開を中心に―

林 宏美

はじめに

昭和19年(1944年)から20年(1945年)まで、大倉精神文化研究所本館(現、横浜市大倉山記念館)には、海軍気象部の第5分室が移転し、終戦まで執務を行っていた。しかし、その事実は一般にほとんど知られていない。

大倉山精神文化研究所では、海軍気象部の大倉山移転と その間の活動について、これまでにも2つの方法で調査 を実施してきた。1つは大倉山の気象部分室で実際に勤務 していた根本順吉氏、沼田昭氏、町田郁子氏、伊佐幸一氏 の4名への聞き取り調査、2つめは大倉精神文化研究所で 所蔵する関連資料の調査である。

まず、聞き取り調査からは、大倉山の海軍気象部が、千島・北海道の海霧発生の予報を行うためのデータ収集・分析や、アメリカ・ソ連が発信した気象電文の暗号解読を業務としていたこと、そして当時の大倉山や勤務中の様子などを知ることが出来た。なお、根本氏、沼田氏、町田氏の聞き取りについては『大倉山論集』第51輯、52輯に内容の詳細を掲載している²。

2つめの資料調査についてだが、研究所で所蔵する海軍 気象部の関連資料は以下の4種類に分類することが出来 る。

- ①賃貸契約書や、それに伴う照会・回答の文書
- ②終戦による契約解除と搬入機材の撤収等に関する文書
- ③気象部の業務に関する資料
- ④研究所の業務上作成された文書 (例:日誌・事業報告など)

これらの資料からは、研究所本館建物と研究所附属施設の借用契約の内容、終戦による撤収、借用契約解除後の動き、気象部の業務に関することがわかる。そしてその成果は、『大倉山論集』第56輯に史料の翻刻と合わせて掲載している。。

しかし、海軍気象部の大倉山移転に関わる調査はこれで終了した訳ではない。以後も調査は継続しており、そこから新たに確認できた事実も少なくない。それらは港北区の地域活動情報紙『楽・遊・学』の連載「シリーズわがまち港北」の中で、一部を紹介したが、誌面の制約もあり、その内容は必ずしも十分なものとはいえなかった。そこで本稿では、それらを整理したうえで、その後に確認できた

情報も含めて報告することとしたい。なお、内容が断片的な情報の羅列になる部分もあるが、そうした情報が多くの人の目に触れることで関連情報の発掘の契機となる可能性もあると考え、敢えてこの場を借りて述べておくこととする。その点どうか御容赦願いたい。

1. 最新の調査成果について

(1) 他機関所蔵資料の調査について

大倉山に海軍気象部の第5分室が移転していたという 情報は、研究所の所蔵資料と聞き取り調査以外では、これ まで『気象百年史』の中に記述が見られるのみだと考えて いた。。

しかし、筆者が平成24年(2012年)2月に日吉台地下 壕保存の会が主催する「日吉をガイドする講座」で大倉山 の海軍気象部についてお話しする機会を頂いた際、参加者 の方から新たに情報を2点ご教授頂いた。

その1つは終戦時に海軍気象部の残務整理班の班長を 務めたのが海軍大佐の大田香苗という人物であり、大田氏 が終戦処理の中で大倉山の海軍気象部に来た可能性は非常 に高いと考えられること、もう1つは海上保安庁海洋情 報部の所蔵資料に、戦時中に水路部が大倉山へ資料を疎開 させたことを書いた文書が存在するというものであった。 2つの情報はどちらも全くの未確認情報であったため、後 日その詳細を調査することとした。

a. 大田香苗海軍大佐の手記「海軍勤務回想 (気象関係)」 について

大田香苗氏については、これまで研究所ではその存在を認識していなかったが、大倉精神文化研究所の当時の日誌®を改めて確認すると、昭和21年(1946年)4月16日に「気象台ヨリ元海軍気象部太田大佐来所、(残品整理)」という記述がある。日誌からは、その後の同年5月4日と17日にも、残留家具の件で研究所へ来訪したこと、翌22年5月6日に元気象部属の中川文雄氏とともに来所して、気象部保管の机3点と戸棚2点を譲渡するように告げ、研究所員の山田氏が対応したことが確認出来る。なお、机と戸棚は同月16日、中川氏が引き取りに来ており、これが海軍気象部と研究所との最後のやりとりとなっている。

また研究所では、平成25年度より従来未整理であった 名刺類の整理を開始した。そしてその中から大田香苗大佐 の名刺が確認されたで。名刺からは勤務先と自宅住所等が 確認できる。また右上には、「4/16来所。」という手書き のメモが記されている。日誌には「大田大佐」とのみ記さ れていたために人物が特定出来ずにいたが、日誌の記述と 名刺の発見により、この人物が大田香苗氏であることが特 定された。なお、日誌での大田氏に関する記述は、この他 には確認出来ず、戦時中の大倉山来訪の有無については不 明である。また、研究所所蔵資料の中で大田氏について知 り得るものは今のところ上記の他発見されていない。なお、 大田氏について知り得るものは発見されていないが、その 関与が考えられる資料は他にもある。大倉精神文化研究 所では、戦時中に撮影されたと思われる雲を写した16ミ リフィルムがある®。根本順吉氏は、聞き取り調査の中で、 このフィルムの撮影者が「大田大佐」ではないかと指摘し ている。この「大田大佐」もおそらく大田香苗氏を指すも のであろう。但し、根本氏は、このフィルムの映像を見て はおらず、大田大佐が実際に撮影したのかどうかの確証は ない。

しかしその後、大田氏に関する史料を、防衛研究所戦史研究センター史料室で数点所蔵していることがわかった。特にその中でも注目したいのは大田氏が昭和41年に記した「海軍勤務回想(気象関係)」と題する手記である。手記は防衛研究所戦史研究センターの前身である戦史室からの依託執筆史料で、その分量は200字詰め原稿用紙に638枚(目次を除く)に及び、「その1」と「その2」の2分冊となっている。その内容は、大田氏が海軍に奉職した大正末年から終戦までの気象業務について詳細に記したものである。気象業務は軍事機密であったために、その内実を語る史料は焼却処分されており、本手記は海軍の気象業務を知り得る唯一の史料と言っても過言ではない。なお、前述の『気象百年史』では大田氏の手記について全く触れられていないが、大倉山の海軍気象部分室に関する記述は、その内容、文体等から本手記が典拠であると推測される。

それでは手記の中から大倉山の海軍気象部に関する記述 について見ていきたい。

大倉山の分室に関する記述は、「第三章第二節 気象機関 一 海軍気象部 (二)施設経費人員等」からまず確認出来る。少し長くなるが、大倉山に関わる部分について引用する。

昭和十九年六月、戦況逼迫するにつれ、災害予備対策として、気象部は大倉山精神文化研究所を最後の拠点とする計画を立て、次の工事を促進した。

a、大倉山の中腹に隧道を掘り、壕内で作業可能の如く する(防空壕は気象部従業員の手を以って掘り、昭和 二十年七月二十七日までにはH字形水平壕の内、約三 分の二の百十五米を掘っていた。)

b、無線兵装

昭和十九年六月十一日、横鎮長官に対する大臣訓令 により

- (i)、大倉山精神文化研究所と海軍省第七分室 (藤原工業大学)間に電信管制線、四整備、但し、第七分室、東京通信隊間は既設のものを切換へ使用するものとす。
- (ii)、大倉山海軍気象部及東京通信隊本部に、九○式 無線電話機改四、各一組、整備、

又専用電話線の設置については、昭和十九年七月二十九日、艦本総務部長から通信業務局長及同工務局長宛に照会され、大倉山気象部と大倉山海軍施設部(横浜市港北区師岡町三)に布設された。

尚、依佐美、船橋、小山海軍電信所とはTM無線電信機によって連絡する。これに必要な気象員及電信員は総計約五十名を充当する。

これと別に、神戸海軍気象台報時施設の災害時応急報時作 業実施場所として大倉山精神文化研究所を選定し、時報測 定並に通報装置の施設を行ふことになった。

気象部では大倉山疎開対策打合せの結果、先づ、大倉山に於ては受信成績良好、防災対策完備、機密保持上良好等の故を以って特務班の移転を行ふことに決定し、九月一日より作業を開始した¹⁰。

- このうち、『気象百年史』の記述と一致するのは、aとb(i)および(ii)前半部を中心とする以下の5点である。 ①海軍気象部が大倉山を最後の拠点として考えていたこと
- ②大倉山に、H字形水平壕と呼ばれる形状の防空壕を掘り、終戦までに3分の2にあたる約15メートルが完成していたこと、
- ③大倉精神文化研究所の海軍気象部と藤原工業大学の海 軍省第7分室との間に電信管制線4を整備したこと、
- ④大倉山海軍気象部と東京通信隊本部に、90 式無線電 話機械4各1組を整備したこと
- ⑤9月1日より特務班移転作業を開始したこと
- 一方、手記の記述から新たにわかったことはb(ii)の後半部分になる。その中でも特に注目したいのは「専用電話線の設置については、昭和十九年七月二十九日、艦本総務部長からの通信業務局長及び同工務局長宛に照会され、大倉山気象部と大倉山海軍施設部(横浜市港北区師岡町三)に布設された」という記述である。大倉精神文化研究所にほど近い港北区師岡町に、複数の海軍施設があったことは

既にわかっている。一つは海軍省の図書庫であり¹¹、一つはこの海軍施設部である。しかしどちらもその詳細はほとんどわかっていない。特に海軍施設部については、研究所所蔵資料中に差出人に「海軍施設本部師岡施設工事々務所」「海軍東施第二部隊師岡分遣所」などと書かれた図面借用証があるのみで、それ以外の資料からの情報は確認できていなかった¹²。

手記の記述からは、専用電話線が大倉山気象部と海軍施設部に各々設置されたのか、或は2つの機関をつなぐものとして設置されたのか判然としない。しかし他機関の資料から師岡町の海軍施設部に関する記述が発見されたことは、今後のさらなる発見に希望を与えてくれるものであり、その意義は大きい。

また、この他、大倉精神文化研究所が神戸海軍気象台報時施設の災害時応急報時作業実施場所として選定され、時報測定並に通報装置の施設を行うことになったことや、特務班の移転にあたって、「大倉山疎開対策打合せ」というものが行われ、その結果を踏まえて移転作業が進められたことも新たに判明したことである。

前述の部分の他にも、「二、特務班 (一) 気象部特務班」では、大倉山に移転した気象部特務班の昭和 20 年 (1945年)2月13日現在の人員数が記載されている。その内容は以下のとおりである。

昭和二十年二月十三日の現状報告に依ると、大倉山分室 に於ける特務班の人員、当直勤務は次の通りである。

人員、士官 十四、技師 二、技手 三、技工士、男子 七十八、女子七十七、工作手 五

当直 三直制、一直 二十名、但し、日勤者は女子を以 て之に代ふ¹³⁾。

この人員を合計すると全部で179名となる。また特務 班以外にも大倉山の分室では、北海道千島沖の海霧に関する情報収集・調査を任務の1つとしていた調査班が作業 を行っていたことが根本順吉氏からの聞き取り調査でわ かっている¹⁴。よって調査班の人員を足せば勤務者はさら に多くなるだろう。

そして海軍気象部が大倉山を最後の拠点として考えていたことについては、以後の頁の国内気象機関との連携に関する部分でも述べられている。ここでは、中央気象台(現在の気象庁)の戦況逼迫に対する方針と、それについての海軍側の意向を記している。その部分を以下に引用したい。なお、傍線は筆者による。

昭和十九年四月、東京にある官庁の疎開方針が立てられ たとき、気象台では次の方針を立てた。 天気予報関係業務は、現在の建物では仮令防弾壁が造られていても、これは五十キロ爆弾には耐えず危険である。 大都市を避けて而も地下作業の可能な場所に移転したい。 気象台案としては、裏日本方面を可とし、新潟を適当とす る。尚、研究部、調査部、観測部等は長野県諏訪に移転し たい。本件について陸、海軍当局と協議致し度い、との申 出があった。

海軍側としては、大倉山を予報業務の最後の場所と定め 著々設備を進めているので、気象台予報関係機関は是非共 此処へ誘致せなければならなかった。然し、陸軍との関係 もあり、移転問題については正式の協議は行はずその機を 待った¹⁵。

ここからは、大倉山を最終拠点としたいという海軍気象 部の意向が海軍に限ったものではなく、中央気象台をも含 むものであったことが窺える。

そして大田氏は終戦後、残務整理班の班長として奔走することになったが、手記の第四章では終戦処理事項について書いている。その中で、8月15日の午後に行われた気象部内での打合せにおける決定事項について述べているが、この決定事項の中には「各分室は用済後のものより逐次貸主へ返却すること」150「大倉山隧道及本部建築工事は中止す」170という記述が見られる。また各分室長は8月16日に東京に集合し、その後処理方針に従って8月25日までに各分室の整理を略完了したという150。なお、大倉精神文化研究所建物の借用に関する契約は、書類上8月末日での解約となっているが、物品の搬出等は前述のように、昭和22年まで続いている。

大田氏の手記「海軍勤務回想(気象関係)」から確認出来る大倉山の海軍気象部の情報は上記のとおりである。なお、防衛研究所の史料室では、この手記以外にも大田氏の手によるものとして、「日本海軍気象機関に関する解答(一九四五、一〇、三、連合軍司令部G.Tウォーカー陸軍中佐より要求ありたる解答)」¹⁹⁾ と題する史料を所蔵している。これは残務整理班班長であった大田氏が連合軍司令部からの要求を受けて調査を行い、提出した文書である。ここには大倉山についての記載は発見できないものの、気象部の業務やその構成等が詳細に書かれている。また、この文書は、手記の中にほぼ同文で転載されている²⁰⁾。

なお、史料室の資料の中には、大倉山以外の港北区内の 軍施設に関する史料もある。例えば、「連合艦隊司令部陸 上施設設置要領」²⁰はその一つである。この史料には連合 艦隊司令部の陸上施設の候補地、必要となる環境や施設要 領、予想される勤務人員数等が書かれている。その中で候 補地は4ヶ所が挙げられており、うち1ヶ所は日吉であ るが、その中に「大倉山 精神文化研究所(東横線)」も含まれている。史料については『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』などで既に紹介されていたが²²⁰、この中では、史料名以外の書誌情報が書かれていない。しかし、その原典は防衛研究所で所蔵しており、史料室で閲覧可能である。また、翻刻については戦史叢書 45『大本営海軍部・連合艦隊 6』に掲載されている。

この史料以外にも防衛研究所で、大倉山、日吉、そして 港北区をはじめとする横浜北部の軍施設に関する情報が埋 もれている可能性は少なくない。各機関や部署が作成した 文書はもちろんだが、大田香苗氏の手記のような、旧軍関 係者の回想類の調査等も今後積極的に進めていく必要があ る。

b. 海上保安庁海洋情報部の資料調査から

続いて、海上保安庁海洋情報部の所蔵資料に、戦時中に 水路部が大倉山へ資料を疎開させたことを書いた文書が存 在するという情報について述べていきたい。

海洋情報部は文字通り、海洋情報の調査、提供を任務とする部署で、海軍の水路部をその前身としている。海軍の気象調査業務は、もともと水路部の所管業務であったが、戦況逼迫による気象業務の重要性の高まりや、業務量の増加に伴い、昭和17年に水路部の気象部門が分離され、その下部組織として海軍気象部が成立した。そしてその2年後の昭和19年(1944年)4月、海軍気象部は水路部から独立して1機関となった。よって元の関係を考慮すれば、海洋情報部に気象部関連史料があるのは不思議な事ではない。そこで海洋情報部の資料提供窓口である海の相談室で資料を確認したところ、確かに該当する資料が存在したが、その内容は海軍気象部の大倉山移転とは全く別の事象であることがわかった。

海洋情報部所蔵資料の目録は、「海図アーカイブ」というホームページ²³⁾から見ることが出来る。ホームページ掲載の所蔵目録を確認すると、「参考品目録」という資料が大倉精神文化研究所へ水路部の資料を疎開した際の文書であるということがわかった。その目録の記載によると、海洋情報部の「参考品目録」は①と②の2点があり、いずれも大倉山への資料疎開の関係文書である²⁴⁾。海洋情報部の所蔵資料目録では「参考品目録①」(以降、「目録①」と記す)について、次のような解説がある。

水路部保管の参考品を疎開させるために参考品整備委員会が参考品を検討し、選びだした際の表。天文、地磁気等21の種別ごとに、それぞれ資料番号を付して、名称、数量、出所等が表にされている。表は手書きで記入されている²⁵)。

一方、「参考品目録②」(以降、「目録②」と記す)の解

説は次のとおりである。

昭和19年12月太平洋戦争の戦況悪化に伴い、水路部は、参考品の保管の万全を期するため参考品を横浜市港北区大倉山にある大倉精神文化研究所の書庫に疎開させたが、その際の関係文書と参考品名をまとめた表(参考品目録①の内容と同じ、タイプ印刷)が綴られている。表では、参考品を天文、地磁気等の21の種別に分け、名称、数量、出所、参考事項が記載されている。疎開は、2回行われている²⁰。

目録①は、紐で綴じられており、赤地に白で「参考品目録」「水路部」と書かれた表紙がついている。それをめくると、種別のみを記した頁が2頁、種別ごとに資料名を記した表が25頁にわたって続く。どちらも水路部の「D号原稿紙」に手書きされている。表の資料名の横には、鉛筆書きで「○」や「×」が書かれており、「○」のついた資料が疎開の対象となったようである。なお、目録①自体には大倉山や疎開について特に記載はなく、単独で見るだけでは目録②との関連性は認識出来ない。

目録②の方は、「参考品目録 総務課」と書かれた簡素な表紙と、海軍の用紙にタイプされた文書がホチキスで綴じられている。文書の内容は疎開実施の通知と、疎開により搬出する参考品の表である。目録②の表には、目録①の表で○印のあった資料が列挙されており、①②両方の目録を見ることでその関連性が確認出来る。

大倉精神文化研究所が資料疎開先であったという事は、 目録②の中の「参考品二関スル件通知」から確認すること が出来る。

疎開は2回行われており、通知も各回ごとに存在する。1回目の通知は、昭和19年11月24日付で参考品整備委員長から参考品整備委員宛に出されている。その内容は、まず「今般参考品保管ノ万全ヲ期スル為第一回トシテ別紙目録ノモノ左記へ疎開セシメラルル事ト相成候」と書かれており、疎開先には「神奈川県横浜市港北区大倉山 大倉精神文化研究所書庫」が挙げられている。そして通知の後には、疎開資料117点の詳細を記した「別紙目録」が添付されている。その後には、第二回の通知が続く。こちらの日付は昭和19年12月2日となっており、標題、作成者、差出人は第一回と同様である。以下、その通知内容である。

先般疎開セシメラレ候参考品ニ別紙目録ノモノ第二回分トシテ追加セラレ候尚保管中ノ柳文庫モ今回全部同所ニ移転 致スコトト相成候

(別紙目録添)

「柳文庫」は海軍創設にあたって水路事業の重要性を具申し、水路部の創設に尽力した柳楢悦(1832~1891年)

の資料である³⁷。別添目録によれば、第二回は「柳文庫」 の資料 121 点と他の資料 23 点が疎開対象資料となった ようである。よって二回の疎開が目録②の内容で正確に実 施されたとすれば、合計 261 点の資料が大倉山に搬入さ れたことになる。

昭和19年の11月、12月に行われたであろう水路部の 疎開資料の搬入については、研究所の日誌に記述は見られ ない。また、海軍気象部との間で取り交わされたような照 会・回答文書も確認できない。

しかし、終戦後に関しては日誌から水路部の搬出作業と 思われる内容が確認出来る20 まず、昭和20年(1945年)10 月12日には「水路部千野純彦氏荷物ノ件ニテ来所」とい う記述がある。そして同月15日、翌21年1月14、16、 17日には、水路部が残品整理や荷物運搬を行ったことが 書かれている。前述のとおり、海軍の気象業務が元々水路 部の職掌であり、気象部の発足後も当初は水路部の下部組 織であったという関係から、これまで終戦後の水路部の動 向に関する日誌の記述は海軍気象部の関連であると考えて いた。しかし、水路部の資料疎開を踏まえて日誌を再読す ると、「水路部並二気象ヨリ荷物運搬二来ル」というよう に、水路部と気象部が併記されている記述の存在に目がと まる。これは、研究所内に搬入されていた海軍気象部の資 料を、戦後、水路部と中央気象台で分配したためと推測し ていたが、そうではなく、気象部の移転・撤収とは別の動 きとして、水路部の資料疎開による搬入・搬出作業が行わ れたためだったと考えられる。

この水路部の資料疎開が、水路部独自の動きとして展開されたのか、それとも海軍気象部分室の移転先ということを踏まえたうえでのことだったのかは、確認できない。大倉山周辺には港北区日吉・同区師岡町など、複数の海軍機関が移転していることを考慮すると、海軍内でこの近辺へ業務を集中させる意図があり、水路部の疎開も、そうした思惑に沿って実施されたものかも知れないが、推測の枠を出ない。

なお、海洋情報部所蔵資料では、他に「終戦関係水路部提出資料」²⁰という史料に「大倉山」の記載がある。その内容は、終戦時における水路部の財産目録である。うち通常物品の細目を記した目録は各分室、倉庫毎にまとめられている。その中には「大倉山分室(神奈川県綱島)」の名が見られ、目録には計測器や無線受信機などの機材類が並んでいる。前述の参考品目録は文書や図書、地図、写真類が中心であったことから内容は一致していない。この大倉山分室が大倉精神文化研究所を指すのか、あるいは別の場所を指すのかは不明である。

なお、海軍施設の問題と直接の関連はないが、研究所に

は海軍以外の官庁も資料疎開を行っている。

外務省は昭和19年3月に貴重図書保管を研究所へ依頼しており、研究所ではこれを受託している³⁰。資料の細目は不明だが、搬入と保管の謝金を受領したことが研究所の資料から確認される³¹⁾。また外務省外交史料館の資料にも大倉山への資料疎開に関する記録がある³²⁾。ここで詳細は述べないが、外務省の資料搬入は昭和19年4月6日、18日の2回行われたものの、研究所が「軍ノ或目的ノタメ使用サルル事ニナリシタメ」、以降に予定されていた搬入作業は打ち切りになったという³³⁾。軍による使用が海軍気象部の移転を指すことは間違いない。研究所の日誌によれば、外務省の2回目の資料疎開が行われた4月18日は、海軍気象部が建物借用にあたって、研究所へ初めて来訪した日でもあり、以降、気象部移転は急速に遂行されていくこととなる。

(2) 江田常雄氏からの聞き取りと所蔵資料から

a. 聞き取りについて

これまで大倉精神文化研究所では、大倉山の気象部分室で勤務された4名の方に聞き取り調査を実施している。4名への聞き取りは平成16年から17年にかけて行われ、その成果は『大倉山論集』に掲載していることは冒頭で述べたが、その後、平成24年(2012年)2月、新たに元海軍気象部員であった江田常雄氏からお話を伺うことが出来た。その内容は、シリーズわがまち港北第164回⁵⁴⁾に書いたが、ここで改めて述べておきたい。

江田氏は、築地にあった海軍の水路部に入部後、中国の 海南島で2年を過ごして帰国し、その後、海軍気象部に 転属になったという。無線係だった江田氏は、大倉山に分 室が移転する際、東京からトラックで無線機を運び、その 据付を担当された。その時の状況について江田氏は、「大 倉山の坂は急な坂で、ツルツルしてどうしようもないとこ ろをやっとのことで上げたのを覚えている」とのことで あった。なお、江田氏は大倉山の分室では勤務をしておら ず、海軍気象部時代に大倉山へ来たのは、無線機の据付を 行った一日のみであったという。また、大倉山での据付作 業実施日についてはご記憶にないとのことであった。但し、 研究所の日誌を見ると、昭和19年(1944年)5月19日 から24日の6日間にわたり、気象部員が研究所に来訪し、 必要機材の搬入や取付作業、工事等を実施したことが記録 されている。。よって、江田氏が来所したのも、この6日 間のうちの1日であったと思われる。

江田氏の話の概略は上記のとおりであるが、江田氏から は自身がお持ちであった旧海軍気象部に関する貴重な資料 も見せて頂いた。その中で特に注目したのは、旧水路部・ 海軍気象部関係者の同窓会「青空会」が作った『記録文集 あおぞら』と、青空会が発行した『海軍気象部名簿』である。

b. 『記録文集あおぞら』

『記録文集あおぞら』は全5集で、日本内外で海軍の気象業務に従事した元部員の方々の回想をまとめたものである³⁶⁰。海軍気象部は戦後解体し、その関連資料の多くも焼却されたため、海軍気象部の業務や、戦死した部員に関する情報は記憶に頼らざるを得ない状況となってしまった。そこでそうした記憶を記録に残していくために作られたのがこの文集であった。

文集には、大倉山分室について触れた文章も数篇掲載されている。その1つに、第4集に掲載された吉野町子氏の回想「女子挺身隊(特務班)のひとりとして」がある³⁷⁷。吉野氏は、女子挺身隊として気象部に配属となり、昭和20年(1945年)3月から終戦後の9月まで大倉山で勤務していたという。吉野氏の回想には、昭和20年5月29日、横浜大空襲当日の大倉山分室の様子が書かれているので、引用したい。

昭和二十年五月二十九日(火) 大倉山の分室に着いた 途端に空襲警報、地下に待避、もう終りと思う頃に落下音、 伏せていた身体を起こして消火にかかる、まごつきながら 毛布を濡らす作業を手伝う。火も消え全員整列、各階に配 置、医務室に配置されて間もなく玄関前に山の下の民家か ら怪我人が運ばれて来る。子供の泣き声、ねかされたまま 動かぬ人、云々。

此の日の日記の一部です。私の見た戦争です。緊張に怖さが手伝って、震え乍ら医薬品を運ぶのが精一杯だった事を覚えています。(中略)

昭和十九年二月一日、三月の卒業を繰上げ挺身隊として 水路部へ入部、その日に気象部へ配属となり竹平町へ。学 校から二十数名の入部で、他の二校の方達と五十名が特務 班へ。(中略)

その後各班に分けられ、先輩諸姉の御指導のもと、作業に就いた次第です。仕事の内容は、外国の気象電報の解読作業のお手伝いで、"合致を見つける"その又手伝いで、毎日、仕事を覚えるというより、云われるままを忠実に守る日々でした。数字を写し取るのが主な仕事です。

お堀ばたの沈子が咲き、あたたかくなる頃、竹平町から 大手町の川べりの二階に移り、翌年の三月三日には大倉山 へ移転しました。

その間、三月十日の大空襲があり、友人達も大部散り散りになり、実質的に大倉山へ通う様になったのはもう少し後になります。移ってからも、空襲がはげしくなり、交通が思うにまかせず、本部(YWCA)まで行くのがせいぜ

いという日が何日かありました。(中略)

終戦の日からも焼却作業、片づけなどで大倉山へ通い、 その都度いろいろと情報連絡を受け、九月十五日から気象 台の実況課へ、翌年二月天気相談所が開設され、そちらへ 勤務、昭和二十三年までお世話になりました。(後略)

特務班が大倉山で外国の気象電報の解読作業を行っていたこと、終戦に際して、書類の焼却が行われたことは、過去の聞き取り調査でも確認しているが³⁵⁰、吉野氏の回想もそれと一致したものである。また、回想の冒頭では、横浜大空襲当日の吉野氏自身の日記が引用されており、緊迫した状況とともに、当時の心境が伝えられている。そして大空襲の被災者が気象部の移転していた研究所へ次々と運ばれ、医務室が対応に追われたこともわかる。なお、この時の被災者側の記録として、鋤柄敏子氏の回想がある。その中で鋤柄氏は「たんかに乗せられてすぐ上の精神文化研究所にかつがれていった。そこには軍隊が駐屯し、軍医もいた。」と述べている³⁵⁰。これは吉野氏とまさに相対する立場での記述といえる。大空襲当日の研究所の日誌では、焼夷弾が命中したものの、大きな損害はなかったことが記されているが、研究所の様子についてのそれ以上の描写はない⁴⁵⁰。

吉野氏の回想は、これまで確認していた研究所の日誌、 鋤柄氏の回想とは、また異なる立場で、当時の大倉山の様 子を記録したものであるという点でも貴重な資料である。

吉野氏の他にも、篠原健三氏は、第1集掲載の回想「海軍気象部の思い出」の中で、「(前略)その後、大倉山に勤務が変わり、兵備品取扱主任として機密図書の出納に従事していた。終戦時、機密図書の焼却に大童になったが、焼け残りが出たが、これが終戦後意外に役に立った」と述べている⁴¹⁾。資料の焼却は確かに行われたが、その全てが完全に失われた訳ではないこと、戦後もそれが活用されたことは興味深い。

そして、第5集掲載の伊坂達孝氏の回想「海軍気象部予報現業班(二)」では、6月頃から大倉精神文化研究所への移転準備を始めていた特務班が、9月頃から実際の移動を始めていたと書いている⁴²。研究所の日誌では、6月6日に「海軍気象台係員来所、執務」という記述が登場し、9月1日に海軍気象部移転の記述がある。伊坂氏の回想はこの日誌の内容と一致している⁴³。

また、同じく第5集掲載の藤木弘氏の回想「想い出すま ま」では、次のような内容が書かれている。

戦況は日毎に悪化の一路をたどり、大倉山分室では守田 さん等の幹部や、男女職員が気象作業の縁の下の力持ちと して毎日頑張っていたことでしょう。一個所でも多く敵側 気象データを解読して、プロットし、予報作業に資しよう とする熱意を竹平町の二課はちっとも理解してくれない・・・・・・。宝来中佐はこんな御不満をブツブツしつこく私に言われたのではなかろうか。(中略)

大倉山の暗号解読も大事であるかも知れないが、竹平町 の現業も又大事な所ですので、ついカッと成って怒鳴って しまったのでしょう。

さて、現在は西を向いても東を見ても至るところ情報、 情報で正に情報化時代です。今にして考えると大倉山の気 象暗号解読は戦争遂行に大きな貢献をしていたと思います ⁴⁴。

これは、昭和56年に亡くなられた元海軍気象部員、久 米庸孝氏に対する編集委員の回想の中に転記された久米氏 の手紙の内容を受けて書かれたものである。編集委員の回 想は第4集に掲載されたもので、手紙には、当時、大倉山 の海軍気象部の最高責任者であった宝来邦太郎中佐を藤木 氏が怒鳴りつけたというエピソードが書かれている450。な お、引用中の守田氏は、聞き取り調査を行った根本氏と共 に大倉山で勤務していた技師の一人、守田康太郎氏と思わ れる46。なお、編集委員の久米氏への回想によると、藤木 氏は毎日軍令部に天気予報図を持参して説明に行ってお り、部内の行き詰まりを痛切に感じざるを得ない立場で あったという。宝来氏とのやりとりについて触れたこの回 想からは、宝来氏が非常に熱意ある方であったことや、竹 平町で気象部の主要業務を担っていた予報班も、それを支 える立場にあった特務班も必死の作業を行っており、緊迫 した様子であったことが改めて窺える。回想が語る事実は どれも、これまでの調査内容を補完して余りあるものであ ると言えよう。

c.『海軍気象部名簿』

次に、『海軍気象部名簿』について述べていきたい^で。江田氏が所蔵していたこの名簿は『青空会名簿』との合本になっている。なお、江田氏によれば、青空会は平成15年(2003年)頃まで毎年1回会合を開催していたという。しかし参加者の減少もあり、その後、会は行われなくなったとの事である。名簿はその会に合わせて作成・配布されたようで、数年ごとに改訂版が発行されている。江田氏所蔵のもので一番古いのは昭和31年(1956年)発行のものであった。

研究所では以前、聞き取り調査をした沼田昭氏に、平成5年(1993年)発行の『青空会名簿』を拝見させて頂いたが、他年に発行された名簿は初見であった。

『海軍気象部名簿』も『青空会名簿』も、どちらも元海 軍気象部員の名簿であるが、その内容は少し異なる。『青 空会名簿』はいわゆる住所録であり、『海軍気象部名簿』 の方は昭和20年8月現在の所属課、部隊ごとの部員一覧 である。また、所属先の情報は各課・部隊名以外に、所在 地や係名等も記されている。なお、気象部員の名簿は『記 録文集あおぞら』にも掲載がある。その名簿は、気象部従 事中の略経歴も書かれており、詳細なものである。この名 簿については、本人から提出された情報を、各集に随時掲 載をしたようである。『海軍気象部名簿』は、おそらく、 この情報をさらに追加、編集し、一覧性を持たせたもので はないかと考えるが、『記録文集あおぞら』の名簿で、大 倉山分室での勤務が明確に記されているのは、26名に過 ぎない。『海軍気象部名簿』によれば、大倉山分室で執務 を行っていたのは海軍気象部の第2課であり、その構成 は特務班(64名)の他、調査班(58名)、図誌係(8名)、 兵備品取扱(2名)、発電機係(1名)、施設班(2名)であっ た48。名簿に記載された大倉山分室勤務者の人数は 135 名 であり、大田香苗氏の手記の記載とも若干異なるが、この 名簿は記憶やメモを元に作成されたものであり、決して正 確なものではない。また昭和20年2月と8月という時期 の違いを勘案すると、人員の削減や、戦地への派遣が増え たことも考えられる。

なお近年、研究所では大倉山分室で気象観測が行われていた可能性について調査中であるが、この名簿に従えばその可能性を否定せざるを得ない。ちなみに名簿によれば、東京都千代田区神田駿河台の東京 YWC A 会館内に移転していた第1課で観測係が業務を行っていたことがわかる。

2. 研究所所蔵資料の調査について

大倉精神文化研究所では、文書資料の他にも、海軍気象部関係の図書・物品類を所蔵している。ここでは、『大倉山論集』第56輯以降に確認した事象について記していきたい。

(1) 浮力測定器

研究所では平成21年(2009年)に附属図書館書庫から浮力測定器が発見された(写真1)⁴⁰。箱の蓋には製造会社、製造年月日、製造番号が記されたプレート(写真2)が付いており、ここから浮力測定器が久保田無線電機株式会社により、昭和18年(1943年)2月に製造されたものだとわかる。この浮力測定器を製造した「久保田無線電機株式会社」についての詳細は未確認である⁵⁰。

筐の中には、ガスボンベと思われる装置と質量の異なるおもり数種類が入っている(写真3)。浮力測定器は、ラジオゾンデを吊した気球を浮揚させる際に使用するものである。ラジオゾンデとは気圧、気温、湿度等の気象要素を測定するセンサを搭載し、センサで測定した情報の無線送信を行う機器であり、ラジオゾンデを使用した気球での気

象観測は現在でも行われている。その気球を揚げる際には、 一定のスピードで上昇させなければ測定に誤差を生じやすいため、おもりとヘリウムの量で浮力を調整して上げる。 よって浮力測定器の中身は浮力の調整に使うガスボンベとおもりであると考えられる。この浮力測定器の発見により、 大倉山で気象観測も業務の1つであった可能性を視野に 入れる必要が生じてきた。但し、これまでにも気象観測が 業務であったと考え得る材料がなかった訳ではない。

終戦直後に作成された研究所の事務書類には、気象観測用紙の裏面を使用して作成されたものが多く見受けられる。写真4は昭和21年(1946年)の事業報告でその一例である。また、未使用の気象観測用紙も数種類残存している(写真5~10)。これらの気象観測用紙は終戦後、気象部から譲渡、あるいは払い下げられ、戦後の物資入手の困難な時代に研究所での書類作成に活用されたと思われる³¹。

これらの用紙により、大倉山の気象部が気象観測を業務としていた可能性はこれまでも認識していたが、これまでに実施した聞き取り調査の中で、気象観測業務の話は一切登場していない。また、沼田氏は気象観測用紙は大倉山では使用しなかったとも述べている⁵²。だが、当時の大倉山での勤務者は、自分の業務以外のことを全く把握していなかったという事も聞き取り調査から判明している。そのため、研究所ではたまたま気象観測業務に携わっている方と接触する機会がなかったとも考えられ、気象観測業務を行っていた可能性をこれまで否定出来ない状況にあった。

そこに浮力測定器の発見があり、気象観測業務が行われていた可能性が高まったように思われたが、前述の『海軍気象部名簿』によれば、気象業務の関係部署は他の分室にあったとされる。また、水路部の資料疎開という新たな情報により、浮力測定器が気象部ではなく水路部の物品である可能性も出現してきた。なお、海洋情報部所蔵の『参考品目録』に、この浮力測定器と思われるものは記載されていない。

いずれにしても、浮力測定器と気象観測に関しては今後 も調査を継続していきたい。

なお、平成 25 年(2013 年)には、終戦後に、大倉山 公園の周辺で気象観測用の気球を浮揚させていたのを見た ことがあるという情報があった⁵³。気球を揚げていたのは 研究所員であった小森嘉一氏の子息であったという。なお、 小森氏は当時、研究所付近にあった所員用住宅に入居して いた。気球の浮揚にこの浮力測定器が使用されたのか否か は不明であるが、測定器が小森氏やその子息によって持ち 込まれた可能性も否定できないため、一応ここに付記して おくこととする。

(2) 図書館蔵書および研究所未整理資料から

また、附属図書館からは他にも海軍気象部関連と思われる資料が見つかっている。附属図書館では、約10万点の蔵書があるが、その中から表紙に「第五課/番号:5019051/分類:気象/受付:14.6.5」と記載のラベルが貼付された『測候瑣談』という本が見つかった(写真11)50。『測候瑣談』は、大正12年(1923年)から昭和16年(1941年)まで中央気象台長を勤めた岡田武松氏の著書である。第5課は、昭和11年(1936年)に気象業務を水路部単独の課の職掌した際の新設課であることから、この本は海軍気象部の旧蔵書であると思われる。また、研究所では「第五課」の刻印のある本立て(写真12~16)やそろばん(写真17、18)、定規等(写真19)を所蔵している。

さて、『測候瑣談』の表紙を捲ると扉の部分には、表紙のラベルとほぼ同じ内容が記載された印と、それとはやや異なる「水路部」と「第一課」の印の計3つの押印が見られる(写真20)。図書館蔵書管理上の登録情報には、ラベルや印の内容に関する記載がなく、出納がなければ、直接実物を確認する機会がないため、長い間見落とされていたようである。なお、本資料が附属図書館の蔵書になった経緯は不明だが、図書原簿を見ると、受入年月日は、昭和27年(1952年)11月19日となっている⁵⁵⁰。よって終戦後に寄贈されたが数年間未登録のまま放置されたか、或は資料の搬出を行った時に置き忘れていったものが後に発見され、その際に図書館蔵書として登録されたものと思われる。

なお、図書館蔵書から発見された『測候瑣談』以外にも、 未整理だった資料の中から、海軍気象部旧蔵と思われる 4 冊の図書が新たに発見されている。 4 冊の書名と海軍気象 部旧蔵書としての判断材料は次のとおりである。 4 冊は現 在、研究所沿革史資料として登録、整理されている。

① 『改訂がうす著五桁ノ対数表附用法』(えふ・げい・がうす[著]/宮本藤吉[訳]、三省堂、昭和11年10月10日65版)沿革史資料 No.11884

表紙に水路部と第五課のラベル (写真 21)、扉に水路部 と第五課の印 (写真 22)

裏見返しに「築地海軍水路部第五課 海上気象掛 西谷 正九郎 15-11-21」の書込(写真 23)

- ②『やまとこゝろと獨乙精神』(鹿子木員信[著]、民友社、昭和13年6月1日9版)沿革史資料 No.11933 表紙に第七課の印と「和H、8」の記載(写真24)、見返しにも「和H、8」の記載(写真25)、扉に水路部の印(写真26)
- ③『科学技術年鑑 昭和17年版』(財団法人科学動員協会総務部調査課編輯・発行、昭和17年6月1日)沿

革史資料 No.11934

表紙に気象部と水路部のラベル貼付(図27)、扉に第七課と水路部の印有(写真28)、見返しの部分に海軍気象部の回覧用紙の貼付有(写真29)

④『戦時労務管理 労務管理全書第1巻』(桐原葆見[著]、東洋書館、昭和17年11月20日第4版)沿革史資料 No 11935

背表紙に「原田技手寄贈」のラベル添付有(写真 30、 31)

①の本は、乱数を使用したという気象電文の暗号に関わるものと思われる。また、④については、他の図書にあるラベルや押印等がなく、また「労務管理」という内容だけに、海軍気象部とは無関係の可能性もある。しかし精神文化研究所に技術者である技手がこの本を敢えて持参した理由は他に考えにくい。但し、「寄贈」という書き込みが、研究所への寄贈を指すものなのか、あるいは気象部やその部員に対する寄贈を指すものなのかは特定出来ない。なお、「原田」という人物は先程の『海軍気象部名簿』の中に1名、『青空会名簿』にさらにもう1名が確認できるが、この2名以外の人物である可能性もあり、こちらも特定は出来ない。

現在までに、研究所内で発見された海軍気象部旧蔵書と 思われる図書はこの5冊であるが、図書館蔵書、あるい は未整理の資料中に、海軍気象部旧蔵書や関連資料がまだ 混在している可能性はある。

なお、研究所所蔵資料中、現在までに整理が完了している海軍気象部関係資料については表1、表2を参照されたい。

(3) 残されていた課題について

『大倉山論集』第56輯の「海軍気象部による大倉精神 文化研究所建物の借用」では、研究所に残された海軍との 契約書類等を中心に考察を進めた。しかしその際に残され たいくつかの課題がある。今回はその中から「海軍契約規 程」と「同施行手続」の内容確認、そして金銭出納帳等の 金銭収受に関する研究所所蔵資料の調査について述べてい きたい。

a. 海軍契約規程および同施行手続

海軍気象部と研究所との間で取り交わされた建物の貸借契約では、最後の条文に、「前各条二明掲ノ外ハ海軍契約規程並同施行手続二依ルモノトス」という文言がある⁵⁰。これは慶應義塾と海軍との間に交わされた契約書も同様である⁵⁷。この事から契約はこの規程に基づいて遂行されたものであることがわかる。この規程および同施行手続の内容は、これまで未確認であったが、『官報』から、「海軍契約規程」が大正11年(1922年)4月1日に海軍省令第11号として制定されていることがわかった⁵⁸。

規程は、第1章総則、第2章一般競争契約、第3章指名競争契約、第4章随意契約、第5章海軍購買名簿の全5章、条文は全34条にわたるものである。条文の改正は、終戦間際の昭和20年7月まで数十回行われているが、その多くは部課名や、契約担任官の変更等に伴うものであり、大きな改正はあまり見られない。一方の施行手続については、『官庁購買と諸手続法』から確認を行った⁵⁰。こちらは、第1章総則、第2章一般競争及指名競争契約、第3章随意契約、第4章報告及通報の全4章、条文は43条にわたる。

規程は、売買、工事、製造等に関わる内容が中心であり、今回のような貸借契約について直接述べたような条文は比較的少ない。関係箇所を挙げるならば、契約を行う時はこの規程によるという大原則(第1条)、契約担任官(第2条)、契約対象物の検査の実施(第9条)などだろうか⁶⁰。一方、同施行手続については、まず海軍気象部との借家契約書の第9条「乙ハ甲ノ承諾ヲ得ルニ非ザレバ本契約ニ依リ生ズル債権ヲ第三者ニ譲渡スルコトヲ得ザルモノトス」⁶¹⁾と、施行手続第23条の条文「契約者ハ契約担任官ノ承認ヲ受クルニ非サレハ契約ニ因リテ生スル債権ヲ第三者ニ譲渡スルコトヲ得ス」⁶²⁾がほぼ同文といえよう。また、代金の支払いに当たっては施行手続第14条の手続きが研究所との契約においても実行されていることがわかる。14条の条文は次のとおりである。

官ヨリ金銭ノ給付ヲ為スヘキ契約ニ在リテハ契約者ハ義務 完了後速カニ支払請求書正副二通(第七号書式)ヲ契約担 任官ニ提出スルモノトス(後略)⁶³⁾

この条文に関して、研究所には、昭和19年9月22日 付で海軍気象部会計課から借家料請求書の調印と送付の依頼が来ている。その内容を以下に引用する。

八月分借家料別紙請求書ニ捺印ノ上至急返送相成度 返送ノ上ハ直チニ隔地者送金ノ手続可致候

追而領収証用紙若干同封致候条、便宜請求書ニ訂正消印 ノ上今後毎月月頭前月分ノ借家料ニ対スル請求書弐通ヲ 調整当課ニ送付相成度⁶⁰、

研究所と海軍気象部との契約では毎月月頭に前月分の借家料を支払うことになっており⁶⁰、施行手続第 14 条に当てはめれば、研究所は建物の貸与という義務を毎月履行した後に、借家料の請求書を海軍気象部に送付し、支払を受けるという形であったようである。但し、研究所の金銭出納帳を確認すると、必ずしも毎月月頭に借家料が支払われた訳でなく、月末であったり、数ヶ月分まとめて支払われているケースもある⁶⁰。これは、研究所からの請求書送付が規則的に行えなかったことが原因として考えられる。な

お、この点と金銭出納帳の内容については後述する。

ここまで、海軍の契約規程および同施行手続の内容を確認し、契約書と照合しながら見てきたが、そこからはこれらの規程類が終戦間際の時期にあっても効力を発揮し、それに従って契約が締結され、その内容が遵守されてていたといえそうである。但し、これが他の契約についても同様なのか、それとも特異な例なのかは、今後、調査していきたい。

b. 金銭出納帳

ここからは、研究所の金銭出納に関する資料から海軍気象部の建物借用について述べていきたい。海軍気象部と研究所との間では、建物の借用に伴う金銭の取扱、例えば各々が負担する支出項目や、その金額、支払の必要手続、期日などについて、頻繁に文書のやりとりを行い、詳細に取り決めをしている。その内容については、既に『大倉山論集』第56輯の中で触れているが、ここでは当時の金銭出納帳と収入簿、収入証で実際の金銭の流れを確認しながら、海軍気象部の対応を見ていきたい。

海軍気象部の建物借用に伴う最初の金銭の支払いは、昭和19年9月28日の「気象部負担電気料」88円45銭である。。海軍気象部との契約では借家料以外に気象部側の支出として、光熱水道料金がある。。海軍気象部の建物借用は契約上昭和19年8月20日に開始されている。。そのため、8月10日から9月9日までの電気料金について、8月10日から19日までの分を研究所、以降の分を気象部で負担することとしており、気象部負担分の88円45銭は小為替で研究所に支払われた。。なお、これ以降の光熱費の支払いについては、同年9月30日付で気象部から関東配電株式会社神奈川支店高島通営業所宛に、料金を海軍気象部に直接請求するよう照会がされている。。そして以降の気象部からの金銭の収受は借家料のみとなっていることから、請求先変更の手続きが滞りなく行われたものと思われる。

次に、借家料の支払日について金銭出納帳を見ていくこととする。8月分の借家料は10月7日に1935円48銭が支払われている。研究所本館の借家料は月5000円の契約だが、契約の始期は8月20日のため、12日分が日割りで支払われた⁷²。なお、海軍契約規程施行手続第17条では、支払は已むを得ない場合を除き、支払請求書到着の日から15日以内に契約書所定の支払庁から行うものと定められている⁷³。海軍気象部からは9月22日付で借家料請求書の調印と送付の依頼があり、研究所からは9月27日に8月分借家料の請求書と電気料の領収書を海軍気象部宛に送付している⁷⁴。よって研究所の請求書送付から8月分の借家料支払までの日数はちょうど10日となり、手

続きに従って速やかに借家料が支払われたことがわかる。

さて、9月分以降の研究所本館借家料支払の日付は、昭 和19年9月分が10月31日、10月分が11月9日、11 月分が翌年1月8日、12月分が1月29日、昭和20年 1月分が2月9日、2月分が3月13日、3、4、5月分が 6月23日、6月分が7月18日、7、8月分が8月27日 となっている。なお、昭和20年3月1日からは研究所附 属寮の富嶽荘も借家契約を締結しているで。また、同年4 月1日からは世田谷区奥沢にあった朝鮮人留学生の学生 寮である明世寮についても借家契約が結ばれている⁷⁶。本 館6月分借家料の支払時には富嶽荘の3月から6月まで の借家料 1200円 (月額 300円)、明世寮の 4月から 6月 までの借家料 270 円(月額 90 円)も支払われており、7 月、 8月分についても3つの建物の借家料が合算で支払われて いる。よって気象部に貸与した各建物の借家料は、全額が きちんと支払われ、研究所の収入として計上されているこ とが金銭出納帳から確認できる。また金銭出納帳以外の収 入管理書類である収入簿や収入証についても日付、金額等 の記載事項は一致しているで。支払日のばらつきについて は、戦況の悪化や、前述のような研究所の手続き遅延がそ の理由ではないかと考える。遅延理由はこの2点以外に、 双方の執務場所が昭和20年3月に移動した事も理由とし て考えられる。研究所では附属寮の富嶽荘を同年3月か ら海軍気象部に貸与しているが、富嶽荘は研究所本館建物 への海軍気象部移転以降、研究所の執務場所となっていた。 戦争のさなか、そこからさらなる移動を余儀なくされた所 員達に細かな事務手続きを行う余裕があったとは考えにく い。一方、海軍気象部についても同年3月25日に第1課 を解体し、その一部を北小金の本土寺(現、千葉県松戸市) に移転しているが、この中には会計係も含まれていた[™]。 よって、こちらも疎開によって執務に混乱が生じていた可 能性が考えられる。いずれも、あくまで推測だが、3、4、 5月分の借家料の支払いが6月に一括で支払われることに なったのは、そうした事情も関係するのかも知れない。

ただ、研究所と海軍気象部との金銭のやりとりは、支払 時期の問題を除けば契約に沿って確実に行われていたと、 金銭出納に関する資料からもいえるだろう。

おわりに一日吉の水路部分室について一

以上、大倉精神文化研究所と海軍気象部および水路部に関して、他機関所蔵資料の調査、江田氏への聞き取りと江田氏所蔵資料の調査、研究所所蔵資料等の追加調査から判明した内容について述べてきた。しかし、ここまででもいくつか述べてきたように、その調査過程において判明したのは大倉山に関する事項のみではない。海洋情報部では、

いまひとつ興味深い発見があった。それは気象部分室が大 倉山に移転したのとほぼ同時期に、水路部が慶應義塾大学 に日吉分室を設置していることである。この日吉分室の話 は、他の海軍施設や連合艦隊司令部地下壕の影に隠れてし まってか、あるいは資料に乏しいせいか、これまであまり 注目されていない。大倉山の気象部との関係性も今のとこ ろ確認できてはいないが、この分室の話も横浜北部の軍事 施設の1つとして最後に触れておきたい。

『慶應義塾百年史』中巻(後)には水路部の移転について僅かながら記述がある⁷⁹。その内容は、昭和19年10月1日から工学部ロッカー室120坪を海軍水路部に貸与したというものであり、『慶應義塾大学工学部三十五年史』や、『港北区史』にも、百年史からの引用とみられる同様の記述がある⁸⁰。

水路業務 100 年を記念して刊行された『日本水路史』では、日吉の水路部について「10 月には活版関係を主体とする疎開工場を神奈川県日吉台の慶応義塾校舎内に設け、石木田忠蔵技手ほか 17 名を派遣して日吉分室と呼んだ」と書いている⁸¹⁰。

この日吉分室は、昭和20年4月15日から16日にかけての空襲で全焼している。なお、日吉の慶応はこの時、工学部校舎の8割を焼失した。『水路部沿革史第4巻』には、日吉分室の具体的な被害状況が以下のように記されている。

一五日 空襲のため日吉分室 (海軍総隊所在地) に左の被害があった

(一) 焼失建築物、藤原工大第十三号棟校舎 (建坪四二二 平方米) 全焼

(二) 焼失資材

活版印刷機 三台 附属機械類 四台 印刷用紙 一五、○○○枚 活字 約一、○○○貫幸い写真製版施設にほとんど被害がなかったのでこれと部

外工場の活用により四月末には水路図誌航空図誌等の供給 に支障なきに至った⁸²⁾

日吉分室の被害については、『日本水路史』にも、これを参照したと思われるほぼ同様の記述がみられる。なお、印刷用紙の枚数は『水路部沿革史第4巻』では15,000枚となっているが、『日本水路史』では1,500枚と記されている⁸³⁾。また、『水路部80年の歴史』では、日吉の慶應義塾校舎一部の活版印刷作業施設を焼失したのは5月25日であったとの記述があるが、この日付は誤りであると思われる⁸⁴⁾。しかしこの日吉分室の損害は、水路部の業務にとって大きな支障を与えるものではなかったようである。

日吉分室があったのは、藤原工業大学を前身とする慶應義塾大学工学部の第13号棟校舎で、ここは機械工学科専用棟であった。場所は、現在の日吉キャンパスの第4校舎B棟のあたりと思われる。『慶應義塾百年史』によれば、この第13号棟は、木造瓦葺二階建264坪で、更衣室・製図室・青写真室などがあったという⁸⁵⁰。この更衣室が水路部に貸与したという工学部ロッカー室を指すものと思われる。また、第13号棟には製図室や青写真室があることから、水路部の移転はこれらの設備が図誌等の印刷・供給に使用できると見込んでのことだったのかも知れない。

日吉分室については以上である。こちらについても今後、 さらなる調査を期したい。

最後になるが、本稿は断片的な情報や可能性の指摘で終わってしまった記述が多々あり、非常に締まりのない内容となってしまった点は否めない。しかし、冒頭で述べたように、これらの情報も表に出していくことにより、新たな情報集積が誘引され、いずれ断片が1つに成形されることを期待したい。なお、表3には海軍の気象業務および大倉山の海軍気象部に関して記述された文献、資料類で把握しているものをまとめて掲載した。こちらも参考にして頂ければ幸いである。

注

- 1) 『横浜市史II』第1巻(下)(横浜市、平成8年3月31日) 452、453頁では、横浜市内で陸海軍が使用していた施設の 所在地が区別に記されているが、海軍気象部の大倉精神文化 研究所の使用については本書に記述は見られない。なお、 港北区内は日吉町の海軍総隊司令部(連合艦隊司令部)、師 岡町の海軍大学図書庫、菊名町の横須賀海軍警備隊照空所、 根岸町の第2海軍技術廠根岸実験室の4箇所を掲載している (「根岸町」は原文ママ)。
- 2)根本順吉「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について ―」(『大倉山論集』第51輯、財団法人大倉精神文化研究

- 所、平成17年3月31日)、沼田昭・町田郁子「大倉山の想い 出一旧海軍気象部分室について(二)一」(『大倉山論集』第52 輯、財団法人大倉精神文化研究所、平成18年3月17日)
- 3) 酒井君代・平井誠二「海軍気象部による大倉精神文化研究 所建物の借用」(『大倉山論集』第56輯、財団法人大倉精神 文化研究所、平成22年3月25日)
- 4) 拙稿「シリーズわがまち港北 第164回 海軍気象部と横 浜大空襲―終戦秘話その15―」(『楽・遊・学』第213号、 港北区区民活動支援センター、平成24年8月)、同「シリー ズわがまち港北 第165回 海軍水路部の疎開 ―終戦秘話

その16一」(『楽・遊・学』第214号、港北区区民活動支援センター、平成24年9月)、なお、『楽・遊・学』では、平井誠二氏が「シリーズわがまち港北」の中で、既に大倉山の海軍気象部について、数回にわたり、紹介している。以下、該当の回と掲載号である。第32回「終戦秘話―その3― 日誌が語る戦争の日々」(『楽・遊・学』第77号、港北区生涯学習支援センター、平成13年8月)、第33回「終戦秘話―その4― 日誌が語る横浜大空襲から終戦」(『楽・遊・学』第78号、港北区生涯学習支援センター、平成13年9月)、第44回「終戦秘話―その5― 大倉山と海軍気象部」(『楽・遊・学』第89号、港北区生涯学習支援センター、平成14年8月)、第69回「終戦秘話―その7― 米ソの暗号を解読せよ!」(『楽・遊・学』第114号、港北区生涯学習支援センター、平成16年9月)

本報告も含め、筆者の調査およびその成果は、平井氏の調査 成果を土台としており、それがなければ成し得なかったもの である。

- 5) 気象庁編『気象百年史』(日本気象学会、昭和50年3月31 日)214頁
- 6)研究所沿革史資料No.2499「昭和15年~22年日誌」
- 7)研究所沿革史資料No.12248-483「大田香苗」(名刺)
- 8)研究所沿革史資料No.6748-6「大倉山③」、研究所沿革史 資料No.6748-8「大倉山⑤」、研究所沿革史資料No.6748-10 「大倉山②」
- 9) 大田香苗「海軍勤務回想(気象関係)」(その1・2) 昭和 41年(防衛研究所戦史研究センター所蔵、登録番号⑨その他 一依託-44・45)、本文中では「昭和四十年十二月了」の 記載があるが、目録上の作成年は昭和41年となっている。な お、本資料は海上保安庁海洋情報部で複製を所蔵している。 こちらは5分冊となっている(番号418-1~5)。
- 10) 同前390~393頁
- 11) 師岡町に海軍省図書庫があったという情報は郷土史家の吉 川英男氏による。なお、終戦後は書庫を改築し、横浜市立大 綱小学校の師岡分教場として昭和27年まで使用していた。分 教場跡は昭和50年代まで残っていたとの事で、『大綱今昔 社会科指導資料1』(田中祥彦編著、横浜市立大綱小学校、 昭和46年3月25日)には昭和45年3月19日撮影の写真が掲載 されている。また『横浜市史II』第1巻(下)では、海軍省 ではなく、「海軍大学書庫」と記載されている。
- 12) 研究所沿革史資料No.5366-1「図面借用証」(昭和19年 8月11日)の封筒差出人は「海軍施設本部 師岡施設工事々 務所 高井三次郎」となっている。また研究所沿革史資料 No.5366-17「図面借用証」(年不詳)の差出人は「東施第 二部隊師岡 高井三次郎」である。記載の事務所、部隊は師 岡にあったものと思われるが、詳細は不明である。

- 13) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2)406、 407頁
- 14) 前掲注2「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について ― | 298頁、301頁
- 15) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2) 416頁
- 16) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2)500頁、但し、508頁には「北小金分室及東京第四分室の外閉鎖せり (後略)」とある。北小金分室は回想によれば、昭和20年3月25日に第1分室を解体し、本土寺境内に設けられたとの事である(389頁)。なお、本土寺は千葉県松戸市にある日蓮宗の寺院である。東京第4分室は神田駿河台の「埼玉館」に設置されたものであった(388頁)。
- 17) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2) 500頁
- 18) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2)507頁
- 19) 「日本海軍気象機関に関する解答(一九四五、一〇、三、連合軍司令部G. Tウォーカー陸軍中佐より要求ありたる解答)」防衛研究所戦史研究センター所蔵、登録番号⑥技術ー気象-311、なお、同センター所蔵の「気象参考資料 米軍の要水による解答」(登録番号⑥技術-気象-65)は同一資料であり、複製と見られる。
- 20) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2) 520~638頁
- 21) 「連合艦隊司令部陸上施設設置要領」(第二復員局「官房 軍務局保存記録施策関係綴 昭和一七、七~二〇、八」防衛 研究所戦史研究センター史料室所蔵、登録番号⑤航空関係ー 航空本部-73)
- 22) 日吉台地下壕保存の会編『フィールドワーク 日吉・帝 国海軍大地下壕』(平和文化、2011年3月3日第2版第1 刷)30.31頁
- 23) 海図アーカイブ http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KIKAKU/kokai/kaizuArchive/ 海上保安庁海洋情報部所蔵資料の紹介を目的としたホームページで、明治初期から昭和20年末までの資料目録を見ることができる。また、目録掲載史料は、海上保安庁海洋情報部海洋情報資料館と各管区海上保安本部海洋情報部海の相談室で閲覧可能である。
- 24) 水路部「参考品目録①」昭和19年、海上保安庁海洋情報 部所蔵、番号250-1、水路部「参考品目録②」昭和19年11 月、海上保安庁海洋情報部所蔵、番号250-2
- 25) 海図アーカイブ「古書(その他)目録」
- http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KIKAKU/kokai/kaizuArchive/possess/pdf/bunsyo_sonota.pdf
- 26) 同前
- 27) 『水路部80年の歴史』(水路部創設八十年記念事業後援会、昭和27年7月28日)、海上保安庁水路部編『日本水路史』(財団法人日本水路協会、昭和46年12月20日)によれ

- ば、柳楢悦は、津の旧藩士で、勝麟太郎(勝海舟)らと長崎 海軍伝習所でオランダ人から数学や測量術を習い、津藩の航 海術指南役を務めていた。しかし明治2年に海軍伝習所でと もに学んだ五代友厚、川村純義の推薦によって、兵部省の御 用掛として水路局創設について委嘱される。明治4年の水路 局創設時には初代局長となり、19年に渡って水路業務を指揮 したという。
- 28) 前掲注6「昭和15年~22年日誌」
- 29) 水路部「終戦関係水路部提出資料」昭和20年8月、海上保 安庁海洋情報部所蔵、番号593
- 30)研究所沿革史資料No.1690-1「外務省貴重図書保管依頼書」(昭和19年3月31日)、No.1690-2「外務省貴重図書保管承諾書」(昭和19年4月4日)
- 31)研究所沿革史資料No.6622「(会計簿冊)金銭出納帳 18~25年度」、研究所沿革史資料No.6149「収入証 19年 度」、研究所沿革史資料No.6662「(会計簿冊)収入簿 18 ~20年度」。
- 32) 『文書及図書類疎開関係雑纂』外務省外交史料館所蔵、請求記号B-N-1-0-0-4
- 33) 「外務省図書疎開略記」(前掲注30『文書及図書類疎開 関係雑纂』)中の、「大倉精神文化研究所へノ図書疎開」に 記されている。なお、この略記からは2回の疎開で約4500冊 の資料が研究所に搬入されたことも確認できる。
- 34) 前掲注4参照
- 35) 前揭注6「昭和15年~22年日誌」
- 36) 『記録文集 あおぞら―第1集―』(青空会、昭和53年10月)、『記録文集 あおぞら―第2集―』(あおぞら刊行会、昭和54年10月)、『記録文集 あおぞら―第3集―』(あおぞら刊行会、昭和55年9月)、『記録文集 あおぞら―第4集―』(あおぞら刊行会、昭和56年1月)、『記録文集 あおぞら―第5集―』(あおぞら刊行会、昭和58年7月)
- 37) 前掲注36『記録文集 あおぞら―第4集―』102~103頁
- 38) 前掲注2「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について ―」298頁、「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について (二)―」331頁
- 39)横浜市・横浜の空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災1 一体験記編―』(横浜の空襲を記録する会、昭和51年6月1 日)253頁
- 40) 前掲注6「昭和15年~22年日誌」
- 41) 前掲注36『記録文集あおぞら-第1集-』18頁
- 42) 前掲注36『記録文集あおぞら-第5集-』94頁
- 43) 前揭注6「昭和15年~22年日誌」
- 44) 前掲注36『記録文集あおぞら-第5集-』108頁
- 45) 前掲注36『記録文集あおぞら-第4集-』78、79頁
- 46) 前掲注2「大倉山の想い出-旧海軍気象部分室について

- -」、「大倉山の想い出-旧海軍気象部分室について(二) -
- 47) 『海軍気象部名簿』(青空会事務局、昭和61年9月1日)。なお、名簿は防衛研究所戦史研究センター史料室にも所蔵があり、閲覧可能である(登録番号①中央-名簿-405)。
- 48) 同前四~五頁。なお、頁数の表記は『海軍気象部名簿』が 漢数字、『青空会名簿』はアラビア数字であり、それに従っ た。なお、「施設班」の2名を『記録文集あおぞら』の名簿 で確認すると、「突撃隊」と記されている。
- 49)研究所沿革史資料No.10971「浮力測定器筐」(久保田無線電機株式会社、昭和18年2月)
- 50) 久保田無線電機株式会社に関する情報は多くはないが、大原社会問題研究所所蔵の協調会史料に「久保田無線電機製作所労働紛議(全評) ニ関スル件(発生並解決)」と題する文書があり、関連のものと思われる。なお史料によれば、「芝区宮本町8」が本社所在地であることがわかる。現在の大門駅付近である。
- 51) 前掲注3、127頁参照
- 52) 前掲注2「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について (二)―」331頁
- 53) 平成25年7月に地元の方から伺った話である。なお、当時 の研究所の建物壁面に防空塗装が施されていたというお話も あった。
- 54) 岡田武松『測候瑣談』(岩波書店、昭和12年10月20日)、研究所附属図書館の請求記号は「451.2才」である。
- 55) 図書原簿には、研究所の設立構想が固まり、図書館資料の 収集を始めた大正末から現在に至るまでの蔵書が登録されて いる。図書館には現在、約10万冊の蔵書があるが、『測候瑣 談』は47943冊目の資料として図書原簿に記載がある。
- 56) 研究所沿革史資料No.5366-2「研究所本館等借家契約 書」、以後に結ばれる附属施設の借用契約についても同様で ある
- 57) 『慶應義塾百年史』中巻(後)(慶應義塾、昭和39年10月20 日) 905~908頁
- 58) 『官報』第2897号 (大正11年4月1日) 12~14頁
- 59) 桑久保俊次『官庁購買と諸手続法』(双文館、昭和13年2月)11~126頁、222~235頁
- 60) 「海軍契約規程」では、各部局ごとに契約担任官を定めている。担任官には各部局の会計責任者が指定されている場合が多い。なお、気象部の契約担任官は確認出来なかったが、研究所との契約において、海軍気象部側の相手が会計課長名になっているのは、おそらくそれに倣ったものと思われる。なお、水路部は会計課長が担任官に指定されていることを参考までに記しておく。

- 61) 前揭注56「研究所本館等借家契約書」
- 62) 前掲注59『官庁購買と諸手続法』105頁
- 63) 同前『官庁購買と諸手続法』89頁
- 64)研究所沿革史資料No.8225-26「借家料請求書調印送付ノ 件依頼」(昭和19年9月22日)
- 65) 前揭注56「研究所本館等借家契約書」第五条
- 66) 前掲注31「(会計簿冊) 金銭出納帳 18~25年度」
- 67) 同前「(会計簿冊) 金銭出納帳 18~25年度」
- 68) 前掲注56「研究所本館等借家契約書」、その他には、海 軍気象部で行う施設やその復旧に要する費用や気象部側の責 による損害の修繕費(保険金で補填されるべき分を除く)な どが気象部側の負担となっている。
- 69) 同前「研究所本館等借用契約書」、但し5月には機械類の 搬入と取付作業・工事、6月には一部の部員が執務を行って いたことが当時の日誌に記されている。
- 70) No.8225-26「電気料及電話料二関スル件照会」、なお、 小為替は領収証とともに送付され、領収書は記名捺印のう え、返送するよう依頼されている。その後、研究所では5日 後の27日に海軍気象部へ領収書を送付していることが、「借 家契約書電気料金受取並電話機貸与二関スル件」(研究所沿 革史資料No.8229-62)によって確認できる。
- 71) 研究所沿革史資料No.8223-27関東配電株式会社神奈川支 店高島営業所宛「電気料ニ関スル件照会」
- 72) 前掲注31「(会計簿冊) 金銭出納帳 18~25年度」
- 73) 前掲注59『官庁購買と諸手続法』96頁
- 74) 前掲注70「借家契約書電気料金受取並電話機貸与ニ関スル件」
- 75)研究所沿革史資料No.5366-5「契約書」(富嶽荘借家契約書)
- 76)研究所沿革史資料No.5366-7「契約書」(世田谷区奥沢明

世寮借家契約書)

77) 前掲注31「収入証 19年度」、「(会計簿冊)収入簿 18~20年度」。

なお、収入証は昭和19年度のものであり、昭和20年度以降 は昭和22年度まで収入証自体がない。よって海軍気象部の 借家料の収入証は昭和20年3月までのものしか存在しない。 なお、昭和20年4月以降の借家料については収入証に代わっ て、収入簿の「家賃」の項目に記載されている。なお、収入 簿は昭和18年から記載があるが、「家賃」の項目については 昭和20年4月以前の記載はない。

- 78) 前掲注9「海軍勤務回想(気象関係)」(その2)389頁、 前掲注47『海軍気象部名簿』一~二頁
- 79) 前掲注57『慶應義塾百年史』中巻(後)908頁
- 80) 『慶應義塾大学工学部三十五年史』 (慶應義塾大学工学 部、昭和49年6月17日) 47頁、『港北区史』 (港北区郷土史 編さん刊行委員会、昭和61年3月31日) 426頁
- 81) 前掲注27『日本水路史』289頁
- 82) 『水路部沿革史第4巻』(海上保安庁水路部、1951年) 128頁、海上保安庁海洋情報部所蔵、番号 369
- 83) 前掲注27『日本水路史』223頁。以下、当該部分の引用である。

「4月15日の空襲では印刷室1棟のほか日吉分室が全焼した。ここは藤原工業大学第13号棟校舎(建坪422㎡)を利用していたもので、海軍総隊の所在地ともなっていたが、活版印刷機3台・付属機械4台・印刷用紙1,500枚、活字約1,000貫を焼失した。幸い写真製版にはほとんど被害が無かったので、これと部外工場の活用により4月末の図誌供給に支障ない程度となった。」

- 84) 前掲注27『水路部80年の歴史』234頁
- 85) 前掲注57『慶應義塾百年史』中巻(後)755頁



写真 1 浮力測定器筐 (全体) 研究所沿革史資料 No.10971



写真 2 浮力測定器筐 (プレート部分) 研究所沿革史資料 No.10971



写真 3 浮力測定器筐 (中身) 研究所沿革史資料 No.10971

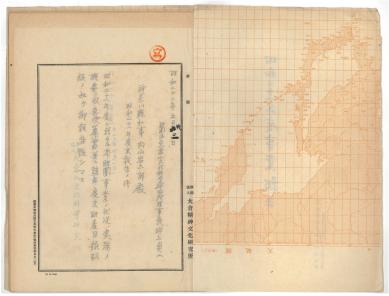


写真 4 天気図の用紙が使用された「昭和 21 年度事業報告」 研究所沿革史資料 No.313

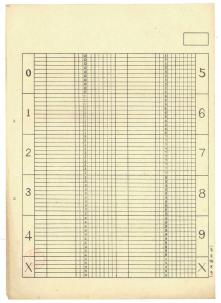


写真 5 「気象特 8 号」用紙 研究所沿革史資料 No.8188

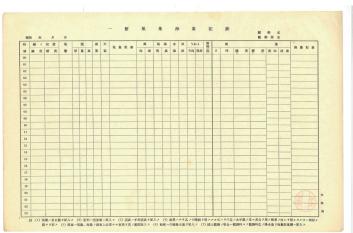


写真 6 「一般気象海象記録」用紙 研究所沿革史資料 No.8188

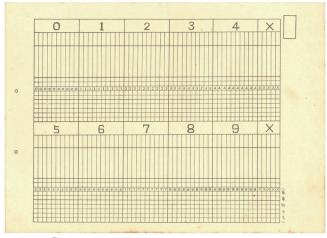


写真7 「気象特9号」用紙 研究所沿革史資料 No.8245-39



写真 8 海軍気象部回覧用文書雛形 研究所沿革史資料 No.8246-40



写真 9 観測用用紙 (表) 研究所沿革史資料 No.8246-41



写真 10 観測用用紙 (裏) 研究所沿革史資料 No.8246-41

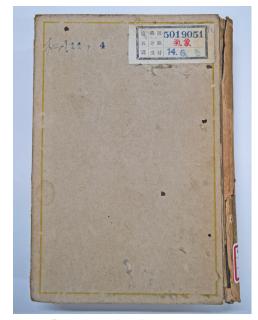


写真 11 『測候瑣談』(表紙) 研究所付属図書館蔵書 請求番号 451.2 オ



写真 12 本立て(全体) 研究所沿革史資料 No.11048



写真 13 本立て (側面、水路部第五課の印) 研究所沿革史資料 No.11048



写真 15 本立て (全体) 研究所沿革史資料 No.11049



写真 14 本立て (底面、「船舶面」の文字) 研究所沿革史資料 No.11048



写真 16 本立て (背面、水路部第五課の印と「B18」 の文字) 研究所沿革史資料 No.11048



写真 17 そろばん (全体) 研究所沿革史資料 No.11644



写真 18 そろばん (水路部第五課の刻印部分) 研究所沿革史資料 No.11644



写真 19 木製定規 (「第五課」「気象第十三号」の文字) 研究所沿革史資料 No.8488



写真 20 『測候瑣談』(扉) 研究所附属図書館蔵書

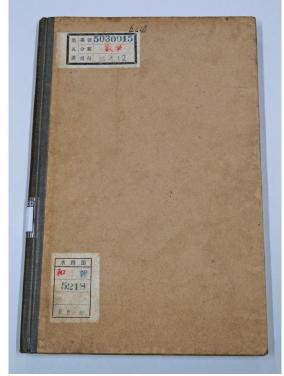


写真 21 『改訂がうす著五桁/対数表附用法』(表紙) 研究所沿革史資料 No.11884

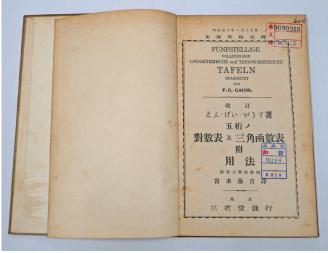


写真 22 『改訂がうす著五桁ノ対数表附用法』(扉) 研究所沿革史資料 No.11884

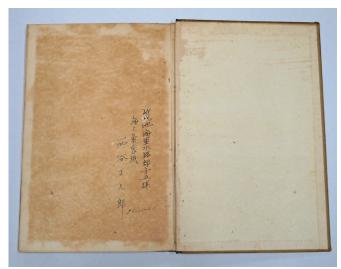


写真 23 『改訂がうす著五桁ノ対数表附用法』(裏見返し) 研究所沿革史資料 No.11884



写真 24 『やまとこゝろと獨乙精神』(表紙) 研究所沿革史資料 No.11933

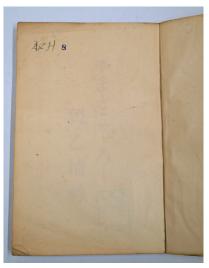


写真 25 『やまとこゝろと獨乙精神』(見返し) 研究所沿革史資料 No.11933

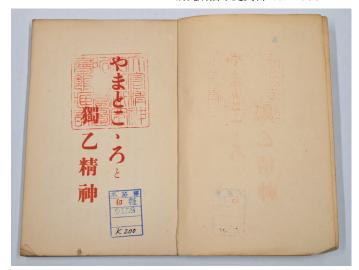


写真 26 『やまとこゝろと獨乙精神』(扉) 研究所沿革史資料 No.11933

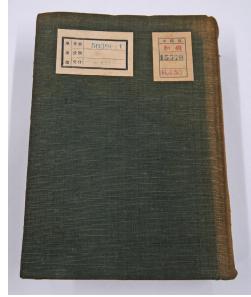


写真 27 『科学技術年鑑 昭和 17 年』(表紙) 研究所沿革史資料 No.11934

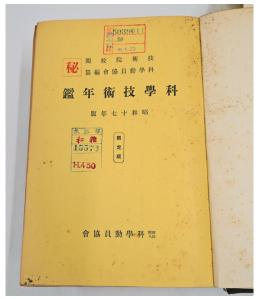


写真 28 『科学技術年鑑 昭和 17 年』(扉) 研究所沿革史資料 No.11934



写真 29 『科学技術年鑑 昭和 17 年』(見返しに貼付された回覧用紙、用紙は図 8 に同じ) 研究所沿革史資料 No.11934



写真 30 『戦時労務管理 労務管理全書第 1 巻』(表紙、函) 研究所沿革史資料 No.11935



写真 31 『戦時労務管理 労務管理全書第 1 巻』 (背表紙下部に貼付された「原田技手」のラベル) 研究所沿革史資料 No.11935

(表1)大倉精神文化研究所で所蔵する海軍気象部との契約関係資料、海軍気象部旧蔵と思われる資料

250-67 四条件	中 年 月 日 日	
「財産目級・支援・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・製造・	時和 20 正原) 昭和 20 宣 昭和 19 宣 四和 19 宣 四和 19 四和 15 四和 19 四和 19 四和 19 四和 19 四和 19 四和 19 四和 19 四和 19 四和 20 原田 四和 20 原田 四和 20 原田 昭和 20 原田 昭和 20 原田 昭和 20 紫枝手 長崎吉治 昭和 20 解析 20 昭和 20	
「収有格力生度未報告書」(事業報告) (大倉精神文化研究所) ((大倉精神文化研究所) ((4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	昭和 20 日和 19 日和 20 日和	
関和二十年度報告書(事業報告) 大倉山文化科学研究所 2 「研究所施設件用工場スル件照会」 大倉財神文化科学研究所 2 「研究所施設件用工場スル件照会」 大倉財神文化研究所長大倉府湾 日本 日本 日本 日本 <t< td=""><td>応息 昭和12 度 昭和19 度 昭和19 四十5 昭和19 四十5 昭和19 四十9 昭和19 昭和19 昭和19 昭和20 昭和20 原田 昭和20 原田 昭和20 原田 昭和20 成田 昭和20 成田 昭和20 成田 昭和20 東極吉治 昭和20 銀枝手 日曜和20 昭和20 昭和20 報校手 日曜和20 昭和20 日曜和20</td><td></td></t<>	応息 昭和12 度 昭和19 度 昭和19 四十5 昭和19 四十5 昭和19 四十9 昭和19 昭和19 昭和19 昭和20 昭和20 原田 昭和20 原田 昭和20 原田 昭和20 成田 昭和20 成田 昭和20 成田 昭和20 東極吉治 昭和20 銀枝手 日曜和20 昭和20 昭和20 報校手 日曜和20 昭和20 日曜和20	
	(財) 昭和19 (支) 昭和19 (本元本) 昭和19 (日本19年) 昭和19 (日本19年) 昭和19 (日本20年) 昭和19 (日本20年) 昭和20 (日本20年) 田和20	
(研究所施設格用承諾書)(等) 大倉精神文化研究所提及と 同志 (借送契約計算用図 (様式)	度 昭和19 (本22年) (日和15年) (日和16年) (日和16年) (日和16年) (日和17年) (日和18年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日和20年) (日本20年) (
日誌 国際	(22年) (23年) (24年) (25年) (25年) <	
別國気球膜測計算用図(株式) 海電施設本部師図事務所 高井三次郎 宮鏡柱指家契約書	井三次郎 昭和19 四十三次郎 昭和19 四十19 昭和19 四十19 昭和19 昭和10 昭和20 東邦太郎 昭和20 原田 昭和20 京田 昭和20 大佐 梶原李義 昭和20 安技手 長崎吉治 昭和20 磐技手 長崎吉治 昭和20 第45 日本20	
図面借用証	井三次郎 昭和19 曜事長兼所長 中 昭和19 曜事長兼所長 中 昭和19 曜和20 昭和20 東邦太郎 昭和20 原田 昭和20 原田 昭和20 大佐 梶原李義 昭和20 女佐 梶原李義 昭和20 紫枝手 長崎吉治 昭和20 磐枝手 長崎吉治 昭和20 第校子 長崎吉治 昭和20	
富雄柱借家契約書 財団法人大倉精神文化研究所理事長兼所長 大倉山は歌契約書 財団法人大倉精神文化研究所理事長兼所長 大倉組線 大倉組 (借 (昭和 20 四事長兼所長 大 昭和 19 昭和 19 昭和 20 本邦太郎 昭和 20 原田 昭和 20 原田 昭和 20 成田 昭和 20 大佐 梶原李義 昭和 20 繁枝手 長崎吉治 昭和 20 繁枝手 長崎吉治 昭和 20	
「大倉山借家契約書」 財団法人大倉精神文化研究所理事長兼所長 大倉地借家契約書」 (借事契約書] 「電話機無償貸与許可申請書」 (大倉精神文化研究所理事長兼所長 大倉邦彦・東邦太郎 「電話機無償貸与計可申請書」 (大倉精神文化研究所理事長兼所長 大倉地保管・表別の書」 「借用機工協別 (編局郵便局長宛) 海軍気象部会計課 「福用機出証」 第軍気象部会計課 「特用第二 (昭田教 (海軍人保護工程) 市軍気象部会計課 「特用第三 (報日地) (報局郵便局長宛) 海軍気象部会計課 「全額離」 市軍気象部会計課 「全額離」 市域気象部会計課 「全額離」 市域(第軍人保護」 「全額離」 市域(第軍人保護」 「全額離」 市域(第軍人保護」 「全額離」 市域(第市 大倉) 「全額職」 大倉山窓 (第の映像) 16 ミリフィルム 大倉山窓 (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山窓 (金の映像) 16 ミリフィルム 大倉山窓 (金の映像) 16 ミリフィルム 大倉山窓 (金の映像) 16 ミリフィルム 「電気海産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産	理事長兼所長 大 昭和 19 四和 19 昭和 19 昭和 20 昭和 20 昭和 20 昭和 20 昭和 20 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 安技手 長崎吉治 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20 曾校手 長崎吉治 昭和 20	
「電話機無償貸与許可申請書」 自用法 自用法		
「電話機無償貸与將可申請書」 (大倉精神文化研究所) 「気象部へ貸与セル付器、家具、控」(借用証) 宝米邦太郎 明世貸借家契約書 海軍気象部方方室主席部員 「借用物品返納ノ件」 海軍気象部分自力会長 宝米邦太郎 「借用家屋解約ノ件通知」(網島郵便局長苑) 海軍気象部会計課 「指用物品逐納ノ件」 本路部第三部第三部署 「作品保管ノ件化額」 市軍気象部会計課 「電影使用停止二関スル件通知」(網島郵便局長苑) 海軍気象部会計課長 海耳大佐 梶原季義 「特別機出証」 中央気象合大和田臨時出張所 気象技字 丸山光水郎 「佐倉龍正」 中央気象台施助事務処理室気象技手 長崎吉治 (第四人優子のとのに印あり) 大倉山交(2000) 大倉山③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山〇 (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山〇 (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山の(電の映像) 16 ミリスルム 「福気象施象記録等気象部・水路部用紙 「旧業経会施象記録等気象部・水路部用紙 「旧業経会施象記録等気象の水像は出上関ス化類子 「電気条所を記録を記録を記録を記述の 「電気料工関スル保険会所を記述の 「電気料工関スルと供送会所を記述の 「電気料工関スルと供送会」(関東配電株式会社の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を記述の 「海上が高端を 「海	昭和 19 昭和 20 平邦太郎 昭和 20 昭和 20 昭和 20 原田 昭和 20 京田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 解和 20 昭和 20 教技手 長崎吉治 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
「気象部へ貸与セル什器、家具 控」(借用証)	昭和 20 來邦太郎 昭和 20 昭和 20 昭和 20 昭和 20 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 祭技手 長崎吉治 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
時世寮借家契約書 海軍気象部大倉山分室長 宝米邦太郎 1944年級割 海軍気象部大倉山分室長 宝米邦太郎 1944年級割 1944年級割 1944年級割 1944年級部 1944年級部 1944年級部 1944年級部 1944年級部 1944年級部 1944年 19	本邦太郎 昭和 20 本邦太郎 昭和 20 昭和 20 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 昭和 20 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
「借用物品返納ノ件」 海軍気象部大倉山分室長 宝本邦太郎 「借用家屋解約ノ件通知」 室本邦太郎 「借用家屋解約ノ件通知」 海軍気象部会計課 「信用家屋解約ノ件通知」 海軍気象部会計課 「電話使用停止二関スル件通知」(編島郵便局長宛) 海軍気象部会計課長 「空間話」 水路部第二部第三課長 海軍大佐 梶原季義 「受値話」 中央気象台太和田臨時出張所 (常品記) 中央気象台大和田臨時出張所 (常品記) 中央気象台本和出光本郎 「受値話」 中央気象台本部第三課長 海軍大佐 梶原季義 (常品記) 中央気象台本部市 (本身社等 丸山光太郎) 大倉山光大郎」 大倉山③(雲の映像)16ミリフィルム 大倉山③(雲の映像)16ミリフィルム 大倉山③(雲の映像)16ミリフィルム (国市軍報条記録等気象部・水路部用紙 (旧海軍圏係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件) 水路部 (本倉田会) 水路部 (本倉田会計報会送付ノ件通知) 「「電海学業の報告といけ照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 (電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 (電海学業の流の) 本路部 (海軍気象部会計課 (東京教上の間) 本路部 (海軍気象部会計課 「電気料二関スル体照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 (東京教生の成の) 本路部 (海軍気象部会) 本路部 (海軍気象部会計課	來邦太郎 昭和 20 昭和 20 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 解和 20 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
「特品保管ノ件依頼」 宝来邦太郎 「借用家屋解約ノ件通知」 海軍気象部会計課 「電話使用停止二関スル件通知」(編島郵便局長宛) 海軍気象部会計課長 女子寮 (明世寮) 残品受領証 水路部第二部第三課長 海軍大佐 梶原季義 「受領証」 小投資第二部第三課長 海軍大佐 梶原季義 「受領証」 中央気象台太和田臨時出張所 (常用証」(図面) 「長間証」(図面) 中央気象台本和出光本郎」 「長間証」(図面) 中央気象台本部第三課長 海軍大佐 梶原季義 「大倉積神文化研究所へ払下ノ分」 本倉山文化科学研究所 (第日の映像) 16 ミリフィルム 大倉山文化科学研究所 (上般気象部を記録等気象部・水路部用紙 「旧海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 本路部用紙 本路部 (東軍総会計課 谷口 「電気料二関スル代照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 (電気料上間公)(関東配電株式会社神奈川支店高 (電気料上間ない)(関東配電株式会社神奈川支店高 (重定料上面) 本路部 (海軍気象部会計課 (東軍気条部会計課	昭和 20 原田 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 解和 20 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
「借用家屋解約ノ件通知」 海軍気象部会計課 「電話使用停止二関スル件通知」(綱島郵便局長苑) 海軍気象部会計課長 女子寮 (明世寮) 残品受領証 財団法人大倉精神文化研究所 原田 「受領証」 小路部第三部長 海軍大佐 梶原季義 「受領証」 中央気象台大和田臨時出張所 気象技手 丸山光太郎」 「佐用証」(図面) 中央気象台臨時事務処理室気象技手 長崎吉治 (場更)(製金)(場の)(16ラリフィルム) 大倉山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山文化科学研究所 (市産財金送付ノ件通知) 「日海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ佐頼ノ件」 中央気象台図書課長 (東軍総会計級) 「「日海軍関係大身山研究所図書機出二関シ佐頼ノ件」 本路部用紙 (東軍総会計級) 「「日海国関係大身山研究所図書機出二関シ佐頼ノ件」 本路部 (電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店局 (海軍気象部会計課	原田 昭和 20 原田 昭和 20 大佐 梶原李義 昭和 20 昭和 20 昭和 20 象技手 長崎吉治 昭和 20	
「電話使用停止二関スル件通知」(編鳥郵便局長宛) 海軍気象部会計課長 女子寮 (明世寮) 残品受領証 財団法人大倉精神文化研究所 原田 「空領証」 小路常第二部第三課長 海軍大佐 梶原季義 「受領証」 中央気象台本和田臨時出張所 「受領証」 中央気象台本和田臨時出張所 「佐用証」(図面) 中央気象台臨時事務処理室気象技手 長崎吉治 「大倉相政」(図面) 神央気象台臨時事務処理室気象技手 長崎吉治 「大倉相談」(図面) 大倉山災人務計 大倉山⑤ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山文化科学研究所 「日海軍関係大倉山が空料金送付ノ件通知」 小路部 「大倉山水道料金送付ノ件通知」 本路部用紙 「「東京県本会社の大人性照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 は深料に関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海電気祭出会計課 本路部 海軍気象部会計課	原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 昭和 20 9枚手 長崎吉治 昭和 20	H H
女子寮 (明世教) 残品受領証 財団法人大倉精神文化研究所 原田 小路部第三部第三課長 海軍大佐 梶原季義 中央気象台大和田壩時出張所 気象技手 丸山光太郎」 「受領証」 中央気象台本 丸山光太郎」 「佐用証」(図面) 中央気象台本 丸山光太郎」 収支決算書 備品台帳 (海軍へ貸与のものに印あり) 本倉山文化科学研究所 大倉山⑤ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山文化科学研究所 本倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 「旧海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ佐頼ノ件」 小路部 海軍第会計課 谷口 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 自添労等に対し、 神軍部会計課 自添労等に対し、 神軍の会員 「本倉山水道料会送付ノ件通知」 神軍部会計課 「本倉山水道料会送付ノ件通知」 神軍部会計課 「本倉地大園大小件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海洋為二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海洋海岸高端 本電気象部会計課	原田 昭和 20 大佐 梶原季義 昭和 20 昭和 20 9技手 長崎吉治 昭和 20	
「物品機出証」	大佐 梶原季養 昭和 20 昭和 20 昭和 20 黎技手 長崎吉治 昭和 20	
「受領証」 中央気象台本和田臨時出張所 気象技手 丸山光太郎」 「借用証」(図面) 中央気象台臨時事務処理室気象技手 長崎吉治 海軍東施第二部隊師岡分遣所 高井三次郎 施品台帳 (選り映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑤ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山⑥ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山の変料を記録等気象部・水路部用紙 「旧海軍関係大倉山研究所図書搬出二関シ佐頼ノ件」 小路部 海軍第会計課 谷口 海軍気象台図書課長 「電気料ニ関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 自添得整品的。 本度部会計課 海軍気象部会計課	昭和 20 象技手 長崎吉治 昭和 20	
「受領証」 中央気象台臨時事務処理室気象技手 長崎吉治 「借用証」(図面) 海軍東施第二部隊師岡分遣所 高井三次郎 「大倉精神文化研究所へ払下ノ分」 大倉山文化科学研究所 成品台帳 (海軍へ貸与のものに印あり) 大倉山(3) (豊の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(3) (豊の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(3) (豊の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(3) (豊の映像) 16 ミリフィルム 小路部 「日本軍閥係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 中央気象台図書課長 「「有山水道料金送付ノ件通知」 神軍部会計課 谷口 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海洋等高売台、 神軍気象部会計課 自済資料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海洋海洋海流台、 神軍気象部会計課	長崎吉治 昭和 20	
「借用証」(図面) 海軍東施第二部隊師岡分遺所 高井三次郎 「大倉精神文化研究所へ払下ノ分」 大倉山文化科学研究所 順品台帳(海軍へ貸与のものに印あり) 大倉山(3)(雲の映像)16ミリフィルム 大倉山(3)(雲の映像)16ミリフィルム 水路部 一般気象確象記録等気象部・水路部用紙 小路部 「日海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 中央気象台図書課長 「大倉山が道料金送付ノ件通知」 神軍部会計課 谷口 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 高海営業所成的 神軍気象部会計課		日
大倉楠本文化研究所へ払下/分」	高井三次郎	
収支決算書 備品台帳(海軍へ貸与のものに印あり) 大倉山(家)(妻の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(家)(妻の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(家)(妻の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(家)(妻の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(家)(妻の映像) 16 ミリフィルム 「旧海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 小路部 中校気象合図書課長 市長山水道料金送付ノ件通知」 「日海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 市車部舎計課 谷口 海軍気勢ニペム 「電気料ニ関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 高海営業品へ会) 海軍気象部会計課 海軍気象部会計課	年不詳	
備品台帳 (海軍へ貸与のものに印あり) 大倉山③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 「全山② (雲の映像) 16 ミリフィルム 「日海草関係大倉山研究所図書搬出二関シ依頼ノ件」 「「日海草関係大倉山研究所図書搬出二関シ依頼ノ件」 「大倉山水道料金送付ノ件通知」 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海軍気象部会計課 台流音楽歌元点)		
大倉山(③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(③ (雲の映像) 16 ミリフィルム 大倉山(⑤ (雲の映像) 16 ミリフィルム 小路部 一般気象確象記録等気象部・水路部用紙 小路部 「日海軍関係大倉山研究所図書機出二関シ依頼ノ件」 神軍部会計課 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 高海営業品高) 神軍部会計課 「本海営業品」 神軍衛皇衛等計議	年不詳	
人自山②(曇の映像)10ミッノイルム 大自山②(曇の映像)16ミッフイルム 一般気象海象記録等気象部・水路部用紙 小路部 「旧海軍関係大倉山研究所図書搬出二関シ佐頼ノ件」 中央気象台図書課長 「有山水道料金送付ノ件通知 神軍部会計課 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高海学業品が、) 神軍気象部会計課		6742 に VHS、10951-3 に 6742 から作成した DVD 有 に742こ viric 10051 ここころが シェルギーショル キ
大昌山砂(美型砂礫)10 ミッノイルム 大昌山砂 (美型砂礫) 10 ミッノイルム 大昌山砂 (大昌山砂 空間 の で)		- 1
Track Proceedings Procedure Proc		0742 に VH3、10931-2 に 0742 がら下版 した DVD 相
「大角山水道料金送付了件通知」 海軍部分計畫 各口 「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 海軍気象部会計課 自通台整元的)		
「電気料二関スル件照会」(関東配電株式会社神奈川支店高 自海学業が知)		
	R会計課 R和 19 年 9 月 30 日	
8225-26 「借家料請求書調印送付ノ件依頼」他五通(海軍気象部会 海軍気象部会計課 高山 昭利 昭利 昭利 昭和 田利 田利 田利 田利 田利 田利 田利 田		日 「電気料及電話料二関スル件照会」
8225-22 「大倉山給水設備二関スル件照会」	丁呾	
「家屋借用二関スル件照会」	服部書記	
[借家契約書案 / 件回答] (海軍気象部会計課宛) 財団法人大倉精神文化研究所		

資料番号	資料名	作成者	年月日	備老
8229-65	「契約書調印返送ノ件」(S19.9.19)	大倉精神文化研究所 所長 大倉邦彦	昭和 19 年 9 月 19 日	
8229-62	「借家契約書電気料金受取並電話機貸与二関スル件」	大倉精神文化研究所 理事長 大倉邦彦	昭和 19 年 9 月 27 日	
8229-61	「大倉山給水設備二関スル件返事」	大倉精神文化研究所	昭和20年2月9日	
8229-60	「家屋建築費等二関スル件回答」	大倉精神文化研究所 原田	昭和 20 年 4 月 2 日	
8245-39	「気象特9号」用紙			
8246-40	(海軍気象部回覧用文書雛形)	海軍気象部		2点/「寄贈・保管・購入・要求」などの項目が記された回覧用文書の雛形
8246-41	(観測用用紙)			
8488	木製定規(第五課・気象第13号)			
8521	海上気象掛・円形定規			
8522	(写真乾板) 海上気象掛撮影			
10971	浮力測定器筐	久保田無線電機株式会社	昭和 18 年 2 月	研究所図書館1階にて2009年7月2日(木)発見/製造番号1009
11047	本立て(水路部刻印付)			48.5 (ヨコ)×29 (高さ)×21.5 (奥行き)/海軍気象部の元備品
11048	本立て(水路部刻印付)			45.3 (ヨコ) × 28.3 (高さ) × 20.3 (奥行き) / 海軍気象部の元備品
11049	本立て(水路部刻印付)			48 (ヨコ) × 30 (高さ) × 22 (奥行き) / 海軍気象部の元備品
11051-1	講義メモ(「暗号学概説」)			
11884	『改訂がうす著五桁ノ対数表附用法』	えふ・げい・がうす[著]/宮本藤吉[訳]	昭和 11 年 10 月 10 日 (65 版)	表紙に第五課と水路部のラベル、扉に第五課と水路部の印/「築地海軍 水路部第五課 海軍気象部 西谷正九郎 15-11-21」の書込/明治39 年7月9日初版
11933	『やまとこゝろと獨乙精神』	鹿子木員信	昭和13年6月1日9版	昭和13年6月1日9版 表紙に第七課の印、扉に水路部の印/昭和6年(1931年)4月20日初版
11934	『科学技術年鑑 昭和 17 年版』	財団法人科学動員協会総務部調査課	昭和17年6月1日	表紙に気象部と水路部のラベル添付、扉に第七課と水路部の印
11935	『戦時労務管理 労務管理全書第1巻』	桐原葆見	昭和17年11月20日 第4版	背表紙に「原田技手寄贈」のラベル添け/昭和17年2月 26 日初版
12248	名刺「大田香苗」		(昭和21年)4月16日	勤務先 中央気象台 自宅 世田谷区玉川奥沢町二-一九一 (四月十六 日来所)
37551 37552	借家契約書案/件照会	海軍気象部会計課 高山	昭和 19 年 8 月 26 日	
38806	「借家契約二関スル件照会」	海軍気象部会計課員 高山	昭和 19 年 8 月 22 日	
451.2 オ	『測候瑣談』	岡田武松	昭和 12 年 10 月 20 日	昭和 12 年 10 月 20 日 大倉精神文化研究所附属図書館蔵書

(表2)大倉精神文化研究所による調査関係資料

資料番号		作成者	年月日	備考
9107	(カセットテープ) 海軍気象部の件・伊佐幸一聴取		平成 16 年 6 月 22 日	
10340	10340 (カセットテープ) 根本順吉氏への聞き取り記録		平成 16 年 2 月 17 日	根本順吉氏と平井誠二 録音テープ、『大倉山論集』第51輯のコピー「大 各山の想い出]
10656	沼田昭氏よりの書翰(写)		平成16年3月8日	旧海軍気象部分室勤務
10665	沼田昭氏からの聞き取りと手紙からの集約	平井誠二	平成16年3月16日	平成 16 年 3 月 16 日 旧海軍気象部分室について
10666	海軍気象部分室について町田郁子氏より聞き取りの記録 平井誠	平井誠二	平成 16年11月12日	
10686	(カセットテープ)間取り記録(小森嘉一・沼田昭・町田郁子)		平成12年10月、 14年4月、16年3月・ 11月、17年9月	海軍気象部など
11602-45	11602-45 (CD-R) 江田常雄氏への聞き取り		平成 24 年 2 月 22 日、 24 日	平成 24 年 2 月 22 日、 24 日

(表3)大倉山の海軍気象部・水路部、海軍の気象業務に関する記述がある資料・文献・新聞記事等

資 料 名	作成者	出 版 者	年月日	備考
「参考品目録①」	小路部		昭和 19 年	海上保安庁海洋情報部所蔵、番号 250-1
「参考品目録②」	小路部		昭和19年11月、12月	海上保安庁海洋情報部所蔵、番号 250-2

				-1
(章 科 名	作及右	H 版 和	年月日	
終戦関係水路部提出資料]	小路部		昭和 20 年 8 月	番号
『水路部沿革史第 4 巻』		海上保安庁水路部	昭和 26 年	海上保安庁海洋情報部所蔵、番号 369
『水路部八十年の歴史』		水路部創設八十年記念事業後援 会	昭和 27 年 7 月 28 日	
「海軍勤務回想(気象関係)」(その1)	大田香苗		昭和 41 年	防衛研究所戦史研究センター所蔵、登録番号③その他一依託 — 44
[海軍勤務回想 (気象関係)」(その2)	大田香苗		昭和 41 年	防衛研究所戦史研究センター所蔵、登録番号③その他-依託-45
『気象百年史』	気象庁[編]	日本気象学会	昭和50年3月31日	
『日本水路史』	海上保安庁水路部[編]	財団法人日本水路協会	昭和 46 年 12 月 20 日	
『記録文集 あおぞら―第 1 集―』	青空会	青空会	昭和 53 年 10 月	
『記録文集 あおぞら―第2集―』	あおぞら刊行会	あおぞら刊行会	昭和 54 年 10 月	
『記録文集 あおぞら―第3集―』	あおぞら刊行会	あおぞら刊行会	昭和55年9月	
『記録文集 あおぞら―第4集―』	あおぞら刊行会	あおぞら刊行会	昭和 56 年 1 月	
『記録文集 あおぞら―第5集―』	あおぞら刊行会	あおぞら刊行会	昭和58年7月	
『我が生還の記録』	武田敦雄	青空会	昭和 56 年为	
『海軍気象部名簿・青空会名簿』	青空会	青空会	昭和 61 年 9 月 1 日	
『戦時中の中央気象台 大井さん講演録』	大井[]		平成 10 年	
宝来会名簿			昭和55年12月1日	町田郁子氏より寄贈(研究所沿革史資料 No.10654)、旧海軍気象部 特務班勤務者の同窓会名簿
「シリーズわがまち港北第32回 終戦秘話―その3― 日誌が語る戦争の日々」	平井誠二	港北区生涯学習支援センター	平成 13 年 8 月	『楽・遊・学』第 77 号掲載
「シリーズわがまち港北第33回 終戦秘話―その4― 日誌が語る横浜大空襲から終戦」	平井誠二	港北区生涯学習支援センター	平成 13 年 9 月	『楽・遊・学』第 78 号掲載
「シリーズわがまち港北第44回 終戦秘話―その5― 大倉山と海軍気象部」	平井誠二	港北区生涯学習支援センター	平成 14 年 8 月	『楽・遊・学』第 89 号掲載
「シリーズわがまち港北第69回 終戦秘話—その7— 米ソの暗号を解読せよ!」	平井誠二	港北区生涯学習支援センター	平成 16 年 9 月	『楽・遊・学』第114号掲載
「今も残る旧海軍気象部の資料観察記録紙やフィルム映 像 大倉山記念館横浜大空襲の日誌も」		神奈川新聞社	平成 14 年 5 月 29 日	『神奈川新聞』(平成 14 年 5 月 29 日)掲載記事、研究所沿革史資料 No.8115 で所蔵有
「横浜市大倉山記念館の今昔」	小野静枝	横浜市大公開ゼミ OB 会	平成 16 年 4 月	『自由研究論文集 20 周年記念』掲載
「大倉山の想い出―旧海軍気象部分室について―」	根本順吉	財団法人大倉精神文化研究所	平成 17 年 3 月 31 日	『大倉山論集』第 51 輯掲載
ш.	沼田昭・町田郁子	財団法人大倉精神文化研究所	平成18年3月17日	『大倉山論集』第 52 輯掲載
『鎮魂記 白菊連想 今昔十五の心』	菊池康夫	文芸社	平成 19 年8月1日	
「海軍気象部による大倉精神文化研究所建物の借用」	酒井君代・平井誠二	財団法人大倉精神文化研究所	平成 22 年 3 月 25 日	『大倉山論集』第 56 輯掲載
「米ソの暗号解読 関連メモを発見 疎開中の旧海軍残 す」		中日新聞東京本社	平成 21 年 8 月 15 日	『東京新聞』(平成 21 年 8 月 15 日) 掲載記事、浮力測定器 (No.10971 浮力測定器筺の発見、暗号解読メモ (No.11051) に関する記事、研 発所沿革史資料 No.11603-18 にて当該記事誌面のみ所蔵
「大倉精神文化研究所 64 年経た新発見 旧日本海軍気 象観測行う?」			平成 21 年 8 月 20 日	『タウンニュース』(平成21年8月20日号)掲載記事、旧日本海軍 気象部分室および浮力測定器についての記事
『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』	日吉台地下壕保存の会	平和文化	平成23年3月3日(第2版 第1刷)	第1版第1刷は2006年8月15日
『第 15 回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜 大会』		第15 回戦争遺跡保存全国シン ポジウム神奈川県横浜大会実行 委員会	平成 23 年 8 月	シンポジウムは平成23年8月6日~8日に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催、拙稿「海軍気象部の大倉山移転とその活動について」掲載
「シリーズわがまち港北第 164 回 海軍気象部と横浜大 空襲一終戦秘話その 15一」	林宏美	港北区区民活動支援センター	平成 24 年 8 月	『楽・遊・学』第213号掲載
「シリーズわがまち港北第 165 回 - 海軍水路部の疎開 一終戦秘話その 16—]	林宏美	港北区区民活動支援センター	平成 24 年 9 月	『楽・遊・学』第214号掲載

アジア太平洋戦争前後の日吉一帯に関する手記と聞き取り

安藤広道

ここでは、試みに、アジア太平洋戦争前後の日吉一帯に 関する手記、及び聞き取りの記録を集成してみた。それぞれ個人単位でまとめ、同一人物が複数回執筆、回答している場合は、「タイトル」「概要」の項で分けた。なお、聞き取りについては、全て個人名を伏せ ID を付すことにした。これらの表は、あくまで管見によるものであり、遺漏も多いはずであるが、聞き取り対象者の数は、私の予想を大 きく超えて 140 名以上にも及んだ(ただし同一人物を複数カウントしている可能性あり)。一方で聞き取りには具体的内容の不明なものが多く、聞き取り時のメモや音声・映像データを入手できたものもごく僅かであった。今後は、そうした記録の保存に向けた取り組みが急務となろう。

表の作成には、佐伯史子氏のご協力を賜った。記して謝 意を表する次第である。

表1 手記 (『せいきょう』は『KEIO せいきょう 教職員版』の略、『保存会会報』『会報』は『日吉台地下壕保存の会会報』の略)

表 1 手記	(『ぜいさよう』	は『KEIO せいきょう	教職員版』の略、『保存会会報』『会報』	』は『日吉台地ト場保存	仔の会会報』の略)
氏名(50音順)	当時の立場	タイトル	内 容	掲載誌	備考
秋元智恵子	海軍航空本部 総務部一課	日吉台地下壕 続編 7 投稿	航空本部の日吉移転、総務部、地下壕での 生活について	『せいきょう』68 1994/3/31 10・11 頁	
網野幸太郎	海軍省人事局第二 課賜金係理事生	投稿 戦時中の日吉につ いて	海軍省人事局・空襲・疎開・戦後について。 連合艦隊司令部が日吉にいることは知らず に入省した。	『保存会会報』87 2008/4/17 5 頁	
新井安吉	連合艦隊司令部 暗号兵・上等兵	寄稿 元暗号兵・新井安 吉さんからの手紙	日吉地下壕での体罰について。上官に目を かけられたことが原因で古参兵から体罰を 受けた。	『保存会会報』112 2013/9/20 13•14 頁	
	AND COLUMN STATES OF	日吉台地下壕 続編 9 投稿	鶴見造船所、熊本県菊池特攻基地、進駐軍、 戦後の日吉について	『せいきょう』70 1994/11/1 12・13 頁	
安藤喜代司	鶴見造船所勤務 特攻兵 進駐軍将校食堂 KP	日吉台地下壕の思い出	進駐軍、地下壕、戦後の日吉の様子、日吉 の空襲について	『保存会会報』13 1991/8/28 4 頁	
	产业平均仅及主 Ki	戦後間もない日吉の町	戦争直後の日吉について。	『保存会会報』53 2000/4/13 3•4 頁	
伊東喜代治	通信員	100 号記念に 戦争体験者から 連合艦 隊司令部と地下壕	当時の連合艦隊司令部の状況について。	『保存会会報』101 20011/5/13 13 頁	
梅沢精子	日吉住民 小学 1 年生	地下壕見学会に参加し て	当時の思い出(かまぼこ兵舎の教室で勉強 した。朝鮮人労働者の子供たちと遊んだ。 4月15日の空襲で実家が焼けた。落下傘 で降りた米兵の捕虜・箕輪池が飲料水用と は知らず泳いだ)。	『保存会会報』9 1991/1/24 7 頁	
小口幸子	小学生 (日吉台小) 農家 (日吉本町)	投稿 日吉の思い出(空 襲・家族・優しかった 兄等々)	戦時下の日吉について。	『保存会会報』105 2012/4/27 14•15 頁	
鹿島光雄	連合艦隊司令部 通信兵	日吉地下壕を探索して	日吉の生活。	『保存会会報』2 1989/7/20 5 頁	
栗原啓二	連合艦隊通信兵	連合艦隊司令部の思い 出	東京通信隊、日吉地下壕、寄宿舎について。	『保存会会報』61 2002/1/29 10・11 頁	
越沢正子	海軍省人事局 仕官補佐係理事生	寄稿 海軍省の理事生の 頃	海軍省人事局での仕事について。	『保存会会報』90 2009/1/24 13 頁	
小嶋喜代子	海軍省人事局	投稿 日吉の思い出	霞が関時・日吉移転後・戦後の話。	『保存会会報』77 2006/1/12 6頁	
佐藤林平	予科性	地下壕•地下街•地下道• 鍾乳洞—雑感—	日吉に連合艦隊司令部がおかれているとい ううわさは聞いたが、地下壕のことは知ら なかった。	『保存会会報』8 1990/10/15 5頁	
実松 譲	軍令部第三部	日吉における軍令部第 三部	日吉移転時のこと、日本の情報軽視の状況。 秘書官時代の話、日吉での生活・情報部に ついて。	『せいきょう』41 1988/4/1 3・4 頁	『保存会会報』26 に 抜粋転載、一部改変、 53、92-1 に転載
島本広海	海軍少尉	地下壕を見学して	昭和 19年 10月 24日レイテ海戦時の思い出。	『保存会会報』10 1991/3/28 10 頁	『せいきょう』60 に 転載
下村恒夫	連合艦隊司令部 電信員	日吉台地下壕 続編 8 投稿連合艦隊日吉司令 部跡を尋ねて	日吉移転直後の司令部・通信科の仕事、地 下電信室、夜光虫事件について。	『せいきょう』69 1994/7/15 8-11 頁	
鈴木 茂	連合艦隊司令部 通信隊員	ある通信隊員の回想	日吉地下壕の様子について。	『保存会会報』16 1992/3/26 5 頁	『せいきょう』60 に 転載
塚田耕治	慶應予科 松本連隊入営	投稿 短歌 日吉戦跡	短歌 5 首「学び舎の地下に掘られし秘密壕 作戦担当のみしか知らず」など。	『保存会会報』87 2008/4/17 6頁	
中沢正子	慶應義塾職員	日吉キャンパス周辺の 今昔	昭和 32 ~ 39 年慶大日吉研究室勤務、勤 務当時の日吉キャンパスの話。	『保存会会報』45 1998/4/14 2•3 頁	
中島親孝	連合艦隊司令部 通信情報参謀	日吉司令部の思い出	日吉に来た経緯、日吉地下壕での仕事、生 活の様子について。	『せいきょう』44 1988/12/5 4・5 頁	『保存会会報』81 に 転載
永戸多喜雄	文学部学生	戦争への道〜私の育っ た時代〜	戦時中の慶應義塾と戦争体験。	『太平洋戦争と慶應義塾』 日吉台地下壕保存の会 1997 149-170 頁	1995/4/15 保存 会年次総会の談話の 記録に補筆・修正

氏名(50音順)	当時の立場	タイトル	内 容	掲載誌	備考
		聯合艦隊司令部付とし て日吉慶応寄宿舎に赴 任して	戦艦「大和」との通信、日吉の生活について。	『せいきょう』67 1994/1/31 11・12 頁	
土方貞彦	連合艦隊司令部 通信参謀補佐	旧海軍の象徴であった 『大和』特攻の意味する もの	戦艦「大和」の戦闘状況、「大和」との通 信について。	『水交誌』No.620 平成 23年 5月 6月合併号 26-31 頁	
		海兵 78 期相模会の日 吉地下壕見学にあたっ て	戦争に対する思い・意見。	『保存会会報』83 2007/6/23 13・14 頁	2007/5/17 地下壕 見学。
御厨文雄	海軍第三○一○設 営隊主計長	海軍主計科士官の回想	日吉の地下施設築城について。	『せいきょう』51 1990/4/10 7-9 頁	
		寄稿 戦中・戦後の私 の学生生活 (1)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』70 2004/4/20 6•7•9-15頁	
		戦中・戦後の私の学生 生活 (1)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』71 2004/7/16 17-24 頁	『会報』70と同一文
		投稿 戦中・戦後の私 の学生生活 (2)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』72 2004/9/21 10·11 頁	『会報』70の9-11 頁と同一文
柳屋良博	慶應予科・山口で	戦中・戦後の私の学生 生活 (1)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』72 2004/9/21 13-15 頁	『会報』70の6・7 頁と同一文
柳座及傳		戦中・戦後の私の学生 生活 (2)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』72 2004/9/21 15・16 頁	『会報』70の9・10 頁と同一文
		戦中・戦後の私の学生 生活 (3)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』72 2004/9/21 16-20 頁	『会報』70の10-15 頁と同一文
		戦中・戦後の私の学生 生活 (3)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』73 2005/1/18 6•7 頁	『会報』70 の 10-15 頁と同一文
		投稿 戦中・戦後の私 の学生生活 (最終回)	戦中・戦後の学生生活について。	『保存会会報』77 2006/1/12 7·8 頁	『会報』70の11-15 頁と同一文
李家弘道	連合艦隊司令部通信諜報担当	二度目の中寮生活 連 合艦隊司令部員として	日吉移転、パラオ空襲、寄宿舎接収・寮で の生活、地下壕、通信諜報、食糧事情、藤 原工大の空襲時、終戦。	『慶應義塾大学日吉寮開設 50周年記念誌』慶應義塾大学寮和会昭和62年74-77頁	
若林瞳美		地下壕」見学会に参加	義母が日吉本町生まれ。横浜大空襲で近所が焼けたが実家は残った。「海軍が陸に上がった。戦争ももう負けだ」と祖父が言った。	『保存会会報』70 2004/4/20 4 頁	
60 代女性			女性の主人が海軍通信兵で日吉の防空壕に いて、地下壕で終戦を迎えた。	『保存会会報』 40 1996/12/4 5 頁	
70 代男性	学徒軍属 華北に動員		従姉が連合艦隊司令部に書記生として勤務 していたと昭和25年頃に聞いた。	『保存会会報』 43 1997/8/25 6 頁	

表2 聞き取り、または講演等の記録

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者(聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考
001	秘書官 軍令部第三部	日吉移転時の、日本の 情報軽視の状況、秘書 官時代の話、日吉での 生活、情報部について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について(8) 連合艦隊司令部日吉台 地下壕について(9)	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	『会報』26、33、49、50 に抜粋転載、一部改変
002	軍令部第三部	日吉移転の経緯、愛宕 乗艦時の話、軍令部、 地下壕について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について(8) 連合艦隊司令部日吉台 地下壕について(10)	寺田貞治	『せいきょう』41	慶應高校教諭 保存の会	『会報』27に抜粋転載、 一部改変 『会報』34、44、51、52 に抜粋転載、一部改変
003	連合艦隊司令部 通信情報参謀	日吉移転の経緯、通信 隊の仕事について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (12)	寺田貞治	『せいきょう』45	慶應高校教諭 保存の会	『会報』24、25、32 に抜 粋転載、一部改変
004	連合艦隊司令 部通信参謀附	日吉移転の経緯	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (12)	寺田貞治	1989/2/6 9頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』25 に抜粋転載、 一部改変
005	長官付従兵	生活・空襲について	地下壕について (13)	寺田貞治	『せいきょう』46 1989/4/10 8・9 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』35、43、44 に抜 粋転載、一部改変
006	東京通信隊、連 合艦隊司令部	乗艦時、日吉の仕事、地 下壕工事、朝鮮人労働者		寺田貞治	『せいきょう』47 1989/6/1 4・5 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』31、36、44 に抜 粋転載一部改変
007	日吉本町住民 歯科医	土地の買収・地下壕工 事について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (15)		『せいきょう』48 1989/7/5 8・9 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』81 に転載
008	宮前住民	土地の買収・地下壕工 事・空襲について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 3頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』28、31、37、43、46、 47に抜神議、一部改変
009	箕輪住民	土地の買収・地下壕工 事・空襲について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 3・4 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』28、31、43、46、 47に抜粋転載、一部改変
010	箕輪住民	土地の買収・地下壕に ついて	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 4頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』28、31 号、47 に 抜粋転載、一部改変
011	日吉本町住民	土地の買収について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 4・5 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』28、31、43、46、 47 に抜粋転載一部改変
012	宮前住民	土地の買収・空襲・地 下壕工事について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 5頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』28、31、43、46 に抜粋転載、一部改変、
012	西明住民	宮前地区で 48 件中 30 件近くの家が焼けた	第五回幹事会報告	_	『会報』3 1989/10/7 2 頁	保存の会	1989/9/15 聞取り、『せい きょう』49 と同じ聞取りか
013	宮前住民	八丈島の地下壕工事・	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 5•6 頁	慶應高校教諭	1989/9/15 に実施
013	西 明住氏	生活の様子	第五回幹事会報告	寸田貝佰	『会報』3 1989/10/7 2頁	保存の会	1303/3/13 亿夫/地
014	日吉住民	地下壕掘削人夫の手 配・世話	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 6頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』31に抜粋転載、 一部改変

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者(聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考
015	蟹ヶ谷住民 海軍気象員	蟹ヶ谷受信所 地下壕について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 6頁	保存の会	『会報』48 に抜粋転載、 一部改変
016	久末住民	蟹ヶ谷地下壕工事 受信所について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 6•7頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』48 に抜粋転載、 一部改変
017	久末住民	蟹ヶ谷地下壕工事・受 信所について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (16)	寺田貞治	『せいきょう』49 1989/10/12 7頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』48 に抜粋転載、 一部改変
018	慶應普通部	いて	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について(17)	寺田貞治	『せいきょう』50 1990/1/10 8•9頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』30、46 に抜粋転 載、一部改変
019	日吉本町住民	綱島海道、南武線、蟹ヶ 谷通信隊について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (17)	寺田貞治	『せいきょう』50 1990/1/10 9頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』46、49 に抜粋転載 一部改変
020	東京警備隊第	東京警備隊の様子、地 下壕、朝鮮人労働者	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (17)	寺田貞治	『せいきょう』50 1990/1/10 10頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』31、41、43、45 に抜粋転載、一部改変
020	七分隊	朝鮮人労働者について	朝鮮人労働者の人数が 判明	記載なし	『会報』3 1989/10/7 5頁	保存の会	
		計理局の仕事、日吉の 生活、空襲、終戦直後	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (17)	寺田貞治	『せいきょう』50 1990/1/10 10・11 頁		『会報』40、43、45、79 に抜粋転載、一部改変
021	海軍省計理局 第三課主計下 士官	戦争末期の日吉、南海 孤島の人肉事件	地下壕の保存に向けて プロジェクトチームが 発足	記載なし	『保存会会報』2 3頁	保存の会	1989/7/14 聞取り実施
_	海军少蟹卫士	能力于如 物形古外の	第4回幹事会報告		『保存会会報』3 2頁	鹿鹿立松粉 於	『今初』42、45)- 针火丸
022	部・中尉	艦政本部、終戦直後の 様子について	連合艦隊可令部日吉台 地下壕について (18)	寺田貞治	『せいきょう』51 1990/4/10 5頁	慶應局校教諭 保存の会	『会報』42、45 に抜粋転載、一部改変
023	海軍航空本部 補給部・中尉	航空本部、地下壕工事、 日吉での生活、終戦直 後の様子について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (18)	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	『会報』31、39、45 に抜 粋転載、一部改変、31 に 氏名の誤記あり
024	海軍 第三〇一〇設	三〇一〇部隊、地下施 設築城、終戦直後	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (18)	寺田貞治	『せいきょう』51 1990/4/10 7頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』29、45、54、55 に抜粋転載、一部改変
024	営隊主計長	朝鮮人労働者について	朝鮮人労働者の人数が 判明	記載なし	『保存会会報』3 1989/10/7 5 頁	保存の会	
025	海軍人事局・ 主計兵曹長	人事局、日吉での生活 について	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (18) 第3回幹事会報告	寺田貞治	『せいきょう』52 1990/7/2 8-10頁 『会報』7 1990/7/12 4頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』31、38、45、79 に抜粋転載、一部改変
		ミッドウェー海戦、日 吉の仕事、空襲、戦後	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (20)	寺田貞治	『せいきょう』53 1990/10/3 3-5 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』37、43、45 に抜 粋転載、一部改変
026	連合艦隊司令 部電気長		第3回幹事会報告	記載なし	『会報』7 1990/7/12 3頁	保存の会	1990/6/27 聞取り実施
İ	III-IE/NA	日吉台地下壕について	第三回幹事会報告	記載なし	『会報』13 1991/8/28 2頁	有隣堂出版	1991/6/25 に実施、有隣 堂出版主催の学習会
027	海軍軍令部第 三部理事生	日吉の仕事・生活、空 襲時、終戦時	連合艦隊司令部日吉台 地下壕について (20)	寺田貞治	『せいきょう』53 1990/10/3 5 頁	慶應高校教諭 保存の会	『会報』41、43、45 に抜 粋転載、一部改変
028	日吉町住民	土地の接収、朝鮮人労 働者、空襲について	日吉台地下壕 続編 2	寺田貞治	『せいきょう』61 1992/7/15 12頁	慶應高校教諭 保存の会	
029	日吉住民	朝鮮人労働者について	日吉台地下壕 続編 2	寺田貞治	『せいきょう』61 1992/7/15 12 頁	慶應高校教諭 保存の会	
030	日吉住民 警備隊	警備隊の仕事、日吉の 生活、地下壕	日吉台地下壕 続編 2	寺田貞治	『せいきょう』61 1992/7/15 12 頁	慶應高校教諭 保存の会	
031	日吉本町住民	地下壕工事について	日吉台地下壕 続編 2 第十回幹事会報告	寺田貞治	『せいきょう』61 1992/7/15 12・13頁 『会報』16	慶應高校教諭 保存の会	1992/2/9 聞取り実施
		朝鮮人労働者、地下壕			1992/3/26 3頁 『せいきょう』61		
032	日吉本町住民	明鮮人労働者、地下塚 工事に伴う家の移動に ついて	第十回幹事会報告	寺田貞治	1992/7/15 13頁 『会報』16 1992/3/26 3頁	慶應高校教諭 保存の会	1992/2/9 聞取り実施
033	日吉住民	地下壕工事、家の移動、 連合艦隊司令部	日吉台地下壕 続編3	寺田貞治	『せいきょう』62 1992/10/30 6頁	慶應高校教諭 保存の会	
034	連合艦隊司令 部・通信員	外信傍受、前線との通 信について	日吉台地下壕 続編3	寺田貞治	『せいきょう』62 1992/10/30 6頁	慶應高校教諭 保存の会	
035	日吉住民	地下壕工事の飯場	日吉台地下壕 続編3	寺田貞治	『せいきょう』62 1992/10/30 6頁	慶應高校教諭 保存の会	
	日吉住民	久末の高射砲陣地につ	日吉台地下壕 続編3		『せいきょう』62 1992/10/30 6頁	慶應高校教諭	
036	四〇一〇部隊 陸軍砲兵隊	WT	第十回幹事会報告	寺田貞治 	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1992/2/22 聞取り実施
		地下壕工事、設営隊、	日吉台地下壕 続編3	土田 長込	『せいきょう』62 1992/10/30 6・7 頁	慶應高校教諭	1992/2/23 聞取り実施
037	日吉住民	兵士の様子	第十一回幹事会報告	寺田貞治	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1036/6/20 国収り夫
		地下壕、兵隊終戦時について	○○さんの話 (5/5)	記載なし	『第 47 回日吉祭 日 吉の昔ちょっとわか る本』8・9 頁	日吉の昔知っ てる会?	1996/5/5 聞取り実施
000	古口存入 1 777 ket -4×	加松 松田 一つ) マ	日吉台地下壕 続編3	土田古沙	『せいきょう』62 1992/10/30 7頁	慶應高校教諭	1992/2/23 聞取り実施、
038	朝鮮人労働者	朝鮮人飯場について	第十一回幹事会報告	寺田貞治	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	途中で調査を断られた

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者(聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考
	日吉住民	朝鮮人労働者・飯場に	日吉台地下壕 続編3	to the	『せいきょう』62 1992/10/30 7頁	慶應高校教諭	1000 (0 (00 HHT))
039	朝鮮人労働者	ついて	第十一回幹事会報告	寺田貞治 	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1992/2/23 聞取り実施
040	日吉住民	朝鮮人労働者・飯場について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 12 頁	慶應高校教諭 保存の会	
041	日吉住民	朝鮮人労働者について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63	慶應高校教諭 保存の会	
042	日吉住民	地下壕工事、飯場、朝 鮮人労働者について	日吉台地下壕 続編4	寺田貞治	『せいきょう』63	慶應高校教諭 保存の会	
043	日吉住民	地下壕工事、飯場、朝 鮮人労働者について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 12・13 頁	慶應高校教諭	
044	日吉住民	地下壕工事、飯場、朝 鮮人労働者	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 13 頁	慶應高校教諭 保存の会	
045	蟹ヶ谷通信隊 暗合科班長	通信隊の仕事・地下壕・ 生活・捕虜について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 13・14頁	慶應高校教諭 保存の会	
046	日吉本町住民	弟(連合艦隊司令部通信兵)がどこにいるか 教えてもらえなかった	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 14頁	慶應高校教諭 保存の会	
047	日吉本町住民	地下壕工事に伴う家の 移動について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 14 頁	慶應高校教諭 保存の会	
048	連合艦隊司令部暗号隊	日吉の通信設備、仕事、 生活について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	『せいきょう』63 1993/1/15 14 頁	慶應高校教諭 保存の会	
046	高田住民	記録なし	第四回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 2 頁	保存の会	1992/8/11 聞取り実施
049	日吉本町住民	地下壕工事・家の移動、 飯場について	日吉台地下壕 続編 4	寺田貞治	·	慶應高校教諭 保存の会	
050	日吉本町住民	地下壕工事、家の移動、 設営隊、労働者	日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	
051	日吉本町住民	地下壕工事、設営隊、 土地の買収について	日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治	『せいきょう』66 1993/10/30 9・10頁	慶應高校教諭 保存の会	
052	高田住民	地下壕掘削・高射砲陣 地について	日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	
053	久末住民 陸軍高射砲部隊		日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	
054	久末住民 近衛兵	平塚の地下壕、久末高 射砲陣地、高射砲部隊	日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治	『せいきょう』66 1993/10/30 11 頁	慶應高校教諭 保存の会	
055	久末住民	蟹ヶ谷通信所・地下壕 について	日吉台地下壕 続編 5	寺田貞治		慶應高校教諭 保存の会	
056	軍令部警備隊	記録なし	第 4 回幹事会報告	茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 2頁	保存の会	
057	不明	被災届を当時市役所に 出した	第 4 回幹事会報告	茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 2 頁	保存の会	70 歳の老婆
058	日吉本町住民	記録なし	第 4 回幹事会報告	記載なし	『会報』3 1989/10/7 2 頁	保存の会	1989/8/6 聞取り実施 NHK が 8/7 に放映
059	連合艦隊司令部、設営隊(8名)	記録なし	第 4 回幹事会報告	記載なし	『会報』3 1989/10/7 2 頁	保存の会	原宿の水交会で聞き取り 調査実施
060	日吉台地下壕 関係者(11名)		第 4 回幹事会報告	記載なし	『会報』3 1989/10/7 2 頁	保存の会	
061	日吉本町住民	食糧事情、空襲、地下 壕建設、住民との関係	敗戦前後の日吉の様子	茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 3・4 頁	保存の会	1989/7/29 聞取り実施
062	司令部警備隊	食糧事情、空襲、地下 壕建設、住民との関係	敗戦前後の日吉の様子	茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 3・4 頁	保存の会	1989/7/29 聞取り実施、 夫妻、夫は 020 と同一か
063	地元住民	食糧事情、空襲、地下 壕建設、住民との関係	敗戦前後の日吉の様子	茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 3・4 頁	保存の会	1989/7/29 聞取り実施、 親子、009、010と同一か
064	地元住民 (複数)	食糧事情、空襲、地下 壕建設、住民との関係		茂呂秀宏	『会報』3 1989/10/7 3・4 頁	保存の会	1989/7/29 聞取り実施
065	蟹ヶ谷住民	蟹ヶ谷の地下壕につい て	蟹ヶ谷にも地下壕が存 在	記載なし	『会報』3 1989/10/7 4頁	保存の会	
066	海軍警備隊	当時の様子	第 1 回幹事会報告	記載なし	『会報』7 1990/7/12 2頁	保存の会	
067	不明		第7回幹事会報告	記載なし	『会報』14 1991/12/18 3頁	保存の会	1991/10/17・11/7 聞取 り実施
068	連合艦隊司令 部警備隊曹長	歩哨や従兵の仕事。朝鮮 人は夜も地下壕を掘削。	第十回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 2頁	保存の会	1992/1/25 聞取り実施
069	獅子ヶ谷地下 壕付近の住民	記録なし	第十回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4頁	記録なし	講演会?主催・日時など 不明
070	連合艦隊司令	記録なし	第十回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1992/2/21 聞取り実施
	部通信隊	記録なし	第五回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 3頁	保存の会	1992/9/4 実施、地下壕 見学の打ち合わせ?
071	保福寺住職	記録なし	第十一回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1992/2/22 聞取り実施
072	○○建設 朝鮮人	記録なし	第十一回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4頁	保存の会	1992/2/23 聞取り実施
073	矢上橋付近住 民	記録なし	第十一回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4 頁	保存の会	1992/2/25 聞取り実施

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者(聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考
074	矢上橋付近住 民	記録なし	第十一回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4 頁	保存の会	1992/2/25 聞取り実施
	地下境付诉住	記録なし	第十一回幹事会報告	記載なし	『会報』16 1992/3/26 4 頁	保存の会	1992/2/27 聞取り実施
075	地下壕付近住 民	兵隊・兵舎・戦後の様 子	○○さんの話 (6/25)	記載なし	『第 47 回日吉祭 日 吉の昔ちょっとわか る本』 9・10 頁	日吉の昔知っ てる会?	1996/6/25 聞取り実施
	海軍通信隊	記録なし	第一回幹事会報告	記載なし	『会報』18 1992/6/24 2 頁	保存の会	1992/5/5 に実施、地下 壕見学のみ?
077	鶴見さかえ地 区から団地に 移った人々	記録なし	第四回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 2頁	保存の会	1992/7/21 聞取り実施
078	日吉本町住民	記録なし	第四回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 2 頁	保存の会	1992/8/11 聞取り実施
079	日吉本町住民	記録なし	第四回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 2 頁	保存の会	1992/8/11 聞取り実施
080	日吉本町住民	記録なし	第四回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 3頁	保存の会	1992/8/13 聞取り実施
081	日吉住民	記録なし	第五回幹事会報告	記載なし	『会報』19 1992/10/14 3頁	保存の会	1992/8/30 聞取り実施
082	TID 1 TID	記録なし	第六回幹事会報告	記載なし	『会報』20 1992/11/1 4頁	保存の会	1992/10/3 に実施、地下 壕見学のみ?
083	蟹ヶ谷地下壕 付近住民	蟹ヶ谷地下壕の隊員は 2人ずつ交代で作業	水浸しの蟹ヶ谷地下壕 に入って	岡上そう	『会報』24 1993/9/22 3頁	保存の会	1993/7/18 聞取り実施
	海里市立敬 供	記録なし	第五回幹事会報告	記載なし	『会報』24 1993/9/22 8頁	保存の会	1993/8/19 聞取り実施
084	海軍東京警備 隊	記録なし	「平和のための戦争展」 を成功させましょう	記載なし	『会報』26 1994/1/12 3頁	保存の会	1994/2/13 に実施、「平 和のための戦争展」シン ポジウム・講演会
085	日吉台地下壕 掘削従事者	記録なし	第六回幹事会報告	記載なし	『会報』25 1993/11/17 7頁	保存の会	1993/9/4 聞取り実施
086	大倉山	記録なし	第十二回幹事会報告	記載なし	『会報』28 1994/6/9 7頁	保存の会	1994/2/28 聞取り実施
		戦時中の慶應義塾と戦 争体験	日吉台地下壕保存の会連 続講演会および一九九五 年度総会開催される	記載なし	『保存会会報』33 1995/4/24 3頁	保存の会	1995/4/15 に 実 施、 1995 年度総会の講演会
			○○先生講演要旨 (1) 「追憶の中から – 戦時 下の日吉キャンパス –	記載なし 谷藤	『保存会会報』67 2003/7/2 7頁		
087	文学部学生	戦時下の日吉キャンパ ス	追憶の中から-戦時下 の日吉キャンパスを語 る- (2) 講演要旨		『会報』68 2003/9/16 5・9・10 頁	保存の会	2003/5/17 に実施 2003 年度総会の講演会
			2003 年度地下壕保存の 会記念講演会 追憶の中 から一戦時下の日吉キャ ンパスを語る 最終回		『会報』69 2004/1/15 10·11頁		
088	地元住民	当時の様子	神奈川新聞記事	記載なし	『会報』40 1996/2/4 3 頁	日吉の昔知っ てる会?	1996 に実施
089	蟹ヶ谷通信隊	記録なし	幹事会報告第四回	記載なし	『会報』40 1996/2/4 7頁	保存の会	1996/8/18 聞取り実施
		記録なし	幹事会報告第四回	記載なし	『会報』40 1996/2/4 7頁	保存の会	1996/8/18 聞取り実施
	海軍東京通信	蟹ヶ谷通信隊について	「体験者の話を聞く会」 報告 1998 年度活動報告	亀岡敦子 (保存の会)	『会報』48 1999/1/20 3頁 『会報』50	保存の会	1998/12/5 に実施、学習 会
	隊蟹ヶ谷分遣 隊		99 川崎・横浜平和のための戦争展第7回	亀岡敦子	1999/5/26 4頁 『会報』50 1999/5/26 1頁		1999/6/13 に実施、「99
		特攻隊について	「99 川崎・横浜平和 のための戦争展」報告		『会報』51 1999/9/29 3頁	保存の会	川崎・横浜平和のための 戦争展第7回」の講演会
091	田奈部隊	記録なし	幹事会報告第四回	寺田貞治	『会報』40 1996/2/4 7 頁	慶應高校教諭 保存の会	1996/8/23 聞取り実施
		記録なし	日吉台地下壕保存の会 第9回一九九七年度定 期総会開催される	記載なし	『会報』42 1997/6/3 3頁	保存の会	1997/4/26 に実施、講演 会
092	連合艦隊司令 部通信 (暗号) 担当・海軍少	戦艦大和の最後	「体験者の話を聞く会」 報告 1998 年度活動報告	亀岡敦子 (保存の会)	『会報』48 1999/1/20 3頁 『会報』50 1999/5/26 4頁	保存の会	1998/12/5 に実施、学習 会
	尉	大和特攻について	第 20 回(2008 年度) 総会のお知らせ 2008 年度総会開催さ れる 総会報告	亀岡敦子 (保存の会)	『会報』87 2008/4/17 1・2 頁 『会報』88 2008/6/28 1・2 頁	保存の会	2008 年度総会の講演会
093	予科生	戦時中の塾生の様子	戦時中の塾生の様子 ○○さん(昭 18・経) の話 (7/26)	記載なし	『第 47 回日吉祭 日 吉の昔ちょっとわか る本』2 頁	日吉の昔知っ てる会?	1996/7/26 聞取り実施

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者 (聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考
093			第六回横浜・川崎平和 のための戦争展		『会報』46 1998/6/24 2 頁		第六回横浜・川崎平和の
続き	中尉	記録なし	横浜・川崎平和のため の戦争展アンケート (感想) 集	記載なし	『会報』47 1998/9/24 5頁	保存の会	ための戦争展講演会
094	海軍工廠勤務 の台湾少年工	記録なし	「98 平和のための戦争 展かながわ」を終わっ て	佐相康雄	『会報』47 1998/9/24 6頁	保存の会	1998/8/15 に実施、「98 平和のための戦争展かな がわ」の講演会
	505 設営隊	石川島造船所、霞が関・ 日吉・大倉山の地下壕、	[特集] ○○さんから の大倉山の大地下壕 (倉庫) についてのお 話	茂呂秀宏	『会報』56 2001/1/25 3-5 頁		
095	海軍技術下士官	朝鮮人労働者の扱い、 松代について	[特集] ○○さんが地 下壕建設にかかわった お話(前号からの続編)		2001/4/18 5.6頁	保存の会	2000/11/4 聞取り実施
			活動の記録 2000.10-2001.1		『会報』56 2001/1/25 8頁		
096	大倉山の熊野 神社付近住民	終戦時の地下壕の様子	[特集]李圭植さんか らの大倉山の大地下壕 (倉庫) についてのお話	(李圭植・孫正	『会報』56 2001/1/25 3-5 頁	保存の会	2000/11/4 聞取り実施
		終戦時の地下壕の様子	[特集] 李圭植さんか らの大倉山の大地下壕 (倉庫) についてのお話		『会報』56 2001/1/25 3-5 頁	保存の会	2000/12/10 聞取り実施
097	大倉山の熊野 神社付近住民	大倉山の地下壕工事・ 書類焼却の様子・米軍 占領の状況	[特集] 李圭植さんが地 下壕建設にかかわった お話(前号からの続編) 活動の記録	茂呂秀宏 (茂呂秀宏・谷 藤・喜田)	『会報』57 2001/4/18 6頁 『会報』57	保存の会	2001/1/21 聞取り実施
000	韓国人・地下	==0=16	2001.1-2001.4 活動の記録		2001/4/18 8 頁 『会報』56	/0.4.0.0	
098	壕工事労働者	記録なし	2000.10-2001.1 投稿 大聖院裏山(仮称	記載なし	2001/1/25 8頁 『会報』57	保存の会	2000/12/10 聞取り実施
099	記載なし	地下壕掘削当時の話	日吉の丘公園)の地下壕	東海林次男	2001/4/18 3·4頁 『会報』58	保存の会	2001/2/18 聞取り実施
100	<u></u> 工爭刀 関 日	記録なし	2000 年度活動報告	記載なし	2001/7/6 4頁	保存の会	2000/11/4 聞取り実施
101	日吉台地下壕 工事労働者	記録なし	2000 年度活動報告	記載なし	『会報』58 2001/7/6 4頁	保存の会	2000/12/10 聞取り実施
102	日吉台地下壕 工事労働者	記録なし	2000 年度活動報告	記載なし	『会報』58 2001/7/6 4頁	保存の会	2001/1/21 聞取り実施
103	慶應義塾職員	記録なし	活動の記録 2001.4-6	記載なし	『会報』58 2001/7/6 8頁	保存の会	2001/5/12 聞取り実施
104	理事生 (艦隊 経費担当)	日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	会員の皆様へ学習会の ご案内 日吉の海軍で 仕事をしていた人から 話を聞く会 10/20 歴史を学ぶ学習 されていた元理事生、前 通信兵の体験を聞く(1)	富沢慎吾 (保存の会)	『会報』59 2001/9/18 9頁 『会報』60 2001/11/28 8・9頁	保存の会	2001/10/20 の学習会
			2001/10/20 学習会元 理事生、通信兵の方々 から話を聞く会(続編)		『会報』61 2002/1/29 6-8 頁		
	省人事局賜金	日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	同上	富沢慎吾 (保存の会)	同上	保存の会	2001/10/20 の学習会
106	理事生(軍令 部第三部)	日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	同上	富沢慎吾 (保存の会)	同上	保存の会	2001/10/20 の学習会
107	理事生(艦隊 経費担当)	日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	同上	富沢慎吾 (保存の会)	同上	保存の会	2001/10/20 の学習会
		日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	同上	富沢慎吾 (保存の会)	同上	保存の会	2001/10/20 の学習会
	ま 人 御 四 マ に	日吉に来た経緯・仕事 内容、空襲・終戦時の 様子について	同上	富沢慎吾 (保存の会)	同上	保存の会	2001/10/20 の学習会
109	連合艦隊通信 兵	日吉での生活	2008 年度総会開催される 総会報告	亀岡敦子	『会報』88 2008/6/28 1·2 頁	保存の会	2008 年度総会の講演会 の質疑応答
		地下壕内に電話機が あった		山田譲	『会報』104 2012/1/20 15頁	保存の会	2010/5/29 聞取り実施
110	箕輪住民	記録なし	活動の記録 2002年 6月-9月	記載なし	『会報』64 2002/9/17 12頁	保存の会	2002/8/16 聞取り実施
111	小学生 (大綱小学校)	空襲、大綱小学校・大 倉山・米軍について		茂呂秀宏	『会報』86 2008/2/6 8-10 頁	保存の会	2008/1/8 の港北区菊名 在住市民からの聞き取り 調査記録より抜粋
112	小学生 (大綱小学校)	空襲、大綱小学校・大 倉山・米軍について	調査報告 大綱小学校 時代の戦争体験記	茂呂秀宏	『会報』86 2008/2/6 8-10 頁	保存の会	同上

ID	当時の立場	概要	タイトル	著者 (聞取者)	掲載誌	著者等の所属	備考						
113	箕輪住民	米軍による箕輪地域へ の空襲について	報告 日吉地域におけ る空襲被害実態調査始	記載なし	『会報』87	保存の会							
			まる		2008/4/17 3・4 頁		2008/2/27 と 4/4 に 聞 取り実施						
			活動の記録 (2008年 2月-4月)		『会報』87 2008/4/17 12 頁								
		日吉の空襲について	総会資料 2007 年度活動報告	記載なし	『会報』88 2008/6/28 3頁	保存の会	上記の聞取りと同じか?						
114	₹7 43. **, 1	八十段階段下の谷戸の	総会資料 2007年活	打掛ね1	『会報』88	/0/セの今	日吉の丘公園周辺見学会						
114	記録なし 	戦中・戦後の建物等について	動報告	記載なし	2008/6/28 3頁	保存の会	時、氏名表記なし						
115	記録なし	大綱小時代の戦争体験	総会資料 2007 年度活動報告	記載なし	『会報』88 2008/6/28 3頁	保存の会	2008/1/8 聞取りの 112、 113 か?						
116	日吉住民	日吉の空襲について	2009 年度総会 2008 年度活動報告	記載なし	『会報』92 2009/6/19 11・12頁	保存の会	2008/6/11 ~ 10/4 に計 6 回						
117	海軍人事局理 事生	姉(理事生)が高松宮 からラブレターをもら い、断わる返事を代筆	☆国立になるとわるく なる?!	山田譲	『会報』95 2010/1/26 14 頁	保存の会							
118	日吉勤務	第二校舎内の動物解 剖。蝮谷の蝮。	第四回ガイド養成講座	谷藤	『会報』97 2010/6/16 12頁	保存の会	第四回ガイド養成講座 (2010/4/17) の学習会						
119		大倉山での寮生活につ いて	報告 大倉精神文化研究 所と日吉台地下壕保存 の会の合同聞き取り - 戦後日吉寮は大倉山に - 活動の記録(2011年	亀岡敦子 (亀岡敦子・他)									
								4月-6月)		2011/6/20 16頁			
								慶應景との関わり	活 男 報 盲	祀戦なし	2012/6/29 8頁	文化研究所	2011/6/24 に実施
			寄宿舎について	報告 日吉台地下壕保存の会公開講座に参加して	小田嶋鉄朗		『会報』109 2013/4/24 3 頁	港北区区以推 進課	日吉台地下壕保存の会公 開講座(2013年3月9日)				
		120	慶應経済学部 予科性・富嶽 荘寮生	大倉山での寮生活につ いて	報告 大倉精神文化研究 所と日吉台地下壕保存 の会の合同聞き取り - 戦後日吉寮は大倉山に -	亀岡敦子 (亀岡敦子・他)	『会報』102	地下壕保存の	2011/4/26 に実施				
							2011/6/20 15頁	文化研究所、					
				慶應寮との関わり	活動の記録 (2011年		『会報』102	中央大学、慶 應義塾大学					
101			4月-6月) 連載 地下壕設備アレ	 山田譲	2011/6/20 16 頁 『会報』104	加去の合	2011, 0, 21, 1-20,						
121		通信線の説明	コレ【その4】電線		2012/1/20 15 頁 地底研究会 昭和 44	保存の会							
122	地元老人	地下壕工事の廃土について	『わが足の下 日吉地 下施設の秘密』	記載なし	年度日吉祭グループ 参加 1972年 2頁	地底研究会							
123	地下壕付近住 民	記録なし	同上	記載なし	同 26 頁	地底研究会							
124	地下壕建設工 事最高責任者	記録なし	同上	記載なし	同 28頁	地底研究会 (NHK 担当)							
	少将	記録なし	同上	記載なし	同 28頁	地底研究会 (NHK 担当)							
126	高校校舎内で 事務	空襲時・地下壕につい て	同上	記載なし	同 28頁	地底研究会	1969/7/9 聞取り実施						
127	普通部地下壕 付近住民	記録なし	同上	記載なし	同 30頁	地底研究会	1969/7/14 聞取り実施						
	海軍少将	記録なし	同上	記載なし	同 31 頁	地底研究会	1969/8/22 聞取り実施						
129	地下壕建設最 高責任者	記録なし	同上	記載なし	同 35 頁	地底研究会	1969/10/19 聞取り実施						
130	記録なし	記録なし	同上	記載なし	同 35 頁	地底研究会	1969/10/19 聞取り実施						
	予科生(藤原	藤百丁十零の労歩生	藤原工業大学での学校		『第 47 回日吉祭 日	日吉の昔知っ							
131		藤原工大での学校生 活、谷村学部長のこと	生活 ○○さん (本塾 高校長)の話 (8/22)	記載なし	吉の昔ちょっとわかる本』 2・3 頁	てる会?	1996/8/22 聞取り実施						
	廠ほか 暗号郵隊海書	大淀での勤務時・地下	連合艦隊司令部での										
132	明亏部隊伊音 係	場の様子	生活 ○○さんの話 (7/31)	記載なし 	同 6頁	同上	1996/7/31 聞取り実施						
133	人事局・海軍 大佐	人事局勤務時の様子	日吉での人事局 ○○ さん(元海軍大佐)の	記載なし	同 6・7頁	同上	1996/8/27 聞取り実施						
124	日吉住民	地下壕建設、戦後	話 (8/27) ○○さんの話 (5/5)	記載なし	同 8頁	 同上	 1996/5/5 聞取り実施						
	日吉住民	空襲、戦後の様子	○○さんの話 (6/15)	記載なし	同 9頁	同上	1996/6/15 聞取り実施						
	日吉住民	高射砲、地下壕	○○さんの話 (6/15)	記載なし	同 9頁	同上	1996/6/15 聞取り実施						
-		家の移動、進駐軍	○○さんの話 (7/17)	記載なし	同 10頁	同上	1996/7/17 聞取り実施						
		司令部日吉移転の噂	○○さんの話 (7/21)	記載なし	同 10頁	同上	1996/7/21 聞取り実施						
-		進駐軍について 胡鮮人を担し進駐軍	○○さんの話 (7/29)	記載なし	同 11頁	同上	1996/7/29 聞取り実施						
	EMクラブの	朝鮮人飯場・進駐軍戦後・進駐軍について	○○さんの話 (7/29) ○○さんの話 (7/29)	記載なし記載なし	同 11頁 同 11頁	同上 同上	1996/7/29 聞取り実施 1996/7/29 聞取り実施						
\vdash	バーテン 田奈部隊女子		,										
142	挺身隊	田奈部隊について	田奈部隊	記載なし	同 16頁	同上	093 と同一?						

慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究 2011 ~ 2013 年度科学研究費補助金 研究成果報告書

2014年3月25日

編集:安藤広道

108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

 $Phone \bullet Fax \div 03\text{-}5427\text{-}1051 \quad E\text{-}mail \div ando@flet.keio.ac.jp}$

印刷 株式会社東プリ